

の尾崎あり、山門二階かゞらふき也、鳥居正面川東あり、同大鳥居三野の川ふちニ在之上官の居所、北は高室、南は尾之上、東ハ美行、此外之惣社家居所は、右之間を神前まで在之あり、以上社頭五拾一字と申せ共、近代者如此見へ來候、先年之繪圖、代々之御書物は、社務大森殿ニ傳レとも、依盛衰經年序者、爲筆境不正、爲一社政是也、

社家次第

一、社家人之次第

神主 代共 祝部 代共 幣渡 代共 借り屋 權祝部
カリンノホウリ也
 番頭 三人、以上也、此三人ノ殿、月二十日、御番也、
 禰宜、老者、左右行事、二老之衆、
 脇番 十二、以上神主、大藤内、社務
 神人 十二、飯炊女方 三人、雜支 六人、
 鬼言人 六人、以上
 神樂男 五人、乙女 八人、保頭 六人、
 馬屋方 六人、以上

社家衆座席

裝束

髪そりかた之衆六人、本宮之分

衆徒かた之衆六人、同

法師方之衆三人、同

一、社家衆座敷之事

御火鉢之左は神主、右は祝部相向テあり、

四條疊之左は番頭、右は借り屋、

左之次は一老二老之衆、

右之次は行事政所之衆、

此外は神仁社中衆、何モとし次第ナリ、

一、冠よ上は梧之頭之付たるあやを黒く染、悉りよは赤地之薄色を付、水此緒よひむらさき上下同前、白たひよあやくをもち、行幸之時者沓をはき、是神主祝部分也、但常よは左折之ゑほしよ、上下白く、をゑむろこり此扇よても不苦、又御神事之時者、右のくるあやうそく此上よ、白きうす衣、着する也、

一、左折の烏帽子よ、上下白あやうそく、ずゑむろこり此扇、白たひ、是ハ三人

の番かゝら、右之六上官之衆着る也、大神事之時も是あり、

一、常此立ゑ不しよ、かりやを染の上よ白をうは、是等ハ老者、一老、十二人之脇番、此外神仁分之衆着る也、但上衣よ黄蘗染、桃色、かりやを色、以上此三色の多少差別あり、

一、御所ゑほしよ、鶴龜の付たるかちん染の上下を着するハ、神主、祝部、下代分也、但上衣よあさきこほりとうを色、何も餘多の多少差別在之、

一、こぢひゑほし、楡形ゑほしあとい、童子の衆、又ハ老とる衆の着するあり、是よ色々理り在之、

一、かゝをそりゑる衆ハ、白をうは、白とびよ、打かけを着する也、是よも三段之きしき在之、

以上

正月出仕

一、正月出仕之事、三ヶ日之間ハ、神前よ惣社中相詰、四日よハ從神前直よ神主祝部、此兩家へ各出仕被申也、其以後面々此年頭在之、

一、惣社中之内よ、無力者堪忍不續者在之ハ、右之兩家へ奉公可申、若武家へ奉公仕候へも、重而社家へ返り申事不成者也、但右之兩家之衆ハ、公儀へ

奉公被申事も在之、其ゆへハ過分の知行を抱へ、殊ニハ神慮社家を相に、孝可申ためよ、其時々ハ應多武家へ之償可在之、

一、備中備後當社御一生也、然よ備中宮内之慈勸寺屋敷者、備前之神主屋敷也、當社中衆備中へ到來之時者、是則宿坊也、並當社之内山神西藏坊ハ、備中之社家衆當社へ到來之時、是則宿坊也、同備後之社中衆兩社へ參宮之時ハ、有木寺之内玉泉坊、是則宿坊也、並備後へ兩社之衆參宮之時者、備後之宮内大供事宿坊也、

一、山神山神力寺、有木山昌運寺、大谷山八徳寺、是社僧也、但此内六ヶ寺者、御神役迄よて、餘之法役一切無之、同祈念之時者、本宮よて執行、正宮よてハ一切無之、此外寺僧ハ諸檀那佛道之執行在之、然間神前よハ出入無之、並社中衆も其親類手次不道間よ佛事之執行、其座敷へ立入時者、一七日之間神前へハ不可有之、其内よも輕重在之、委ハ穢汚帳よゑるせり、
一、廻國聖當社へ法花經奉納在之、其請取ハ從大森之家出る也、同札錢者拾貳文、又ハ六道錢とて六文も出る、則是奉納所之燈明ニ加る也、右之請取を不取聖ハ、當國之海道成間敷者也、

社僧タルベキ寺院

穢汚帳
廻國聖法
花經ヲ奉
納ス
六道錢

商人及ビ
漁夫等賣
物ノ初尾
ヲ納ム

五節句ノ
守札

田植

一、國中諸商人并從山中材木薪等同人足駒之足浦人船中商人獵漁等まても當社へハ判形をとり其上以前々之手次第賣買調諸初尾神納之法度在之其輕重ハ委社帳ハ被驗右之諸賣物之初尾苧屋政所より取揃上る也毎年六月廿八日神前之町ニても同前まり

一、正月十一日五月五日九月九日神前よて國中之祈念在之其札守等從神主被送配也五節供正月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日也

一、六月廿八日嘉例之御田植津高郡首村大夫神子白布三段よて御幡を一本調同扇帶幣よて是をかざる也其役錢とて中郡より備中之堺までの神子さかいり不と居申共面々之前より出錢を三十三文宛つあきとる也

同中郡あた之村大夫神子青布三段よて御幡を一本相調其役請とて中郡よ居申神子さをのまへより悉く如右之つあき取る也

同東郡土師村之大夫神子（マ）布三段よて御幡一不ん相調其役錢とて東郡居申神子さをのまへより如右之悉くつあき取也然者六月廿七日之晚よ正面村よ到來し此三人之神子さをのかしら大森の家よ爲案内

四月祭禮日

九月祭禮日

國內神社祭禮ノト
キハ樂頭
ハス
神人ヲ遣

と禮式廿疋宛よて見舞在之彼等身程之郡中よあるへき不との小神子小さを等までも悉召連廿八日よハ神前拜殿よて卯刻より申之前までそれくハ家職面々の爲業と神樂を相調是則年中國中又ハ他國までも徘徊其多んぞく等までも相續之ため此加役也若此道場よ希絶ある物也則爲面々と國中之出仕を相留るへき者也昔は御幡六本也

一、三月十九日は備中之神事也當社も同前社役入目等は社帳よ委在之

一、卯月ニ入卯日二つあまを後の卯三つあまは中之卯祭禮相調る又ハ初卯も神役也竝三野之郡酒下明神之祭り當社の次之日也春秋之神事も不斷も如此當社より樂頭とて神人二人かまらす下るまり

一、九月ニ入申之日二ツあまを後の三ツあまを中の申祭禮あり社役は右同前同酒下又次日也

一、國中神社よ祭禮又はいかやう此神事はある時者從當社樂頭とて神人二人ハ罷出其裁判申付是苧屋之家より延國と申社人差遣也社務ヨリハ助景ト申社人出ル也

一、國中不し屋さを神子神事仕時者從當社助景と申社人罷出申付也但彼

等烏帽子あとき度と申者よもゆるし令遣也、

一、國中市町よて万賣物の諸初尾、六さい取申て上申は、借屋より奉行長光と申社人差遣役也、

一、國中浦々獵師同鹽濱舟役(綱カ)興(興カ)之かし役とて、御部御菜之魚、鯛百廿喉、

同御數の物とて、いあ(イ)の魚、せい(セ)の魚、三百六十宛、春夏秋冬、兒島中浦々の多少を以支配シ、祝部之家へ上る、其奉行は徳常と申社人也、同波のえあ

とて鹽た(シ)ら卅三俵宛、如右之輕重之支配を以、是も同所へ集るあり、
一、十二月朔日ヨリ同廿五日まで、國中薪役片荷取とて、同馬役人役悉く毎日上下之山人上申也、其奉行ハ預りと申社人也、毎年同前、

桂木
青井葛

一、津高郡勝尾村より、桂木同青井葛と申物を、毎年卯月卯日上申也、登(ト)ま(マ)花米(ハ)エ(エ)て壹斗貳升相そへ、其日之番衆請取也、マサキノカツラ、ヒカケカツラ共云、

一、同併和村、菅野村、日應寺村より、榊とて參候、同萱薙とて十二枚、荒ぶも卅

三枚、六月廿五日、十二月廿八日よ必上申、其日之番衆請取、
一、同田原村、深搦村、長野村、何も五ヶ村より、三歳木とて薪十二ヶ、おこ(オ)炭

五ヶ、かた(カ)荷(ホ)秋(アキ)二季之祭よ上るまり、其日之番衆一荷片荷は、請取、残るは政所へ上るまり、

一、同十二名より悉く祭禮調申、其入目物數の事は委社帳よ可在之、六月廿八日ノ御搦(搦カ)も、十二名ヨリ十二本ノ役有、

一、三月十九日御日供、卯時ニ大百度、辰時より六座之神樂、是光吉名より調也、

一、卯月卯日御神事同前、是重松名ヨリ調、

一、六月廿八日、大御供御膳之數七拾五膳、但大小あり、其外社役之事は右如申、是枝福名、末吉名、小吉竹名、一久名より調上る也、御太刀箱に入、從國主、御弓錦ノ袋に入、鏑(副カ)一手相剩、從御國主、馬鞍鐙共ニ同前、御神樂錢拾貳貫

同前、御參錢拾貳貫文同前、是以上從國守殿、
一、九月申之祭禮、日供御膳之數七拾五膳、神事は如常之、是常持名、菊武名、徳常名より調、同神前諸役調之上リニ、餅を大床より面四方へまけ、氏子童子共是を取遊也、同をふさめ此馬は、國主より一疋、同奉行より一疋、神主祝部より二疋、何も馬數は六ツ、馬之先へは舍人之藤次、白か(白)ひ(ひ)ら(ら)を上

六座神樂

神返送

にえたり、こぬらとの付さるえうぬをも、たちを取、楯形を不しをき、白
 えちほたけ、先に立、二番に同え不しをき、鶴龜の付さる上下をき、弓を
 袋に入、其上を十二所ゆひ、其上に倭裝束をき、二番に身此廻前同前鉾を
 錦之袋に入、上を十二所ゆひ、三番に馬の口取色々の兵具物之具をし、二
 人行也、其次やふさめをぬる仁ハ馬に乗、如此面々同前に御池の廻を三
 返廻し、是以後的を三所に立、北より南へ懸射る也、以上の數三六之十八
 也、此外願之的同馬等之事も、祈念次第其數不定、

一、十月神送り神返ヲ御悅松延名、重分名、大荒田名より相調る、

一、十二月御簾替、を、をろし、同御祝之物、彼是其數七度在之、則安名、小行吉
 名、黒川名相調る、

一、同廿五日、狛鳥とて、山形三ヶ村より鳩二番參候、則其羽にて御内之す、
 をえき申候、同三鳥とて三番はいり候、是は御正月に被遣候、

一、同廿八日ニ神子座之頭より、御えけとて上官衆の門に御幣を立をらい
 申也、幡共御被共御基共申、此三ツノ名、其時々
 ヨル也、子細多し、

一、御節會神事、同(マ)とて御供參る、白米同黒米、御ぢんごさい膳數大小百

廿八膳、高付懸えん、さん付、へき、くきやう、是皆爲神事此時ハ仕替也、

一、神前より下物之事、參錢は當番之衆支配可有之、但大小よらす、あまに
(衍カ)
 つあるきある錢は、神主へ上り候、同武具、いゑやう、馬等も、則神主之家へ、
 同布、と、番扇、荒麻等之類ハ、祝部之家へ渡り候、同神樂錢ハ大小共ニ三
 ツ之内、一分ハ其まゝ、神前に置、神主所へ、一分ハ其御師所へ、一分ハ神子
 座之衆支配、神樂者大小三通り在之、何も支配ハ右同前、神樂ハ一神子之
 役也、は無言、但うらあひ詫宣ふと所望之女房かゝ在之ハ、北之御前よて
 いうやう共其意さるべし、此神前の役神子ハ、惣別餘役を一切取樣あき
 者也、又此類の神子ハ、せれくニ在之、

文明三年六月十三日

惣社家(花押)

社僧中(花押)

社務政所殿

右之條々者、先例之趣互承、手次次第に如斯に候、誠に中絶を諸事遅々
 仕候條、以來爲惣中之以惣談申置者也、此上相違之輩於在之者、神主祝部
 從兩家萬事可被成下知者也、仍爲後日之如件、

禪定院小
五月會

文明三年雜載

一八四

〔大乘院日記目錄〕三 五月五日、禪定院小五月會始行、

〔經覺私要鈔〕六七十 五月四日丙子、齋

一、自禪定院有書狀明日可在小五月、可來見之由被申送、自一日湯治腰痛在之間、雖有見物之志、難罷出之由返答了、

五日丁丑

一、於門跡有小五月、猿樂宇治守喜久云々、昨日以使者可見物之由自門跡雖申賜、腰所勞六借之間、難出之由返答了、只今同篇也、

六日戊寅、齋

一、今日小五月、於天滿社在之云々、

七日己卯、齋

一、今日小五月、於若宮殿在之云々、

八日庚辰、齋

一、小五月、於着到殿前在之云々、

廿九日辛丑、林雨以外事也、

一、自小五月、守菊大夫、并兒一人、扈僧猿樂一人、合三人祇候、今日於吉野可有

猿樂

天滿社小
五月會

若宮殿同

着到殿同

猿樂師守
菊大夫等
吉野二向

天滿法樂
心經

花會

深井滋光

須田滿信

鳥羽信家
廣川忠廣

布下盛慶

五月會

朝重爲光
同貞俊

猿樂之間、乞暇罷下云々、

〔經覺私要鈔〕五七十 正月廿五日戊戌、雨下

天滿法樂心經二十五卷讀了、○コノ後、屢之ヲ行フコトアレ、ドモ異事ナキモノヲ略ス、

〔守矢氏舊記〕○坤信濃 文明三年卯花會

一、宮頭 深井肥前守滋光、御符之禮三貫三百文、使孫六、頭役拾貫、

一、御堂 大岩須田信濃守滿信、御符之禮五貫六百文、使孫六、頭役御教書之禮同

前五貫六百、須田信濃守滿信、使孫六、頭役二拾貫、

一、儀並 南郷頭本鳥羽加賀守信家、廣川伊勢守忠廣、御符之禮參宮(貫カ)三百文、使孫六御教書同

前、以後(ハ、)戊年可當申由被申候、御教書之禮二貫文、使曾次二郎、一貫文

孫六、合三貫三百文、

一、前宮 望月代官布下石見守盛慶、御符之禮三貫三百文、使孫六、頭役三拾貫、

文明三年卯五月會、明年御頭定、九年當申、十年勤仕可申候ト、

一、左頭 捧莊條、五ヶ御符之禮兎角被申三貫三百文、初ハ使三郎請取後一貫

文曾次二郎取來、御代官麻澤朝重藤左衛門爲光、越中貞俊、小笠原殿當代

文明三年雜載

一八五

初來年御頭十一年^五て可勤申、頭役三拾貫、

流鏑馬

一、流鏑馬 飯島爲賴、御符禮二貫四百三十三文、茶壹斤、使彌五郎、頭役拾貫、

飯島爲賴

一、右頭 淺間郷、赤澤駿河守賴經、代初、御符之禮三貫三百三十三文、兩度ニ使曾次二郎、路錢別而出候、頭本ハ百貫、今三拾貫、馬一疋、

赤澤賴經

一、加頭 狩田郷、井上伊與守政家、御符之禮五貫六百六十六文、使孫六、御教書禮同前、

井上政家

一、加頭 伴野本郷上村、御符之禮三貫三百、代官武者中務入道沙彌道秀、御教禮同前、^(書カ)使孫六、^(書カ)六、

武者道秀

御射山明年御頭足

一、上増 市村郷、西條大和守經春、初勤、御符禮三貫三百、代官西條原國光、使

西條經春

三郎、御教書禮同前、市村西滿吉、栗田^(マ、)豊俊、西條原、村上吉益、勘解由清忠、同名伯耆信經、御教之禮三貫三百文、使曾次二郎、御頭役本ハ拾五貫ニテ候

西條原國光

西滿吉

村上吉益

勘解由清

忠

同信經

一、左頭 高梨本郷、高梨刑部大輔政高、御符禮五貫六百文、使孫六、御教之禮^(書カ)同前、代官川村秀高ハ初神鷹神馬代三貫文、又草間殿前頭役三貫文、別而

高梨政高

川村秀高

坂西正仍
常葉康國

川村方ヨリ新寄進申候、御頭役五拾七貫三百、

一、右頭 上飯田、坂西正仍^(仍カ)代勤、御符煩被申候、代官常葉肥前守康國、上飯日^(田カ)

坂西正仍

本神領取候由狀ニ仕候、案文御符入部申候處、御符之禮祝之料足沙汰申

たる事無之由承候、不思議ニ存候、御符御入歟、次之年コソ御頭役ハ可有

御沙汰候、御符之祝料足ハ御取相候ハテ、御頭上候時、神人可取銚之本

祝錢とコソ候ヘ、御符御禮トハ候ハテ、頭役十九貫三百内、御符之禮

共ニト同篇ニ承候間、諏方上下十三所共御左口神モ御罰候ヘ、十九貫三

百文頭役之外、御符禮ハ自前々三貫三百三十三文、卷紺ニト鹿皮一枚

此分取候、其方ハ百才之人歟、御頭役十九貫三百内、御符禮ニ自前々參候

ト、以誓文可承候、其お三々みの御寶ニ結付捧可申候、其方ハ百年之事

とお傳ヘ、るよし承候、彼御頭ト申事者、仁王十五代神功皇后元^(庚)異國

對治之御時、當國ハ當社御神領タリ、然ハ七ヶ年一度之御頭寅申御造營、^(沼カ)

何モ于今無退轉、殊ハ飯田郷之事者、嘉曆三年^(辰)阿曾治下野守寄進所ニ

て候ヘク候、其後元弘三年^(西)關東相摸守高時對治依祈願、任先例尊氏將

軍改御寄進所ニて候、代々本神領ニて候、然ハ彼郷内ヲ五宮祝達中^(以)觀

祝錢

御頭ノ由
來

飯田郷ヲ
神領トス

應二年_丁十一月廿一日御配分候證文共、自然御社參之次可被下御披見候、庭弱三貫五百所_ヲ今神領被成、代々御祈禱申來候を、今めかひしく彼御符之時被仰出候、不心得候、當社御神領にて候間、別而愚身御志ニ給地_ニあて候、候ハす候歟、當御代少々御寄進地候共、御前可爲御祈禱候歟、然者彌々無退轉可致御祈禱候間、内々御志_ニ難被伏候、返々御符御祝錢事、御頭役十九貫三百内よて、當社神も御討候へく候、候ハす候事候、恐々謹言、

文明三年_卯八月廿八日

滿實_判在

坂西殿御報

彼上飯田御符禮十貫五百文持來候、神領年貢五貫五百文來候、彼御頭年坂西方知久殿縁被成候、落居可爲何候哉、
(如野方)

神罰

彼御罰ニテ子不持、明應三年_甲上飯田御頭、彼甲_刁八月坂西家中三十七才ニテ死去、坂西法躰ス、御神罰眼前也、
常葉彈正討死ス、代官也、

惟宗忠國

一、下増 桐原惟宗忠國、御符禮五貫六百文、
使曾次

小島次郎
代官飯澤家信

一、御射山加頭 須毛小島次郎、御符禮五貫六百、使孫六、御教書禮同前、先二貫文、使曾次二郎、小島二郎、代官ハ飯澤家信、又御教書禮曾次二郎三貫文

佐平光貞

持來候、

一、小井川郷、御符禮十貫三百文、路錢一貫文、曾次二郎一貫文持來候、頭役二拾貫文、佐平四郎光貞被勤候、

一、加頭 平林中保代初、頭本禮錢一貫八百文、使三郎御符をば不入申候、十貫ヨリ同所にて候間、向後も但神長狀計仕候と申定、彼之平林郷西明寺殿御菩提所にて候、上書謹上平林代官殿神滿實_(裏)浦書神長、
諏方社明年花會頭番役之事、
右任恒例、平林郷差定申候畢、守先例御勤仕□□候者、神慮定可有御納受候、仍狀如件、

文明三年_辛卯年卯月八日

神滿實_判在

謹上 平林代官殿

一、小市郷、御符禮三貫三百文、路錢一貫文、德長入道道頓、使曾次二郎、孫三郎、御教書禮同前、

〔大乘院寺社雜事記〕

七_四十 八月廿八日、雨下

一、吉田通祐三十三日社頭參籠云々、今夜堯善通夜之由申入之、

春日社參籠
吉田通祐

德長道頓

大乘院尋尊

閏八月廿八日

一、自來十一日可參籠但馬屋事、仰遣御師方得其意云々、

九月十一日

一、自今夜社頭參籠、神主渡屋也、仰御師令借用之、申下刻予板輿ニテ遷了、自今朝以七鄉人夫色々渡之、參籠衆者、予隨心院殿、泰弘、泰坊、光秀、圓秀、良祐、專祐、英建、赤口、愛滿、教淨、龜阿、次郎、力陣、德力、院仕代、上番代、木守、

以上

初夜時分入堂、各小衣也、步行於西屋五個度會合、講問可始行、定日并題事、可相計由、以良祐仰遣彼屋了、畏入云々、予勲行講問一座、舍利講、入正理論、唯識論、百法論、五重門、三十頌、金剛經、心經、錫杖、仁王經、理趣分、御本地呪、寶號等、勤行之、

供御所役人專祐別而召仰之、兼御承仕、小童番英建也、召仰之、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十八 慈恩會御記 九月十日

一、今夜予參籠社頭、神主座七個日也、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十七 九月十三日

一、乘院教玄

一、(教玄)乘院自今夜櫟本館被參籠云々、珍重之由、以泰弘申遣了、使者悅入云々、

被見參云々、

十八日

一、(御師權預)祐松來、不及對面、參籠無爲禮云々、

〔經覺私要鈔〕

五十七 三月四日丁丑霽

一、今日古市自社頭退出了、去自廿六日參籠也、

〔經覺私要鈔〕

七十七 九月十一日庚戌、霽

一、僧正自今日參籠御社云々、宿所神主渡屋云々、候人泰弘兄弟、北面堯善兄弟、明恩、順圓、宗順、被具云々、

十三日壬子霽

一、一乘院僧正自今日但馬屋ニ參籠云々、今日例日也、所存不審、

〔大乘院日記目錄〕

三 九月十一日、大乘院御社參籠七個日、

十三日、一乘院同參籠七個日、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十六 正月一日

一、予社參禪師、律師同車、各付衣五帖、牛飼二人、直垂、力者六人、當色、御童子三

尋尊政覺
春日社參

フタコ

人、當色、座法師三人、直垂、小者愛滿丸、棚持、木守、
御共孝承寺主、等身衣、指貫、モケサ、泰坊從儀師、等身衣、指貫、各乘馬、舍人一人、中間二人、當色、
召力者一人、衣召具、
御幣役成舜、付衣五帖、大童子吉久、コ、フタ、中間一人、當色、信承、付衣五帖、各參向二
鳥居邊畢、

路次自中院至脇戶、經橋本、經南大門坂、從僧等池ノ北ヲ、入大鳥居、至六道、
於二鳥居下車、御童子依指合不參、然間不用手輿者也、山中步行也、御師權
預祐松、袍、兩社并中社等巡禮次第如例、兩所御圓座役未座力者歟、

御幣次第事、予座小文圓座、禪師柴圓座、紫カ、相双故也、御幣四本進之、予取之、次
四本進之、禪師取之、次予再拜、次御師參申給之、其儀如常、次禪師再拜、御師
參申給之、其儀如先也、

若宮

次參若宮、小文一帖上、圓座二枚用之、次御幣一本進之、予取之、次一本進
之、禪師取給之、次兩人各再拜、次御師參申一度、給之、其儀如例也、
次三十八所以下參申、御幣兩所分一度、孝承進置之、御師兩所共、入御
所內、西座不入內、

七堂禮拜
橋本橋車
フセキ

次自二鳥居乘車入堂、自南大門穴口下車、大童子參向了、七堂巡禮如例、路
次樣如先、ウ子女社邊各乘馬、橋本之橋車フセキノ事、自昨日仰付之、一方
西撤之了、仰付地下職事畢、

木津牛二頭之內一頭奈良牛也、不懸車之間、不立其用者也、仍一頭シテ引
之之間、今一疋牛飼事給一疋畢、以定使不立用條不可然之由加下知者也、
御丁間水二斗餘下行之、馬一疋吉田、一疋竹內進之、每事無爲、珍重々々、

十一日

一、筒井律師罷上社參、招請慶忍專當所云々、

十三日

一、新宮ニ參詣、去十一日不參故也、但禪師參云々、

二月十二日

一、觀世座參社頭、三座ハ南大門參了、

十三日

一、四座於南大門藝能、今日ハ寶生觸穢之間、不參社頭之故也、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 閏八月十九日、雨下

四座藝能

觀世座

筒井順永

一、去十六日陽明御方御所内々御社參云々、御狩衣エホシ、不及奉幣、一乘院僧正同道云々、及夜隱極内々儀也、

廿日

一條兼良

一、大閤御社參事、夜前被仰合興弘云々、

九月十六日

一、筒井律師來、對面、今日社參進神馬等畢、

〔經覺私要鈔〕

五十七

正月廿七日庚子、霽

別當經覺

入夜參春日社、予_付衣_香帖_香板輿也、片山基信、松若、三郎以下、其外古市若黨六人召具了、兩社計參了、其次參大閤御所、御對面有小盃、可向禪定院之由令

思惟之處、於大閤御所_{成就}院_{成就}有遊、仍令對面之間直歸古市了、

〔上諏訪神社文書〕

〇一 信濃

信濃諏訪
明神佐久
新海明神
會下湖中二

當大明神御渡之事、十一月二日夜令凝結湖水、同六日已剋當社濱自大川渡下御天、下宮濱外川渡江上御候、佐久新海明神者、自平湯渡下御天、御參會于湖中候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文明三年十一月六日

(繼滿)
大祝

神宮寺上
尊供養

朝御供米
及寺料足
寺門沙汰
神供米料
足學侶沙
夕御供所
米々貢所ノ

土佐天王
社棟札

進上 御奉行所

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四

七月廿四日

一、權預祐松來見參、

神宮寺上嘗去月成立、本尊供養、導師井山有俊法印沙汰云々、每度十三重一宿役云々、本尊出入事、常住神人申付云々、此神宮寺ハ當社遷座以前寺也云々、

日次神供事、於朝御供者寺門沙汰也、每日米六斗計、料足四百文、神供事、米二石、料足六貫計云々、播州兩投符□□□自學侶沙汰也、夕御供ハ、社中名主備進之、當國在々所々負所米云々、惣而社中大小神事雖如形、于今不退轉、如昔古隨分ニ致其沙汰云々、二季條近來無正躰云々、社司ハ本來二人也、神宮預造宮預職也、最初時風ハ造宮之預也、秀行ハ神宮預也、此兩人未爲中臣氏預方也、
神□方ハ大中臣氏也、此二百余年以來職也、上古無之、

〔土佐國群書類從〕

拾遺四

諸神

土佐郡之部

領家村

天王社棟札

文明三卯年上棟天王社

元食

能慶

太夫氏櫻

文明三年雜載

一九五

土佐住吉
四所大明
神棟札

伊豫八幡
宮撞鐘

吾川郡之部 甲殿村 住吉四所大明神棟札
文明三 辛卯三月廿三日建立遷宮、其後明應元 壬子八月廿五日修覆、

〔宇和郡舊記〕

亨 八幡宮 同宮に撞鐘有、是は宗秀と云人、文明三稔に被

寄進處、亂世の時分大洲奪^(取カ)ちゆくとして、横吹の坂より取おとし打り捨置
よし、然所は寛永年中、等覺寺前住南山孝師再興とあり、

佛寺

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 二月十六日

一、順懷五師參申、別會職事辭退之、

一、實心五師被召之、別會職事被仰付之、各大納言律師奉行付衣也、實心付衣

ニテ參申云々、拜賀事重而可沙汰哉云々、

十七日

一、別會實心參賀了、鈍色五帖云々、

〔經覺私要鈔〕

七十 二月十三日丙辰、齋

來十六日別會五師順懷定可辭申候歟、然者實心^{已覺恩房}爲理運之由伺申
旨、自繼舜方申賜了、辭退申候者可仰付旨返答了、

別會職順
懷辭ス
實心之ニ
代ル

長田家則
長賢ヲ隨
願寺院主
代ニ推薦
ス奉書

十五日戊午、齋

一、別會五師順懷明日可辭申之由、繼舜申賜了、則可參之由同申云々、仍以狀
尊譽律師方へ、出世奉行事、去年講師間、暫仰兼親了、然而未辭申、縱雖有さ
様可存知歟、故御房寺務時、教家得業、良尋得業兩人爲出世奉行、雖參候奉
行了不苦歟、可存知之由仰遣了、可存知之由返答者也、

十六日己未、齋

今日於禪定院別會五師可召仰之由、尊譽律師ニ仰付畢、自今日別會者實
心覺恩房已講也、

三月五日戊寅、雨下

一、別會五師實心爲禮來云々、能小盃令對面了、一盃持來了、

〔大乘院日記目錄〕

三 二月十七日、實心爲別會、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 三月二日

一、東小田原院主代事、長賢法師所望仰付之、古市筑前守申故也、則成奉書了、
院主未補之間、仰遣知院方了、

隨願寺院主代事被仰付長賢法師候、可令下知給之由被仰出候也、恐々

謹言、

三月二日

泰弘

按察法橋御房

十八日

供目代

一、法用僧申來廿五六日間ニ可成供目代云々、屏風事借用不可有子細由仰了、

一、○上略、三十願ノ結願以後供目代事可辭退云々、何事祈禱哉、近來此法連續了、且如何、

〔經覺私要鈔〕

五七十

三月廿四日丁酉、雨下

尊譽律師以狀申云、供目代事政圓房專松昨日辭申、仍法用僧俊算房禪識來、□

□被召候者可畏入之由申了、可爲如何様□中略仍返答云、供目代事ハ、

廿六日不吉曜、可爲來廿七日之由可被申付候

廿七日庚子、齋

今日召供目代於禪定院、可召付之由仰遣尊譽律師了、畏申分歟、二瓶、菓子

一折餅一益賜之賞、翫之由返事了、

廿九日壬寅、齋

供目代悅酒、至今日於惠信坊營之云々、

〔大乘院日記目錄〕

三

三月廿七日、俊算爲供目代、

七月四日、興憲爲供目代、

〔經覺私要鈔〕

六七十

六月十五日丁巳、齋

一、自尊譽律師方、當供目代俊算來月始可辭申候、可得御意之申云々、次座心中ヲ被尋、可構沙汰之由申之、急辭退事、今日可被治定歟、由返答了、(由脫方)

〔經覺私要鈔〕

七七十

七月四日丁亥

今日供目代召改之、新供目代興憲房陽專於禪定院可召改之由、仰付尊譽律師了、法用僧貞海房陽識同召付云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四七十

七月二日

一、興憲法師供目代職事申入了、當供目代俊算法師雖未退辭、□□□可被補興憲之由仰之間、今日興憲方ニ遣奉書、並法用僧事可爲貞海法師云々、但當目代□□□□□來月者早々可辭退之由捧愚札了、隨而□□□可不進辭狀歟、(辭退方)

興憲ヲ供目代ニ眞僧下爲用ス

四日

一、興憲法師爲供目代於公文所大納言律師仰付之、當年四十六歲也、希有若年者也、法用僧事貞海ニ仰付了、目代鈍色白五帖、法用付衣五帖、

〔經覺私要鈔〕

五十七 三月十八日辛卯、旦雨

一、以長田筑前、東南院僧坊供事、山田舍弟望申間事、事舊了、而以前被入候安處、此二位爲寺衆之由申之間、自寺令罪科候了、仍供成闕之間□□者無淨者候歟、可被恩補之由、古市執申之間、可相傳之由返答了、

十九日壬辰、霽

一、東南院僧坊供事、雖可相傳內儀、有開子細之間、先相尋信花坊心中、依其左右可申遣東南院之由、以筑前仰古市了、

〔經覺私要鈔〕

六十 五月十五日丁亥、天曇

一、內府入夜入御東南院、
十六日戊子、天氣曇

一、昨日以內府東南院有申子細、僧坊供事也、昨日既補盛緣大貳房之由被返

東南院僧坊供

鷹司政平
東南院ニ
至ル

僧坊供

答畢、

廿九日辛丑、霖雨以外事也

一、今日先內府自東南院可令還給、與昇一人可召進之由、昨日被申送之間、今朝召進處、雨以外下之間、只今不可有還向、明日又歸忌日也、明後日可進云々、

卅日壬寅、大雨已刻雷鳴

一、東南院僧坊供事、可被補祐實信花坊歟之由、遣狀於院主了、依古市申也、
六月朔日癸卯、霽

一、酉刻內府樣自東南院還御、

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月十日癸丑、霽自晚雨下

堂家小十師寬清以兩堂舉狀大十師事申之間、令加判遣了、
別當前大僧正ト書テ、令加判遣了、

〔尋尊大僧正記〕

三 十二月七日

一、昨日御童子十師入事致其沙汰、其次ニ舍弟同入事致其沙汰云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十七 九月廿七日

小十師寬
清ヲ大十
師ト爲ス

光弘ヲ學
侶沙汰衆
ト爲ス

詮算蓮花
院供僧職
ヲ辭ス
寬乘之ニ
代ル

筒井順永
中坊次郎
ヲ衆ニ推
薦ス

一切經承
仕補任

辻坊千代
松等一切
經承仕ヲ
望ム

東寺新學
衆補任

初例

一、光弘房良成學侶沙汰衆云々、他門也、當時之沙汰衆悉以他門也、

〔尋尊大僧正記〕

寺三社雜事記 十月十八日夜雨

一、詮算觀禪房住高野山蓮花院供僧辭退之、其闕分寬乘順長房入之云々、雖
然詮算於寺門交衆分也、

十一月朔日

一、吉田父子來、衆中沙汰衆事、中坊次郎望申、自筒井順永披露歎云々、彼次郎當門
跡恩足也、東小田原院主德分八木給之者也、

十日

一、訓英來、木守事十郎辭退上ハ、別人ニ可被仰付云々、
十二月廿八日

一、一切經補任空覺得業、好圓、良清、乘英、英慶、輪轉詮算、第五番承仕實祐良綠
罪科仁也、仍一通之間、教胤忍舜且仰付之之由、以御坊中奉行奉書、教胤方
ニ仰付之、惣藏司代好心參申、新補躰ヲ補任之様ハ、隨宜而惣藏司代相計
何番ヘモ補之云々、死闕次第ニモア戒薦次第ニモア補任之、

晦日

一、辻坊先年借下事在之、本十五貫文也、只今彼借書可返進之、就其ハ猶子兩
人一切經承仕事所望、成奉書了、任料彼借下ニ立用之、

一切經御承仕後闕出來候ハ、一番仁可被仰付候、仍任料被取進候也、

恐々謹言、

文明三

十二月廿九日

圓禪御房

一切經御承仕後闕出來時、良兼圓禪可被仰付候、其後出來闕分事、千代
松丸可被仰付候、仍任料取進候、目出候、恐々謹言、

十二月廿九

辻子坊千代松殿

〔見聞雜記〕

〇歷代殘闕日 一、同十二月三月、新學衆補任事、寺務未補之間、補任

申沙汰之儀不叶、其間先御願ヲ可有勤仕也、奉行ヨリ可遣書狀候也、衆儀了、

是初例也、新學衆賴
俊宗明

〔田中教忠所藏文書〕

〇乾山城

御影堂番役之事、自然私指合事出來時者、良春爲代官、内陣所役等被令勤仕候、方一於有不調不儀之子細者、其科可懸申者也、仍請文之狀如件、

文明三年九月六日

良照(花押)

〔東寺私用集〕

一、目代職事少々注之、略○中

文明二年、別當賢深、尺迦院 代宗果、目代增祐、上總雜掌

自同三年者、寺務別當目代依亂世不定也、

〔内宮引付〕

一、補任 田宮寺供僧職事

光教阿闍梨

右所令補任彼寺供僧職也、全次第勤行法事、可專御祈禱之狀如件、故補、

文明三年十月廿二日 依宗持寺口入、任料 二貫免、三貫並極進、

太神宮禰宜荒木田神主判

〔長防風土記〕

六十九 三田尻宰判 防府天滿宮古文書一 佐波郡古文書一

大專坊事、以前從京都對前住祐賢被仰付候、仍權別當職事、爲祐賢弟子被付屬申候之次第得其心候、然者任彼讓狀之旨、領掌不可有相違候、御年少之間

者、以代官社役等可被勤仕之事、是又心得申候、何様此條京都可致注進候、恐々謹言、

文明三年

十月十七日

(陶) 弘護(花押)

松王丸殿

〔阿彌陀寺文書〕

三 周防 戒檀院 花宮山阿彌陀寺開基 代々國司職

一、四十 樞芳上人妙祐 文明三拜任

〔阿彌陀寺文書〕

四 周防 略○上 周防佐波郡牟禮村華宮山阿彌陀寺略緣起

一、當山往古ハ一山ノ總號ヲ阿彌陀寺ト稱ス、別ニ阿彌陀寺ト云本坊アル

ニ非ス、故ニ諸山ノ高僧ヲ以テ住持職ニ任セラレ、周防國司職兼帶ニテ、

當寺中ニカナラス在任スルニ非ス、寺中ノ諸沙汰ハ、衆徒ノ中ヨリ般若

坊成就坊、安養坊等ノ塔頭輪番ヲ以テ年行事ヲ勸メ、日用ノ寺務ヲ沙汰

セシナリ、

〔經覺私要鈔〕

七十七 七月廿五日丙申、天曇

一、依覺朝僧都執達、許可重書於延營得業畢、遣狀於東南院了、
重書許可事、延營得業職照頻競望之由、委細承了、彼躰事、年朧過多、常修
學秀等倫間、披見條不可有子細候、此分能々可被仰含候、恐々謹言、
七月廿六日
東南院御房

立紙也、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 七月廿六日

御問田

定使德分

遂業

一、木津御問向參申、御問田事、自執行方點札云々、驚入了、於門跡者不知事也、
如何様子細哉、可成奉書旨仰清賢了、此職ハ新左衛門入道之職也、依無實
子向方ニ與之、隨而門跡向事、任料以下爲向沙汰給補任了、向一期之間ハ、
一切不可有違亂事也、只今事新左衛門入道之所行歟云々、且不可然事也、
巨細定使法師申入者也、當庄定使德分ハ、月迫ニ木二十束六ヤ木拜領之、御
童子沙汰云々

八月七日

一、生馬萩原西因幡公善祐當年遂業事所望、以快弘申入、此精義役事、定清擬

講自兼日領狀云々、

閏八月八日、雨下

一、就大智院事學侶書狀到來、則此子細俊算方ニ仰遣了、
三輪大智院遂業事、就彼之種姓聊及評定子細候、放請事不可被成卒爾
之旨、可有御披露之由、學侶評定也、恐々謹言、

後八月八日

供目代興憲

寬圓御房

袖書

此條自下蔦分牒送之間、如此令申入之由、同評定也、
以出世奉行同宿分被付寬圓畢、

十八日

一、○上 大智院遂業事、是又不可叶、凡下息條不能左右、於兄弟共者、近來成侍
分畢、仍大堂遂業事不可得云々、

〔大乘院日記目錄〕三 十月廿一日、實清寺分得業、

廿八日、覺弘寺分得請、

十二月廿六日、政覺空覺各得請了、空覺大
安寺分

得業
得請

〔經覺私要鈔〕

八十 十二月廿三日

自禪定院僧正方申送云々、當年政覺可得請間、長者へ申入了、近日定長者宣可到來歟、而又空覺可得請之由申候、政覺既第二夜也、空覺も第二夜望候歟云々、然者應永十五年分者政覺禪師、十六年分者可爲空覺も、但寺門遂業跡候者不可有煩、可撰承云々、

仍召寄三人了、定可令披見之處、文和四年第二夜實緣寺分孝憲假名内如大臣房、如此候、寺分□□沙汰事、先規分明之上者、雖非第二夜、遂業不可有子細歟、但政覺禪師歸丁衆沙汰之時、又研學候へん、不可叶歟、然者雖不急、不可有殊煩歟之由仰遣了、

〔尋尊大僧正記〕

三 十二月廿七日

一、禪師御房得請之由、別會供目代方仰遣之了、諸廻請事可得其意旨仰了、第二夜也、

一、北院大政大臣禪師得請事、昨日先以成奉書了、簡定大安寺分

〔大乘院寺社雜事記〕

六 正月十六日

一、衆徒蜂起、初田舎寺住悉以出仕云々、今日筒井父子共順永順尊出仕、殊更筒井律順

興福寺衆
徒蜂起始
筒井順永

父子出仕

永一、筒井一鴈出仕云々、鈍色五帖表袴、則大湯屋僉議以後直ニ社參、不合金堂僉議、邂逅事也、大童子、走童、力者、香直垂、中間六人召具之、仕丁丸召具之云々、天氣快然、珍重々々、僉議聞上北面善賢罷出了、如例也、衆徒悉以蜂起以前、於宿坊濟々一獻在之、此一鴈出仕事、古市之先祖ニ致其沙汰以後ハ中斷事也、今日再興、珍重々々、田舎衆徒與寺中衆徒、相分テ宿坊着座、一獻行之、筒井山田城ハ上首也、筒井子舜覺ハ堯善之次座ニ著了、宿坊ハ吉祥院也、

〔經覺私要鈔〕

五 正月十七日庚寅、自旦雪下、但降消不積

一、或者語云、昨日蜂起初後、筒井順永衆中一鴈拜賀號參御社、其身鈍色白五帖、乘四方輿、力者六人昇之前陣、赤衣仕丁四人、香直垂着タル、中間六人云々、何時先例哉、珍々、

一、筒井一鴈拜賀珍之間、爲後葉子細尋之處、赤衣仕丁二人、力者二人、衣袴先陣、次四方輿、前垂簾上之、筒井鈍色白五帖着之、後唐笠入袋力者持之、大童子一人、狩衣、香直垂着中間六人、其跡非色若黨等二三十人云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四 二月廿八日

一、筒井一鴈事、悅酒於辻子坊在之、寺住衆悉以請定、今市新加寺住衆云々、不

筒井一鴈
拜賀異數

筒井一鴈
悅酒

道不思儀者也、檢斷評定且遣了、

廿九日、雨下

一、昨日會合面々方、自筒井方引物送之云々、寺中衆各杉原十帖、扇一本宛、貝衆料足百疋宛、三沙汰衆料足三貫宛云々、各以書狀送之了、

晦日、雨下

一、今日蜂起集會在之、何事哉、但相尋處、就花藏坊供僧事、政尊房明爲衆中罪科云々、筒井披露故也、新在家寺住事、同筒井殿披露之處、衆中滿座不可叶、旨一決一同了、彼先祖寺住所望之時、不可叶、旨事舊了、然而當時衆中依何事可許可哉云々、且尤事也、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月一日

日所作

一、日所作等如例、奉拜十方、○二日、三日、依リノ條、異

七日、大地振、後

一、日中儀如例、付衣、每事無爲、珍重々々、

十九日

一、自今日八幡大井二日所作始之、男山

蜂起集會

朔日ノ儀

〔大乘院寺社雜事記〕四十 八月廿八日、雨下

一、日所作勲之、去十二日以來今日初之、違例故也、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 二月朔日

一、朔日事御後見調進之、○三月、七月、閏八月、九月、十月、十一月、略ス、二月各朔日ノ條、異事ナキニ依リ略ス、

〔經覺私要鈔〕七十 文明三年 卯正月朔日 戌甲

千德万福幸甚々々、

一、四方拜以下如例、

四方拜

一、小御料進之、役送覺朝、(東南院)付衣○二日、三日、七日、小御料ノコト略ス、

小御料

一、齒固獻之、白散寺醫衆徒沙汰衆也、昨日進之、寺醫所役也、予着褻衣(祝カ)、朝付衣、○二日、三日、朝齒固ノコト略ス、着了、役送覺

齒固白散等

□供同進之、御後見所役也、次節供(如カ)、形在之、

節供

二日乙亥

一、千秋万歲來、給飯等了、

七日庚辰

一、湯菓子一樽等自御後見進之云々、

湯菓子

若菜

春日田植

一日ノ祝

白散節供儀

文明三年雜載

一、若菜御料如例、

十一日甲申

一、今日初申也、春日田植也、近頃群集云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 正月十一日

一、今日御田植也、田舍人群集云々、相當旬日珍重事也、

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月朔日甲辰、齋

一、餅祝着了、三月、五月、七月、閏八月、十月各朔日ノ條略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 正月一日

一、白散節供御等儀如近年、今日手長兼親禪師、付衣、役人泰坊等身衣、予、禪

師各付衣、上下輩各付衣參申、今日參候輩

清賢法橋 玄深寺主 孝承 專實 繼舜法橋 奘舜

泰弘 宣舜 慶藤丸 千代壽丸 專賢法橋 良宣

成舜勾當 賢秀 吉久 專親 良鎮 專祐

光秀 成實 圓秀 良祐 重坊 懷全

懷英 英建 實英 懷賢

二二二

辯財天供

方節分

正月節供

三月節供

節供料下
行テキヲ
以テテ部
會廻請ヲ
觸ルベカ
中綱節供
料ハ河内
出山ノ所
公文代進
納セズ

院仕教觀教淨、上番力陣、 良弘 通世分也、

七日、大地振後

一、弁財天供餅至、今日、元日七枚、今日七枚、中間五枚宛、

八日、小地振

一、節分一獻御後見進之如例、夜ニ入爲方違、於堯善私宅越年了、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月三日丙子

一、節供御後見進之、次節供出昨日湯菓子、□祝着了、

三月三日丙子

一、節供御後見調進之如例、覺朝 少衣、役送之祝着了、

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月十七日庚申、齋

自學侶申云、專當訴申、寺家方節供料事不被下行之間、千部會廻請不可相觸之由訴申候、早々被下行可被成始行哉、惣而諸會式煩無勿躰之由申給之間、返答云、於中綱節供料者、河内國狹山庄所出事舊了、隨而以前就彼奴原訴申、雜掌致請文了、而舊冬於伊勢守折紙令出之間、雜掌罷下可致所務由令問答之處、公文代兎角申子細不進濟由申之間、爲學侶可被加嚴密問

文明三年雜載

二二三

答之由、及度々雖令披露、一切不及返事之間、無力以神人等自是令問答之處、可致沙汰之由、近日雖領狀、于今不及進濟、早爲學侶召雜掌、可相尋者歟、只今驚申之條、不得其意之由、以奉書仰之了、

五月三日乙亥、雨下

菖蒲葺料

仕丁共來、明日菖蒲葺之料事、酒肴代一連、八木三斗可給之由、訴申間、先々更無其儀、纔一連下行也、八木等事、無日記之由、返答之處、當時大乘院殿御寺務之時、二連被下行了、次樣寺務者一連三斗、慥下行之由、敷居テ歎申之間、誠大乘院殿御寺務之時、二連下行一定者可下行、可尋遣之由、返答了、

四日丙子、霽

南都仕丁^{着直垂}兩三人來、菖蒲葺之用途二連遣云々、

五日丁丑

五月節供

一、節供自御後見調進之如例、則祝着、役送覺朝、^{少衣}予着^(藝カ)藝衣了、
廿一日癸巳、雨下

諸會式每
行ヲ供下
行ヲ訴フ

一定清已講爲學侶使節來、子細者中綱節供事、諸會式度訴訟申、一向不被下行之條、且無勿躰候、龍門以下ニテモ被向候、足可被下行歟、不然者爲學侶

龍門莊ノ
足ヲ以テ
會式料ニ
充當セン
トス
學侶專當
ヲ扶助ス
ベシ

御下行分、申峯寺可押置由、内々評定云々、但此分者評定計ニテ、外樣可申入トハ不申由申之間、仰云、中綱節供事、料所狹山庄也、仍自去年及色々訴訟之間、去出料所所當分取之、有殘分者、自餘諸會式可有下行事也、隨而當時雜掌相林院之入道學侶へ召出取請文了、然上者就其料所ハ可汰沙歟之處、押龍門等可取遣專當之由、評定云々、不得其意儀也、雖然、寺門沙汰有橫嶋之儀者、於寺務モ強非可痛、其計略ヲコソ可沙汰事也、大方雖有才學、於于今者雖爲一塵不可下行、爲學侶被扶持專當、一々橫沙汰之條、無力次第也、曾以不可驚思之由、返答了、爲事次之上、定清事無内外躰也、仍心中分語之者也、

慈恩會三藏會時、長谷寺役送雖隨所役事也、依河南庄所出違亂、無下行之間、一代寺務前別會當別會爲兩人下行了、然者猶又不下行之間、當時本承仕着付衣隨其役者也、是先新儀不能左右、其外御八講時、自季行事可下行物令相論之間、職掌不隨役間、寺侍初引牛馬了、仍門跡役人雖可請取、爲寺侍之間、大童子請取之了、寺門新儀非一事也、然者略中綱承仕等可隨廻請之役之條、強非可憚歟、然比與之中綱分濟ヲ引立、寺務與可有霍執之條、神

明佛陀之冥顯豈可然哉、就中押龍門者寺門知行所ヲ可押、更以非可痛事也、此條者寺門へ披露す(老脱カ)へニハ非ず、心中分物語者也、

〔經覺私要鈔〕七十 九月九日戌申、齋

菊花

服菊花九丸不老不死仙藥也、

一、惣節供如形在之、

一、自御後見如例節供調進之、覺朝着少衣進之、予着褻衣祝着了、覺朝父子殿

九月節供

秀木阿父子保千來了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月三日、小雨

(松林院)

一、節供手長兼親禪師、三ヶ日儀每事無爲、珍重々々、

三月三日

一、節供如例、予(政覺)禪師付衣、手長兼親禪師役人泰增等身衣指貫、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 七月七日

七十

一、節供御後見調進之如例、予禪公以下付衣、手長孝承律師、役人等身衣指貫、

九月九日

一、節供御後見進之如例、予禪公付衣、手長兼親不參之間、大納言律師勤仕之、

付衣五帖ケサ、役人等身衣指貫、自餘付衣、今日侍(寄カ)奇番孝承違例之間、清賢法橋參云々、

〔經覺私要鈔〕五十 正月十五日戊子、齋

左義長

一、古市來、任佳例可出地藏堂之由申、予着少衣乘板輿出了、古市胤榮(列)一族若

黨等濟々在之、各令供奉來了、則佐及丁燒之、次自地藏堂一獻出之、(畑)烈座之

者內府若公、水干、藤壽、上下、勝觀房、古市胤榮、經胤、三獻畢、予令還向了、於上

壇之佐及丁者、欲出地藏堂時燒之、令檢知後出了、

早旦粥進之如例、役送覺朝、

十五日粥

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月十五日

一、御粥進之、各付衣也、如例、次粥料一斗下行、

〔尋尊大僧正記〕三 十一月廿一日、大雪

寺社雜事記

一、粥頭繼舜法橋沙汰也、○粥頭ノコ他ハ略ス、

〔經覺私要鈔〕七十 正月十六日己丑、齋、自日中天曇

一、繪師筑前當年星書給之、今日來下日存歟、於友幸注進ニハ廿六日由申之

如何、

星書
陰陽師幸
德井友幸
違フ注記ト

春彼岸念佛百万反

結願

庚申

秋彼岸

念佛結願

東南院後夜入堂

東大寺入堂

二月廿六日辛巳、雨

一、自今日入時正之間、恒例百万反唱念畢、且十一万反唱之、

三月二日乙亥

一、彼岸中百万反念佛、已刻結願了、每年二季勤行無退、偏憑西方引攝故也、

〔經覺私要鈔〕

七十七

八月廿日庚申、天曇小雨

一、今日庚申也、雖可守之、老屈之間、纔唱三支文了、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四

閏八月二日、大雨

一、時正也、服藥初之、諸庄之役也、御後見進物等如例、

〔經覺私要鈔〕

七十八

閏八月八日戊寅、日曜未時也、

一、彼岸中百万反念佛結願了、

十六日丙戌、霽

自今夜東南院後夜入堂云々、至春日社以下被參云々、門徒卅人供奉云々、

十七日丁亥、霽

今夜者東大寺入堂計沙汰云々、

十八日戊子、霽

一、至今夜三个夜、東南院後夜入堂云々、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記

十月廿八日

一、入堂昨日今日、御共御童子二人、力者四人、大童子、

十一月朔日

一、禪師社參入堂、御共等如前也、

四日

一、後夜入堂、世俗事御出奉行ニ仰付之了、

十五日

一、後夜入道初之、世俗御後見、

十八日

一、後夜入堂大廻、社頭、寺中、寺外、世俗佛地院三綱等參申、松明奉行舜勝法師、

後夜入堂、世俗支配事、注進狀分御膳一升、出世々間者、上下北面、院仕、院家、

侍、中童子、御坊中衆、各上料六合、御童子力者、又童子以下者下料四合、

御承仕、供御所役、御カミソリ合、兩沙汰人、用定、作手、上番、同代、木守、院仕代、

御幣役、各自分外給之云々、

入堂

後夜入堂

社頭及寺中、廻ル

土器事、院仕小童方合、每夜二荷宛、去年召之相合十荷也、然今度三个夜
二十荷召之、三个夜ニ可爲六荷分處、如此沙汰不可然旨仰了、
三个夜ニ八木二石一斗下行也、過上在之云々、此條又不可然、今度ハ御坊
中殊更不參也、依何事如此過上在之哉、御坊中事爲其之現參也、以現參之
面而可知用定旨仰了、號御坊中取過分在之歟、仍爲下北面彼過上分令下
行云々、以外次第也、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記

十月七日

一、亥子御後見調進之、

〔大乘院日記目錄〕

三

八月十日、三藏會始行、豎者好圓、諷經於禪定院、永享六年

亥子
三藏會始
永享六年

〔經覺私要鈔〕

七十

三月廿一日甲午、霽

自學侶三藏會事、來月五日可始行之由有書狀、

〔經覺私要鈔〕

七十

五月十七日己丑、雖明霽日影不照者也

一、自尊譽律師方、三藏會事、來月五日之樣ニト、豎者胤繼淨識申之云々、可爲
如何樣哉云々、可得其意之由返答了、

學侶期日
ヲ報ズ

廻請ヲ別
會ニ命ズ

供目代參
籠ニヨリ
延期ヲ請フ

六月五日丁未

胤繼勸修來、三藏會豎者也、日限事重々伺申之間、肝要來月廿二三日比可
有始行歟之由仰了、

〔經覺私要鈔〕

七十

八月二日壬寅、天曇或小雨

三藏會事、尊譽有申旨間、可爲來十日由仰別會、可成廻請旨仰了、

四日甲辰、霽

一、三藏會事、可爲來十日之由、豎者等申之間、其分加下知之處、供目代令參籠
之間、此句事ハ可延引之由、去二日令返答之間、仰遣豎者云々、供目代如此
申、内々爲豎者可相語之由、仰遣旨誘仰之間、參籠事乞暇可參勤之由、捧書
狀之間、諸色可加下知之由、仰尊譽律師畢、

十日庚戌、霽

一、今夜三藏會於禪定院始行、供目代興憲陽專奉行繼舜法橋、予依虫所勞不
及出禪定院間不出仕者也、條々追可尋記、
僧綱者任圓僧都、少力者俊尊得業、豎者胤繼淨識好圓專松云々、僧綱手長
孝承寺主、已講手長秀深上總役送泰增、

廻請

十一日辛亥、齊

一、三藏會廻請四月成之、召出注置、

政所

請定、永享六年分三藏會豎義精義問者事、

第一豎義者好圓法師 所立惣料簡章義

精義者 覺恩房擬講

問者舜清法師 實曉、、 實有、、 兼尊、、 乘盛、、

第二豎義者胤繼法師 所立三身義

精義者 圓覺房擬講

問者了弘法師 寬乘、、 定乘、、 經禪、、 泰尊、、

右依例請定如件、

文明三年四月日

供目代俊算

長官前大僧正法印大和尚位判

〔大乘院寺社雜事記〕

四十七 八月三日、雨下

一、三藏會事來十日之由御下知之處供目代當旬參籠之間、不日且迷惑被延

加行

河南庄長谷寺法師
ス根米ヲ出

引者可畏入云々、仍此子細豎者方ニ被仰遣之間、爲豎者兩人沙汰供目代事色々計略、隨而十日始行必定也、

四日

一、三藏會豎者兩人、今日加行始之、

六日、午刻
雨下

一、三藏會方色々下行物以下事、能々可申沙汰之由覺朝ニ仰了、役者裝束等

可入者也、

九日

一、供目代與憲召之、參申少衣云々、不可然事也、仰云、就三藏會長谷寺法師糧米事、河南庄所出分也、然而河南庄違亂之時ハ、五師所沙汰也、應永九年、康正三年例、前別會當引會兩人シテ半分宛令下行了、依爲未下行以前、三藏會ニ不參荷、闕如之間、本承仕隨其役了、於今度者無下行分者、本承仕猶以不可隨其役旨申切了、前寺務御沙汰書盡了、所詮爲學侶集儀、河南庄役事被責伏歟、五師所歟、且又本承仕方事被責付歟、三个條ニ一可被申定之由仰付之、早々成集會可披露云々、應永九年ニハ、舜慶五師、良英五師兩人出

之、康正三年ニハ宗學五師、乘秀五師兩人出之、三斗下行也、半分ハ一斗五升宛也、會所計歟、

十日

影供奉行

一、亥刻三藏會始行、講師寬專五師、法服甲、表白論義、引聲問者、與弘法師、鈍色五帖、三階業^(散)役也、讀師鈍色甲、唄宗算五師、算花^(散)快弘法師、□□中薦也、各鈍色五帖、小中座俊尊得業、鈍色五帖、僧綱淨法院少僧都、鈍色平袈裟、已講順懷五師、兼影供奉行、供目代興憲、鈍色五帖、

階參後□五師申入遂業□□繼舜法橋申次、鈍色紫五帖表袴、不可有御出仕之由、

影供畢後配^(杓)、僧綱手長專實、鈍色五帖表袴、□□泰增、鈍色指貫、已講手長秀深、鈍色五帖指貫役之、同小中座並成業座、泰坊、庇座本承仕付衣各鍔也、押返テ二獻此儀也、本ハ三獻也、

次精義者實心擬講出仕、尤影供時分より可着座事也、仍不及配^(杓)、次問者算花退出、次豎問五人出仕了、是も影供時分より可着座事也、不可然、隨不及配^(杓)、次短尺置佛前、次豎者登高座、其儀如常、仍□重時分僧綱以下退出、

豎義事畢

出世奉行

次二豎者精義賢英出仕、先着成業座□□事也、後着奧座、豎問以下出仕、豎者登高座、其儀如常、事畢各退出、曉鐘事畢、僧綱已講、小中座分、出世奉行催促之、付衣五帖也、

一、別會ニ仰云、去年三藏會ニ僧綱出仕、大納言律師也、糧物不引之、現出仕分、悉以可引之事也、不參之、躰猶以引之歟、之由聞了、然上者現出仕躰沙汰外、事哉、今日事不違先例、可支配之由仰了、五師返答畏入了、去年沙汰千万越度也、於現出仕者殊更可引歸事也、得其意云々、捧納紙吉殿庄給主沙汰也、

一、長谷寺法師不參了、

一、所々正燈事、道場豎者宿、承仕以下在所、悉以目代方下行、油用□□□

一、於中院□座悉皆借用之處、半疊不進之間、珍事也、別會供目代□申合、以書狀嚴密ニ參籠衆中へ申遣取出了、千万不得其意事也、讀師退散之由、如此令違亂歟、

一、庇御簾ハ兼より卷上之、影供事畢、講讀師退散後、香呂箱出之、其後御廉下之、出入道計上之、

佛生會

一、興弘胤繼、興憲ニ對面了、一豎者好圓、二豎者胤繼也、
 一、當會廻請ハ去四月廿日ニ可有始行、用意御判□□
 十一日

一、昨日借用物等、以七郷人夫返遣了、

〔大乘院日記目錄〕三 四月八日、佛生會、

〔經覺私要鈔〕六七十 四月七日庚戌、霽

一、學侶狀

學侶下行
ヲ要求ス

佛生會樂所方寺家御所出分事、依御無沙汰忽會式可及違亂候、雖何足候、
 先以御下行可目出候、雖少事候、御下行候者、涯分又爲寺門樂所方事可相
 誘候、一向御無沙汰爲寺門可申詰子細無之、既會式明日事候、早々今日御
 下行候樣可目出候、學侶集會評定由、可有御披露候、恐々謹言

卯月七日

供目代俊算

伊與上座御房

兵亂ニヨ
リ寺領正
體ナキヲ
以テ辭ス

返答云、依天下大亂、諸國寺領無正躰、不知行之間、於違亂在所者、下行無盡
 期之間、不可下行之由返答了、

下行半減

八日辛亥、霽

一、不知行寺領分事、重學侶有申子細間、無力以半減之通、龍蓋本法有所務故
 也、狛野、吹田、鯉江、太、上、三、俣、摩、分、八、十、疋、下、行、了、

一、佛生會申下刻在之云々、別會五師實心奉行之、三綱事可尋記、老躰至極之
 間、予不出仕者也、

一、佛生會米支配分事、

佛生會米
支配分

佛生會米事

修理所四斗三升	會所四斗三升	通所二斗二升
公文所二斗二升	龍蓋庄一斗五升	狛野庄二斗 <small>半分</small>
吹田庄二斗五升 <small>半分</small>	狹山庄二斗五升 <small>半分</small>	鯉江庄二斗 <small>半分</small>
吉殿庄二斗	太上庄二斗 <small>半分</small>	三俣摩庄二斗 <small>半分</small>
安吉庄二斗	大住庄二斗	三ヶ庄二斗
猪名庄一斗	賀茂庄一斗	北岡庄一斗 <small>不及沙汰</small>
已上三石七斗		

不知行六ヶ所、知行號二ヶ所也、其分ニ八十疋下行了、

〔大乘院日記目錄〕 三

正月十四日、心經會如例、三ヶ月ハ尤可有斟酌事哉、

無其例、

五月七日、臨時心經會在之、予分并寺務分幡二流出之、

〔大乘院寺社雜事記〕 六十四

正月六日、雪

一、別會五師伺申、心經會來十四日可始行云々、幡竹事仰付契舜、題名僧事成舜、良祐可仰付旨同仰了、

十二日、小雪

幡竹

一、幡竹平等寺進之、其山昨日雖進之、事外細之間返遣之、今日重而進之、

一、幡廻請等于今不廻之、中綱中訴訟故也、自學侶内々申之間、不可然旨予取

十三日

申入之、不及御承引、巨細御書到來珍事也、此趣明日可仰遣學侶者也、

廻請

一、心經會幡廻請到來、奉了、

導師圓覺房擬講 奉

長官前大僧正 奉

法隆寺 奉

一乘院法務前 奉

大乘院前法務大 奉

大安寺權僧正

西大寺 奉

松林院 奉

東門院 奉

權長官法印大僧都 奉

榮勲房法印

性舜房法印權大 奉

堯勲房法印

琳舜房法印權大 奉

顯春房法印

順專房 奉

順學房 奉

勲觀房權大僧都

善忍房權少 奉

延恩房 奉

觀緣房 奉

舜顯房 奉

良舜房 奉

觀識房 奉

長學房 奉

延順房 奉

禪勝房 奉

教禪房 奉

源信 奉

陽春房 奉

淨法院 奉

願圓房權律師

實舜房 奉

長碩房 奉

松源房 奉

圓長房 奉

良勝房 奉

淨忍 奉

舜慶 奉

宗恩 奉

光明院 奉

大納言 奉

顯舜房擬講

定專 奉

覺恩 奉

圓覺 奉

賢尊大法師

專嚴 奉

宗算 奉

信專 奉

長弘 奉

英遷 奉

英淳	尊祐	堯弘
好藝	伊央	專覺
從專	重兼	寬專
教弘	高專	兼實
覺乘	淳懷	任俊
俊尊		

右來十四日可被勸行、依例奉唱如件、

文明三年正月日

別會五師順懷

長官前大僧正法印大和尚位判

權長官法印大和尚位大僧都判

陽春房律師權大僧都事、寺務並學侶ニ令申、不可有子細之由許可也、則口宣事自學侶申上于京都之處、權少僧都口宣到來之間、先以權少僧都分也、但一段許可事也、申上處、弁官越度歟如何、自此方申上分ハ權大僧都事也、然上者可爲權大僧都分ニ可相振云々、

一、就崩御心經會三十个日可有延引歟否事、令勸先例申遣處、悉以諸式相調

天皇崩御
心經會

之間、先以可始行之由、學侶集會一決了、於先例者、後冷泉院以來三十四代相勸之處、

其先例

高倉院正月十四日崩御、仍心經會二月廿九日始行之、

四條院正月九日崩御、仍心經會延引了、

崇光院正月十三日崩御、但於心經會者十二日始行之間、不及是非、

十四日

一、心經會始行、出仕三綱、泰弘、宣舜、寺務御分、予分幡二流作之、題名僧三人、各付衣五帖、中間二人宛、御經兩所分、並御幣兩所分、座法師一人シテ持之、侍疊二帖、木守一人シテ持之、始行之時、分ヲ能々付才學可出仕也、

諸下向事

色々御後見進之、自前日沙汰人令決合、可請取御幡、道具、並御幣、串、コモ以下也、餅以下色々、院仕前日請取之、自公方下行物事、自前日申出之、

スミ、雜紙、杉原、油、土器、御米等也、

幡出來之時、奉行申入案内、付衣、予禪師各付衣五帖拜見、於幡前心經讀之、

一條兼長
心經會ヲ
覽ル

十二卷或次奉出之力者御童子座法師持之、每事無爲、珍重々々、
一、袖留木法橋來云々、大間於山心經會御見物之間、予御共仍不及見參者也、
廿三日

一、井山有俊僧都楡一双兩種進之、去十七日當山心經會役者不思儀子細出來之間、且失面目之間不出頭、仍不能參賀云々、此事鍋甘但不知子細、重可尋之、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月十一日甲申

一、中綱等節供不下行之間、心經會廻請不可觸之由、別會五師順懷申之間、返答云、以前既引合狹山雜掌、請文以下致沙汰上者、雖未到也、又寺務へ申給之條、不得其意之由令返答了、一兩度雖申之、同篇仰了、

十二日乙酉

中綱訴訟事、別會五師申處不許容間、自學侶有申給旨、返答別會與□篇也、
又及晚自僧正無勿躰之由申賜之間、自去年色々專當等及亂訴條存外也、
兩三人學侶令進發者、少々可下行之由返答了、

一、酉刻心經會幡廻請所々講々廻請兩通持來了、いゝ様令落居、中綱等隨所

役哉不可說、則兩廻請居判遣了、

十三日丙戌

南大門祭
料湯屋辻祭
料
修理御門
下行

一、心經會南大門祭料、竝湯屋辻祭料各五斗下文在之、合一石歟前々下行跡、
應永永亨(享)愚老寺務、康正僧正(尋尊)寺務、寬正予寺務、皆以一石代四連下行了、
於修理御門下行者、後寶峯院寺務時、給主榮舜不下行之間、其以來未下行、
然今日給下文之間、不可下行之由返答了、爰今朝南大門下文令混亂下行、
之間、可責返之由南大門沙汰仕丁ニ仰含了、若及子細者可罪科之由仰含了、

其外心經會方別會一斗、經師一斗者、仰付龍門納所、可下行之由下知了、炭料紙ハ自是可遣旨仰了、竹ハ召諸山了、

一、題名僧事、印盛林教可罷出之處、妻女懷妊之由申之間、此方祇候林教外無人相誂歟、不然者以御恩之内遣訪、可罷出之由仰含處、相誂不可事闕之由、
申旨無相違者也、誰ニ相誂哉可尋之、

十四日丁亥、時々小雪下

一、心經會幡二流、予竝僧正分造出立之由、柴舜申給了、則心經經師摺之分、當

心經十三
卷ヲ摺寫ス

年十三卷、加銘令讀誦遣了、依潤月十三卷也、

一、心經會酉刻始行、別會五師順懷、今一人事可尋記、三綱泰弘權寺主、宣舜都維那、兩門跡題名僧出之、予竝僧正分三人、成舜勾當、成賢、良祐三人、一乘院二人云々、

一、幡竹者六本立云々、

十七日庚寅、自旦雪下但降消不積

一、就心經會竹事、報恩院へ禪衆等押寄云々、希代狼藉無比類者也、但傳說分不分明、明日遣人可聞之者也、

十八日辛卯、霽

一、遣松若於井山報恩院、昨夕物念無心元之由仰了、

一、松若歸來云、昨日井山心經會下僧所論也、不事問寄來之間、迷惑仰天可察給者也、然而不及亂入之間、先以無爲云々、兩方有手負云々、

〔經覺私要鈔〕

六七十 四月廿六日己巳、天曇

一、自繼舜方申云、來月七日可在臨時心經會云々、何事祈禱哉不審、是へハ未無申旨者也、

幡竹ノコ
トニツキ
禪衆狼藉

臨時心經
會請加判
先規ニ違
フ

寺門ノ管
掌務關知
セズ

下行物

廿九日壬申、霽

一、可在臨時心經會トテ、別會五師實心成廻請之間、令加判遣了、仰云、依學侶命雖沙汰事、廻請以前、申子細於寺務、成廻請之條先規歟、而不及申子細成廻請之條、雖非可仰子細事、先規ニハ所違也、此分別會ニ可申由仰中綱了、

五月四日丙子、霽

一、臨時心經會、南大門以下下行物事、可沙汰申自學侶有書狀、於臨時心經會者爲寺門沙汰間、於寺務者不存知由返答也、隨而寬正二年四月廿日心經會ニモ其分仰了、

六日戊寅、霽

心經會方下行事、自裝舜方以注文申賜了、

明日七日可始行心經會方御用意事、

一、題名僧一人、
一、炭一籠タチコノ、
一、御幡供養料、十斗代

一、經師摺料十疋、
一、御經竝御幣以下杉原廿枚、

一、御幡造手食事以下事、明日可注進候、

七日己卯、霽

十三卷摺寫

今日心經會在之、依爲當職出幡了、題名僧良鎮、房、專良祐、順圓、印盛、林教出了、兩人出幡之時、題名僧三人先規云々、但二人跡延文中在之者也、別會五師實心、今一人定出仕、可尋其躰、三綱モ可尋記、
一、心經十三卷摺之、爲加銘自奉行焚舜給之、心經十三卷令讀誦、般若波羅蜜多心經ト銘ニ書之遣畢、

八日庚辰、霽

昨日心經會、依竹引論有及傷事云々、幡ハ七本立云々、出人々ハ愚老、一乘院、大乘院、東北院、修南院、松林院、權別當云々、

一、心經會方下行事、覺朝致奉行下行了、

九日辛巳、霽、入夜雨下

一、七日心經會ニハ五師二人、三綱二人、宴貞、權寺主、源乘、都維那、出仕之由申之、

祭冠師從三位友重云々、衣冠歟、

〔大乘院日記目錄〕

三 正月十四日、所々仁王會同修之、

四月廿六日、千部會始行、

〔東寺執行日記〕

十一 六月十八日、蓮花會料紙一貫五百文、同夕方渡之、(マ、)

祭冠師

仁王會

千部會

蓮花會

安居結願法會

唯識會

溜洲會

講問始

同十九日修行之、當時依亂世質借錢不事行之間延引、夏衆三人、豐後、美濃、土佐、百文入立、

〔東寺長者補任〕

五 文明三年、御影供無之、○中略、稻荷祭ノコトニカ、安居結願法會有之、供養法仁然法印、散花堯杲法印、讚賴俊阿、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 七月十一日、雨下

一、新唯識會自昨日始行、證義東北院大僧正、權官兩人、大納言律師參勤之、今日結願畢、泰坊從儀師初參、

〔經覺私要鈔〕

七十 十二月二日

一、略溜洲會事、二通申判間沙汰遣了、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 正月一日

一、講問始在之、講師予問者律師、唄禪師、散花信承法師、御承仕專祐法師、各付衣、

題成就七寶事、延壽法者事、同音心經三十頌、

一、旬講在之、講師禪師、問者信承、○一日、十一日、二十一日ノ講問、毎月アレド、一、旬講在之、講師禪師、問者信承、モ、異事ナキモノハ悉ク之ヲ略ス、以下之ニ

毘沙門法

樂辯財天法

彌陀法樂

太子法樂

地藏法樂

一、講問三座、諸呪、並五段舍利講予行之、弁才天參詣了、元日大綱如此也、○三

日講問三座等略ス、

三日、小雨

一、講問一座予行之、毗沙門法樂、○三月三日、八月三日、九月三日、及ビ

七日、大地振、後

一、講問一座予行之、弁才天法樂參詣了、及ビ尋尊大僧正記十月、七月、各七日、

ス、

十五日

一、講問一座予行之、彌陀法樂、○二月、七月、閏八月、及ビ尋尊大僧正

廿二日

一、講問一座予行之、太子法樂、○二月、二月、十六日、及ビ尋尊大僧正記十

廿四日、夜雨

一、講問一座予行之、地藏法樂也、福智院修正佛具大納言律師沙汰也、予福智

院參詣了、○二月、閏八月、及ビ尋尊大僧正記十月、十一月、各二十四日ノ條略ス、

廿五日

文殊天滿法樂

深蜜經轉讀彌勒法樂

藥師十二體造立供養

觀音法樂

深蜜經三部經讀誦

星下法樂

一、講問二座予行之、文殊天滿法樂也、○二月、七月、各二十五日ノ條略ス、十

二月五日、雨下

一、講問一座予行之、深蜜經轉讀之、彌勒法樂、○三月五日、九月

八日

一、講問一座予行之、藥師十二體造立供養、○三月、閏八月、九月

十八日

一、講問一座予行之、觀音法樂也、○七月、九月、及ビ尋尊大僧正記

〔大乘院寺社雜事記〕四十 七月五日、立夕

一、講問一座、竝深蜜經、三部經修之、彌勒法樂、○八月五日

八日

一、講問一座予行之、藥師法樂、今日藥師十二體造立、供養師隨心院前大僧正

御房、每月如此、當年□也、爲延命也、

晦日

一、講問一座予行之、當年星下給法樂、○閏八月、晦日、九月、晦日、及ビ尋尊大僧

ノ二月、晦日、條略ス、

文明三年雜載

除病延命

八月八日、雨下
一、講問一座予行之、藥師法樂爲除病延命也、
九月十六日

重難講問

一、重難講問五ヶ度會合、明日可沙汰云々、二貫六百五十文渡西屋、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十月五日

院中祈禱

一、講問一座予行之、彌勒法樂、深蜜經同一部、三ヶ經同讀之、院中上下祈禱爲
內院往生也、

十二月十一日

一、講問五座行之、去三日以來分也、

廿二日

一、講問二座行之、〇二十五日 條略ス、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月朔日

一、講問初在之、

廿一日甲午、天曇日中後雨下

旬講問二座如例、〇コノ後、毎月 旬講問略ス、

東寺文殊講問

〔見聞雜記〕

〇歷代殘闕日記 八十四所收

一、同廿五日、文殊講問者俊雄公并仕了、初度

〔若衆方法式〕

城〇山

若衆論義方新法式事〔奉書〕 慶清

右雖有根本法度、於亂中者无寺恩等、自然令他住之仁可有之間、所役已下不
巡次定而有其煩歟、所詮不謂寺住他住、於講問役者、誂并相傳之儀不可有相
違、爾者捧物等罪科之旨可被略之、次又他住之仁經年序、雖不載番帳、令歸住
於有出仕者、不可有異儀、但所作誂之儀无之令闕如者、可被止一年中捧物者
也、仍亂中置文如件、

文明三年十二月十三日

公遍

慶清

嚴信

重禪

宗承

賴俊

宗演

兵亂ニヨ
リ東寺若
衆論義方
新法式ヲ
定ム住他
寺關ラズ
勤講問役
ムベシ

祐源
宗紹
杲明
榮舜
廣遍
俊雄
杲周

平定ノ後
ハ舊法ニ
シテ據スベ
仁王講

同十二月十三日引付云、天下靜謐後者可被守往古之法式之由、衆儀治定畢、
〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月八日、大地振

一、講堂仁王講大頭法印權大僧都永秀、予請僧三口出之、
十六日

一、五重門廿一卷、仁王講十座予行之、九月十六日、
條異事ナシ、
廿八日、小雪

一、今日百座仁王講每日修之、
晦日

舍利講

夏中舍利講

五段舍利講

尊譽等東
寺ノ舍利
所望

一、仁王講代官兼實得業懷秀、融算各辭退之云々、仍請僧事明日可闕如之間、
嚴賢坊香觀坊香專坊ニ相挑(挑カ)之了、佛供燈明杉原等、自此方可送講堂之由、
仰付堯圓了、○コノ後、仁王講ヲ
行フコトアレドモ略ス、

二月朔日

一、講堂仁王講大頭法印光舜、予請僧三口出之、○コノ後、仁王講ヲ
行フコトアレドモ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月十五日

一、舍利講導師信承、○二月、三月、七月、閏八月、十二月、各十
五日、舍利講行ハルレドモ略ス、
一、昨日分舍利講予行之、○二月十四
日、條同シ、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 七月八日

一、夏中舍利講今日結願了、無爲無事、珍重々々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 三月十四日

一、五段舍利講予行之、○七月、閏八月、九月、十月、十一月、
十二月、各十四日、舍利講同シ、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 二月十五日

一、尊譽律師、實英法師、光秀三人、東寺舍利所望之由云々、各三粒給之、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 八月三日、雨下

舍利塔奉納

招提寺舍利會

淨名講

新唯識講

唯識講

文明三年雜載

二四四

一、今日吉日也、舍利塔九輪買德奉納之、

九月十九日

一、招題(提)寺舍利會也、精進供如例也、三斗八升下行、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月十六日

一、淨名講始行、講師禪公、捧物予出之、檀紙二束也、

二月十六日

一、淨名講始行、捧物法賢法橋沙汰也、講師兼親禪師、問者信承、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月廿九日

一、新唯識講始行云々、勸進英寬、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 八月廿七日、小雨

一、明日唯識講本新入帳勸進代持參之、得御意旨仰之了、此內英惟三ヲ大智院大事、

十市八條黨凡下之間、大堂出仕并遂業事可爲如何哉之由、學侶色々及評

定事云々、英惟申分ハ、非八條黨候、田原本之住人平田之息也、竹田黨爲養

子故大智院之弟子ニ上之、所詮非八條黨凡下云々、此子細申開之間、明日

新入事寺門儀無相違哉如何、本坊住坊共以妙香院云々、善祐ハ衆徒也、本

坊東院住坊多聞院云々、善祐因幡公四十三、戒廿六、英惟聖禪坊三輪大智院也、歲四十一、戒

六廿

〔尋尊大僧正記〕三寺社雜事記 十月朔日

一、春日唯識講御所吉田大般若、自每月朔日七ヶ日始行、於初結日者鈍色五

帖、六口々別一石宛長器、成業一人、學道四人、薦分一人、每月請僧御承仕自

一、乘院被出之、正月者自十一日始之云々、大吉田庄年貢也、

〔經覺私要鈔〕五七十 三月十一日甲申、(朝カ)雨自日中雨止カ

一、今月唯識講廻請持來之間、加判刑致進奉遣了、以次仰勸進代云、超昇寺塔

坊唯識講事、于今不致沙汰、如何様哉之由仰承仕了、

十二日乙酉、霽

一、塔坊唯識講事、度々雖傳仰、只今不可沙汰之由申間、非勸進代無沙汰之由

申云々、此子細承仕來申云々、楠葉新左衛門披露了、

〔經覺私要鈔〕六七十 四月八日辛亥、霽

一、自今日如例令持齋受律戒了、

法花唯識講問一座、心卅、荒神、聖天、藥師咒、三身合行咒、十一面大咒、火鬼咒、

文明三年雜載

二四五

春日唯識講

唯識講
超昇寺唯
識講ノ有
無

塔坊唯識講

一字金輪各廿一反、隨求陀羅尼、光明真言、念佛各百反、
十善戒、錫杖、舍利禮等、自今日同舍利佛供二坏法隆寺舍利、夏中可備進之
由仰付了、

五月九日辛巳、齋入夜雨下

一、唯識講廻請承仕持來之間、令加判致奉遣了、

〔經覺私要鈔〕

八十七 十月五日癸酉、齋

唯識講廻請承仕持來之間、加判致奉遣了、新勸進代成(マ)之佛供等、

〔經覺私要鈔〕

五十七 三月廿一日甲午、齋

一、觀禪院卅講結番廻請承仕持來之間、加判遣了、

〔大乘院日記目錄〕

三 四月一日、觀禪院三十講始之、十五ヶ日如例也、

十八日、井院三十講始行、十五ヶ日如例、

五月五日、興西院三十講始行、十五ヶ日、

〔經覺私要鈔〕

七十七 閏八月十六日丙戌、齋

一、當年卅講論匠事、自僧正方被申子細、

九月朔日庚子、齋

觀禪院三十講

菩提院三十講

興西院三十講

尊舜三十講論匠ヲ望ム

衆徒ノ子ト國民ノ先子トノ寺務ニ問フ

經覺ノ答書

一、卅講論匠事、尊舜房學專以禪定院僧正色々自今有申子細、僧正又受身懇被

申問不可有等閑之儀之由返答了、所望様ハ明年二月被召様ニと申云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 閏八月十六日

一、去月七日三藏會之次ニ賢弘内々申入、尊舜三十講論匠事内々所望也、但

定英尊舜ハ同薦十二薦也、定英ハ衆徒福智堂之息也、尊舜者國民箸尾入

道息也、閣衆徒子、國民子十二薦論匠跡有之者可所望申云々、仍色々雖才

學付、先例無之間、寺務エ尋申入之處、御返事如此、餘事略之、

十二薦者加論匠候事ハ、無比類修學者歟、又寺いゑの子歟、或又西座衆

徒の子歟、如此躰よて候てハ、其跡候ぬとも不覺候、清算房禪職ハ以修

學無双之由、十二薦よて付折紙候ける、無餘儀可召加歟之由遣愚意候

へとも、可然者之類とも候てあ不召加之間、無念事ニ申傳候、但尊舜

者修學分濟不存知之間、不及是非候、同薦之時、衆徒子と國民子とハ可

有差別事候間、別段之儀候てハ、衆徒子をさしをき候て、國民の子を

召加候ハん事ハ、先例候ぬとも不覺候、

後八月十六日

此御書可遣賢弘方也

九月二日

一、寺宿三十講論匠事、明年二月可被召之由御書到來、仍其子細尊舜方二可申遣之旨仰與弘了、近比畏入云々、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十一月五日

一、學侶書狀到來、勅願方去年收納之吳綿、只今南着之由武友注進旨其聞候、御講事十五日以前可有始行云々、於用却者難有之云々、

六日

一、勅願方綿六十五屯到來、五屯ハ納所召仕之云々、然者御講始行且如何、

十日

一、勅願三十講、自來廿日可始行之由成僧名了、〇二十日三十講ノ記事缺ク、

十五日

一、學侶書狀到來、新三十講事、來月初比可被始行云々、仍延引旨仰了、

十七日、雪下

一、新三十講兼證義事、權別當法印辭退申、仍任圓僧都二十座目講師也、成一

寺宿三十講

勅願三十講

新三十講

因明講

經覺尋尊
嚴實一條
兼良ヲ訪

座了、并兼證義事仰之、結座問者興憲也、闕請之新供目代貞海則興憲得業爲初座問者也、初座問者貞嚴律師爲廿座目講師故也、如近來者辭退躰無之者、前供目代ハ不可參勤者也、
廿七日、雨下
一、新三十講論匠事、自慶英方以英寬申入子細在之、興基之書狀在之、一切不得其意事也、且如何、

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月九日壬子、雪下

因明講事、明日之由定清已講雖申、八專中不可然之由返答了、

〔經覺私要鈔〕

六十七 五月廿五日丁酉、霽

已刻出禪定院、爲行因明講也、講師定清擬講、問者專祐、題延壽法者法自相勝論敵者傳也、聲論者愚鈍傳如形令成敗之間、事終畢、散花信承公、講問事終有一獻、隨心院嚴實僧正被來了、被加一獻席了、其後兩僧正大乘令同道二條兼良參大閣御宿了、有少一獻、然後申暇還向了、今日召具者畑經胤、片山彌三郎、山村、尊藤、松若、喜久若等也、興昇一人召古市畢、

〔經覺私要鈔〕

七十七 九月二日辛丑、霽

東南院被來、回明事粗又申聞畢、

〔大乘院日記目錄〕三 四月十六日、觀禪院梵網講

五月廿五日、寺務御願因明講始行於禪定院、

〔經覺私要鈔〕六七十 六月十二日、甲寅、霽

樸陽講

一、樸陽講廻請持來之間、加判形遣了、

〔大乘院寺社雜事記〕七四十 九月晦日

向淵講

一、向淵御講米十五石分、付納所旨注進云々、此分不可然、先可成手番之由仰了、

〔尋尊大僧正記〕寺三社雜事記 十月十八日、夜雨

一、向淵御講手番去十六日成之了、

十二月五日

一、向淵御講米十六石可沙汰云々、御講事可始行之由、御講衆書狀到來了、次

去年御米器物相違并殘分事仰納所了、

六日

一、向淵御講米支配事等條々、

講米事、本式者七十石也、近來三十石分也、三十石ハ延定四十三石九夕五

參也、地下升并下行升各給主松林院ニ在之、

御講始行之時、御誦經物代二貫百七十五文、地下沙汰也、同時人夫二人罷

上、始行定日加下知間、各罷上、五ヶ日之間在奈良、御講方無所用間ハ納所

召仕之、同時炭二荷上之、堂場用也云々、

御講衆以下役者事

證義者二人或一人 御講衆十人 綱所二人 頭二人

承仕二人 花摘二人 同食事 主典二人

同食事 鐘槌食事 札賦 御神供 一石

御讀經以下代二貫百七十五文

十六日

一、向淵御講衆書到來返事了、

〔大乘院寺社雜事記〕七四十 九月二日

一、今日招題講云々、學侶會合五十人斗、

〔尋尊大僧正記〕寺三社雜事記 十月十八日、夜雨

招提講

一、長谷寺八講自今夜始行、四ヶ日也、講衆四口下向了、廿八日

一、長谷寺八講箱八合、白布代壹貫二百文到來、同檢按方八木代十九疋餘到來、各田樂頭人信專方且遣之了、

十一月廿二日

一、信專助成事、壹貫四百文、長谷寺八講以下方壹貫六百文、反錢內二貫文、來月所々公事錢之內兼約之了、合五貫文也、三貫文ハ院ニ下行了、

十二月二日

一、東金堂後戸尺迦講始行云々、

五日

一、勅願御講事、慈恩會以前可被始行之由、學侶書狀到來了、

七日

一、良祐資支米七斗十合到來云々、爲辨才天講方足向也、年預專祐、英建兩人

ニ仰付之、

〔塔寺八幡宮長帳〕

○四岩代

文明參年卯丁正月八日開白、同十日結願、

初百內

侍從殿

貳百內

伊勢殿

參百內

安防智光阿

肆百內

乘珍公

伍百內

尾帳阿(張力)

陸百內

紀伊殿

陸百內

熊野宮

陸百內

少貳阿闍梨

陸百內

對馬殿

陸百內

日向公

陸百內

大乘經

陸百內

仁王講

陸百內

大乘經

紀伊殿順炭寺僧分

二位殿

順炭可有
永金御房

順炭可有
正現御房

〔中尊寺經藏文書〕

○三陸中

囑請

陸中中尊
寺大師講

恒例天台大師講勤人數事

圓林坊法印 通圓坊法眼

行意阿闍梨 行觀坊々々奉

宥榮々々々 密城坊々々

公幸阿闍梨 寂勝坊々々

賴幸々々々 賴宥々々々

智盛々々々 榮光々々々

宥光大德奉 行有大德

行盛大德奉 秀幸大德奉

有幸大德奉 幸有大德奉

十乘坊々々

月林坊々々

妙識坊々々奉

盛藝々々々

良圓々々々奉

賴宗々々々

幸海大德

賴藝大德奉

賢有大德

行圓阿闍梨

觀道坊々々奉

南勝坊々々

大林坊々々奉

澄幸々々々

智榮々々々

有基大德

良幸大德奉

澄賢大德奉

中納言殿

右守先例被勤仕狀如件

文明三年霜月十七日

〔東寺百合文書〕

一巻之部一

〔端裏書〕
近年分宗康繼之明應七年戊午

渡申 光明講方世出世道具目錄

一、木尊兩界一鋪箱入

一、土砂器一

一、過去張七卷

一、塔版木二枚八万四千基版

一、食堂聖僧御鉢子舟入

已上出世門具

一、上椀五十膳各箱入

一、皿數百

一、中居折敷六十枚此內二十枚綠黑

一、式一卷加匭六本

一、現在張一卷帳方

一、版木三枚大日經、仁王經、金剛

一、同摺寫用雷盆磨粉

一、小箱一合地藏堂方寶藏畢

一、折敷大小百枚

一、中居椀廿五膳此內十五膳大椀

一、中居皿數四十五

東寺光明
講方世出
世道具目
錄

出世門具

世間門具

- 一、下椀三膳此外散々有之、破損
- 一、升一出米時用之
- 一、味曾垂袋壹
- 一、杓五
- 一、箱一合算用狀以下、雜々等入之
- 一、下茶椀貳
- 一、提貳
- 一、白鉢四
- 一、布巾參以米袋布巾用之
- 一、文書箱一合明年算用時可渡申

已上世間門具

右所渡申如件

文明參年十二月晦日

仙澄(花押)

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 三月十八日

三十頌

一、一昨日より七晝夜、三十頌於四恩院在之、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 七月十八日

一、自一昨日於西室請雨三十頌在之、學侶六方沙汰也、

廿一日、雨下

一、三十頌至今日六ケ日云々、小雨下、

〔見聞雜記〕〇歷代殘闕日記八十四所收 一、同廿八日、俊雄公金界ノ正行結願了刻、今夕

金界ノ正行結願

胎藏ノ加行始

ヨリ又台藏(胎下同)ノ加行始也、

一、同十三日、俊雄公台藏界之次第傳受了、

一、五月九日、台藏之加行結願了、則初夜ヨリ台藏之初行開白了、

一、七月六日、俊雄公護摩加行始之、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月十一日

一、千卷心經、導師信承、〇二月、三月、七月、八月、閏八月、九月、十月、十一月、各朔日ノ條、異事ナキニヨリ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月八日、小地振兩度

一、万卷心經、導師大納言律師、

十日、小雪

一、万卷心經結願之、

〔經覺私要鈔〕五十七 正月八日辛巳

一、三ケ日内一、万卷心經發願、佛供二坏、燈明二燈備進之、百五十卷讀之、

一、爲心經舜信法師來、千卷讀之、

九日壬午

心經二百卷讀之、

文明三年雜載

同結願
同初行開
白
東寺護摩
加行

千卷心經

万卷心經

結願

餅未曾津

一切經轉讀

臨時一切經

彼岸經

一天氣事外寒之間、心經衆有利口之間、出酒以下了、十日癸未

心經結願了、有餅未曾津、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 三月七日

一、一切經輪轉之一、蔦英照法師可成本衆之由捧所望狀者也、早々可預恩補之由云々、但第四番衆別藏司英憲僧都之闕分未捧申帖之間、別藏司新補無之、何躰可申入候哉、所詮別藏司補任以後、可成本衆旨返答了、

八日

一、一切經四番衆藏司光舜法印所望輪轉事、春禪房所望云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 九月十二日

一、自昨日臨時一切經在之、每日百口出仕也、七ヶ日也、廻請惣藏司成之、於八講屋在之、午貝定量也、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 二月十八日

一、彼岸經一部代五百文、自佛地院沙汰之、則渡經師方云々、三月二日

彼岸經撰寫供養

東寺夜叉神修正

一、彼岸經撰寫供養、導師極樂坊、代物一部別五百文下行、

二、松林院一部未到、今日到來了、佛地院一部

安位寺殿一部

予一部半

清賢一部半 候人中一部半

北面中一部半

〔東寺執行日記〕

一十 正月十日、夜叉神修正入足、

五文兩座分 二文導師用 フチタカ

同

二文 カナカケ

五文 シト入

三文 カワラケ

五文 コフ

五文 カキ

五文 カウシ

一文 ラコシ

一文 油物

廿四文導師用 清酒

兩座分

四十分

ニヨリ酒

廿三文 紙

油杓 夕法會 大ミ三本 餅

木一束 酒

メ百廿三文

初獻アラメ 一鉢ニ入之

二、コン焼餅二枚面七八寸厚一寸

三、コンモミ大根一鉢入之コフマキカンシ

三色物入ウスヲシキ 人數任テ出之

中綱八人 淨琳、定仙、定觀、敬依、乘經、出仕、定金、定忍、三人分、不參也、

職事三人 與左右次郎、右衛門次郎、出仕、孫太郎、不參

鐘突二人 福善、得万、

地下職事 右衛門五郎

金輪一、酒ナヘ一、銚子二、ヒサク(ケカ)一持之、

牛玉廿一枚、執行役書出之、白牛玉ハ守役也、

同木ハ鐘突役

導師方ヘハ鏡二枚厚一寸計、グキヤウ五種カサリ有之、花平三有之、五種ハ

大コン、トコワ(マ)、クリ、カキ、カンシ送之、當年ハ此分、已前兩三年ハ亂世ニヨリ

テ各一枚送之、

廿八日、修正壇供納已後、

目代々上綱、兩雜掌、廻番、大炊、定金、職事與左右、定使澤見入、道門差三人廻、

初獻タウフ、カンムスヒ、コフケ、備物二アラメ、木具

目代ハ二文カケナ、大職二人ハ一文ヒヘキ

二コン 餅(未會津カ)、木曾律小豆 悅大目、折敷 莖皿

同 大根モミテ、引之四

三コン 菓子三カキ、シ、コフ、目代二文フチタカ、餘一文フチタカ、

下部定使ハウスヲシキニ菓子二色、

年貢半濟
ニヨリ夜
又神酒肴
ヲ半減ス

同日修正方、赤土器五百出之、本ハ此之内三百ハ小土器、皆赤シ、雖然當時無之、

トウスミ五文分、菊紙四十枚カシク

二月三日、修正牛玉三枚出之、執行役、白牛玉紙取人數各二本宛、菊紙、依時守役、

〔廿一口方評定引付〕〇山城 九月十二日

一、夜又神收納之時、酒肴棚守役沙汰之事、執行難叶之由、申通披露之間、年貢等半濟之上者、以前之半分之通可有沙汰之由可申云々、

十五日

一、夜又神方收納酒肴之事、半分通猶難叶之由、執行被申披露之處、被申之通不可然、猶堅以其分可申付云々、

廿二日

一、夜又神方收納世諦事盛米、所在可致沙汰之由、執行以書狀申、其趣大炊可申付云々、

廿七日

一、夜又神方收納世諦事盛米、所在可有沙汰之由、大炊申付之間、領狀申畢、就其於大炊許可納之由、堅申之通披露之處、無先例之間、不可叶云々、エハ執行方

水田半濟之間、如此令本腹者(復カ)可爲如元之由、一行可有沙汰之由可申付云々、後日執行坊令沽脚(却)無在所之由申間、於大炊許收納之、

東寺修正
法會次第

〔見聞雜記〕

○歷代殘闕日記
八十四所收

一、正月三日、西院修正法會次第之夏、

先供養法師登禮盤前方方便了、金二打、眞言、仁次散花、ヒルサナ、次梵音、宗、次錫杖、承、次表白五悔等如常、五大願ノ終讚、四智、心略、梵語、次振鈴已、法印、後卅二相、公禪、次後鈴已後讚、四智、心略、漢語、吉次廻向方便ノ間、仁牛玉紙同杖賦シ、供養法師猶不及下禮盤、牛玉導師作法在之、導師終テ、頭ノ一薦脇札ノ傍、方、東進寄テ取寶印ヲ、杖ニハサ、先内陳ノ正面、影ニテ三拜、有躡居ル也、龍猛等ノ御エイノ前次西ノ間ニテ三拜、次東ノ間ニテ三拜、然後如元脇札ノ傍、仁持寄テ、鎮タルヲ解テ、寶印ヲ竝机、次先杖ヲ導師ノ本座也、平座置之、又脇札ノ傍、仁立寄テ、寶印ヲ取テ、内陣ノ正面ノ方テ、先西方、ヨリ始テ、次西ノ間、先東方、次東ノ間、次東、押之也、其後導師猶禮盤ニ居ナカラ寶印頂戴、其後平坐ノ一薦ヨリ次第、仁各頂戴了、此間、仁導師還著本坐アリテ後禮時始、此間、仁紙支配了

修正壇供

一、同廿五日、廿一口衆儀云、來廿一日修正壇供米支配事、寺務未補之間、官首

分ノ餅廿一口中へ一牧(枚)宛令支配、相殘分可爲年預自詮候也、治定了、但長祿四年ノ例又如此云々、

一、同廿七日、衆儀云、頃ノ所作者、先々出仕當坐ノ一薦云々、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 正月廿五日

近年

一、講堂修正壇供之事披露之處、寺務御分十二枚、別當分同、余分以下取、今廿一枚供僧中可有支配、其餘者所在可爲年預德分、且者先規歟之由衆議畢、

同廿七日

一、執行僧都申修正壇供目代分事、被成闕分、別當執行可有割分、其子細堯忠法印寺家ニ被進納張分明也、其上先年長祿四辰支配如此云々、目代々上總申云、目代所役每事令兼仕上者彼分可被成闕之條不便至也云々、衆議云、先年者目代未定之間、如然歟、納張之事可被任道理之間、不可成指南歟、旁目代方可有支配之由、衆議治定畢、

同三十日

一、修正壇供目代分之事、去廿七日之評議之旨爲年預雖有下知、執行追訴有之、其子細以前、同篇此趣爲年預披露之處、衆議云、先年者目代未定之間、被

壇供配分

成闕分歟、只今之事者、目代代既被定上者、不可成引返、此旨爲十八口奉行可申付之由、衆議治定、其故者當目代代年預坊宿住之間如此、仍當年預退座、

修正酒肴
ヲ缺クヲ
以テ供僧
ノ處分ヲ
請フ

興福寺喜
多院二階
堂修正

供衆并ニ
堂莊嚴等

一、目代大炊職仕訴訟申云、爲棚守役、修正當日廿八、次日廿九、酒肴之儀有之處、近年次日廿九、酒肴無之、可預供僧中御成敗云々、此旨爲年預披露之處、衆議云、既爲先規上者、爲執行可有沙汰旨治定畢、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月十三日

一、喜多院二階堂修正事、予直ニ仰付之、自去年奉行職事召放故也、所々定使事ハ木阿彌ニ仰付之、始行條々、

一、供衆十口、堂方十口、各廻請ハ自兼日出世奉行大納言(尊譽)律師成之、諸進參申出事、

一、預職事兼ヨリ堂衆之内被定之、則爲十口内令勲仕時導師事、

一、堂内拂治事前日沙汰也、給主方定使沙汰、則木阿彌ニ仰付之、昨日致沙汰了、鑑事自給主方出之、前給主ニ相尋之處紛失云々、仍別鑑用之、後戶ヨコ鑑也、

一、堂莊嚴等事、當日致沙汰、人夫ハ山内庄ニ參申、渡物等悉皆人夫沙汰也、壇具等同悉皆沙汰也、

牟山庄、飯悉皆渡之、於公方定使所飯ヲカシダ者也、人夫二人、

向淵庄、餅二百二十枚、人夫三人、

小山戸庄、餅二百十枚、人夫四人、

一、高ライ六帖渡之、

一、□ 四帖渡之、カキ臺在之、

一、油二升、先以五合給之、

一、ウス縁長床 一帖渡之、

一、杉原一帖、牛玉用、預方ニ渡之、

一、厚紙二帖、同、預方ニ渡之、

一、雜紙一束、杉原五枚、大諷誦用同之、但今日杉原一帖と五枚を遣之、

一、禮盤(脚)一却渡之、

一、磬盤一渡之、於鵲堂借用之、

一、明障子一間渡之、正面用也、

以上

- 一、油ツキ、トウシミ、預役、
- 一、マツ香、シキミ、牛玉書事以下同沙汰也、寶印
- 一、牛玉杖御定使役也、
- 一、細々雜事皆以預方申沙汰也、
- 一、給主方德分餅十枚、飯ホチ一、牛玉一本、
- 一、奉行方餅五枚、牛玉一本、
- 一、給主定使木阿ミ
- 一、御定使、
- 一、大導師、
- 一、時導師、
- 一、諸進兩人、
- 一、地下人夫、

以上

十八日

大發志院
觀音修正

兩堂番頭
米
修二月
用途

兩堂修正
上湯

一、大發志院觀音修正於納所坊修之、弁公供僧一口也、此外時導師ハ納所役、
梵音衆二口、又堂衆一口、合五人、一人別餅五枚引之、近頃不得其意事也、

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月十一日甲寅雪下

一、兩堂番頭米事、所濟之樣相尋之處、於木津者一向于今不沙汰候、至鳥見矢
田者、十果計各致沙汰之由申間、此米修二月用脚也、於修正者不可依此所
濟有無之由、堅可仰合兩堂之由申遣了、

三月十二日乙酉、霽

一、修正事、自今月晦日可始行間、上湯事可被觸催之由、仰遣尊譽律師所了、

廿四日丁酉、雨下

尊譽律師以狀申云、○中略、供目代辭任次修正事、自來晦日可有始行由候、
上湯鉢共責伏之處、於西金堂上湯者悉領狀申、而東金堂上湯好藝、房深學專
覺房忍以任日之次第可沙汰之由申候て、自晦日事ヲハ不領狀申云々、仍
返答云、○中略、上次上湯事、兩人申狀不可然候、以任日可沙汰由申歟、此條
若舊記候歟、又人庭訓候歟、所詮不進舊記者、五ヶ年間可加罪科之由、可被
仰含旨仰了、

〔經覺私要鈔〕

六七十 四月九日壬子齋

一、自學侶修正事、自來晦日必々可始行之由申賜了、
廿三日丙寅、天曇

一、自學侶申云、修正事、木津番頭米廿石未進、矢田庄事、如此間可沙汰之處、兩堂悉沙汰、究可始行、令申間、來月十日迄申付云々、

廿六日己巳、天曇

一、修正事、今月中始行不可叶之由、堂家申切間無力、自來月十日可始行之由仰付了、

五月三日乙亥、雨下

一、自學侶有書狀、修正事、自來十日可始行之由、兩堂へ申付候、同日寺務モ上湯以下堅可被仰付之由申之間、其分遣學侶狀於出世奉行、可加下知旨仰繼舜畢、

十九日辛卯、自夜前雨下甘雨云々

修正上湯事、可爲任日之處、俊尊佛地院得業被殘、被請定餘人之條不可然之由申給之間、於俊尊得業者爲西金堂一番頭相應沙汰條、先規不分明能々勤

木津番頭米

矢田庄番頭米ハ
番頭米ハ
修二月ノ
料ニシテ
修正料ニ
非ズ

學侶修正
ノ遲滯ヲ
答ム
筒井順永
ノ幹旋

舊例可申候歟、於寺家沙汰者、番頭相應沙汰事、きと不被云合之間、如此被請定之由仰遣了、

一、修正始行事、矢田庄番頭米悉以不進濟者、不可始行之由申之間、此段又以不可然候、堅可被責伏之由申之間、返答云、於番頭米者、修二月料也、更以不可爲修正煩、然每年就修正申違亂間、始行事及夏秋以外事、所詮可被罪料堂司等歟、とても始行事、申違亂不行上者潤色も無益事哉之由仰遣了、

廿日壬辰、霽

學侶狀

兩堂修正事、于今停滯不可然、魔障襲來之瑞相無勿躰之間、今日成群起之集會、可及嚴密之沙汰旨一決之處、筒井舜良律師付内外籌略之間、室方令承諾屬無爲之間、自來晦日可有遂行通、手水所事學侶相觸候、同自御當職被觸遣者可目出候、次任日次第事、御當職之御例、兩篇御沙汰之由被仰出候、所詮住侶中相亂之子細共繁多之間、於以後者可爲任日之薦次旨、學侶中事者令一決候、御當職中同可得御意、御評定旨可有洩御披露、(候脱カ)恐々謹言、

五月廿日

供目代俊算

袖云、

手水所諸役悉無越度之様、可被觸遣條可目出之由、可得御意候、返事案

修正事、依嚴密沙汰、自晦日可有始行之由被申、返々珍重候、就其手水所事、先々曾雖不依任日之次第事候、後々以任日可有沙汰之由、被一決之由被申候上者、寺家御沙汰可爲其分候、可得御意旨可令披露集會給也、恐々謹言、

五月廿日

繼舜

供目代御房

五月卅日壬寅、大雨已刻雷鳴

自今夜修正始行之、

〔大乘院日記目錄〕

三 正月十三日、喜多院二階堂修正、給主未補之間、直ニ

仰付之、

六月一日、兩堂修正始之、手水所西長弘、增專、教弘、好慈、專覺、兼實、

吉祥御願

〔經覺私要鈔〕

六七十 五月廿五日丁酉、霽

一、吉祥御願廻請、別會五師成之、則令加判遣了、

廿七日己亥、雨下終日大雨也、終夜同前

吉祥御願下行物方事、可有始行者早々可下行之由、公文目代申賜了、

廿九日辛丑、霖雨以外事也

吉祥御願御布施、只今自寺務可出吹田庄役分、彼是貳貫百五十文内仰付

龍門年貢、先百疋下行云々、相殘分臈可下行之由返答了、

卅日壬寅、大雨已刻雷鳴

自今夜修正始行之、以上ハ修正條ニ收メ、同吉祥御願行之、導師實心擬講兼五師

也、今年別會也、

六月八日庚戌、霽

一、兩堂并吉祥御願牛玉、堂童子三人持來之間、用途一連遣了、爲酒肴歟、

〔經覺私要鈔〕

五七十 正月朔日甲戌

一、懃行事

荒神、聖天、藥師咒、三身合行咒、各千反唱之、理趣分一卷、金剛經一卷、各信讀

荒神咒
聖天咒
三身合行

文明三年雜載

二七一

布施

六日、十二月十八日ノ條、
同文ナルニヨリ略ス、

〔經覺私要鈔〕七十 五月廿四日丙申齋

地藏少咒小々唱之、

〔經覺私要鈔〕七十 十二月十八日今日節分也

〔經覺私要鈔〕七十 正月十八日辛卯齋

一、於長谷寺法樂懃行如例、次小觀音經三百卅三卷讀之、同令法樂了、十八日

ノ條、異事ナキ
ニヨリ略ス、

二月十八日辛酉齋

小觀音經卅三卷讀之、法樂長谷寺了、并小咒等如例、又小咒千反唱之、法樂

安位寺觀音了、十八日ノ條、異事ナキニヨリ略ス、

〔尋尊大僧正記〕三 十二月廿四日

一、香專坊來、自明日觀音加行始之云々、大略五日六日之間ニ始之云々、二年

加行ハ自大晦始之云々、

〔經覺私要鈔〕七十 三月十五日戊子、齋自日中雨下入夜甚

恒例念佛六万反唱念之、六月十五日、九月十五日
條、同文ナルニヨリ略ス、

恒例念佛

觀音加行

小觀音經

節分

地藏小咒

百万反念佛

踊念佛

カッキ燈籠

風流

念佛日供

〔經覺私要鈔〕七十 六月廿三日乙丑齋

今日於高緣有百万反念佛云々、故播州追善也、

〔經覺私要鈔〕七十 七月十七日戊子齋

入夜自古市沙汰立、ヲトリ念佛來、有笠以下トウロヲ、カツケ者少々在之、

十日己丑

一、入夜内者片山三郎松若以下取立、ヲトリ念佛沙汰之、笠等在之、古市へ罷

向了、夜前報答歎、カツキトウロ八在之、八條子息侍從相加了、

十九日庚寅

一、入夜自古市又令風流來了、一族若黨所爲云云、カツキトウロ廿許在之、有

笠、藤壽丸舞了、舟ヲ作テ乘之、自舟上テ舞、御前爲躰隨分舞了、追ヲサへ是

ヲ留間、二度舞了、神妙、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 八月廿五日

一、念佛日供一乘院方沙汰、

廿六日、雨下

一、念佛日供當方庄之院寺分膳送進之、曾水如例云々、沙汰人指合之間、順圓

罷向致奉行云々、院仕方下行、兩日分十疋給之、

〔經覺私要鈔〕五十七 二月廿四日丁卯

地藏勤行

地蔵勤行如例、○六月、七月、八月、閏八月、十一月各二

〔大乘院寺社雜事記〕四十六 正月廿八日 小雪

食堂陀羅尼

一、廿四日より食堂ヲラニ始之、

〔經覺私要鈔〕五十七 正月廿六日己亥霽

別會五師順懷書狀、繼舜進之、

食堂七晝夜陀羅尼、自廿四日如先規沙汰候、就其越前寺主、同越前都維那、大輔寺主、因幡寺主、丹波都維那、此五人無御寺恩之間、不可隨所役候、
とて、進奉無其沙汰候、肝要、廿九日晦日兩日間、酒肴佛供燈明可有闕如候、佛供等無備進者、山寺衆定而可及訴訟候、殊年始祈禱事候、餘ニ無勿、
躰候早々此趣御披露候て、無爲之樣御計略可目出候、早々洩御披露可目出候、恐々謹言、

正月廿五日

伊與法橋御房

別會五師
順懷

七晝夜陀羅尼
越前寺主
等五人
恩ナキニ
ヨリ所役
ニ隨フ
欲セズ

袖云

尙々佛供燈明闕如候者、返々不可然候、山寺衆定可有訴訟候、早々御披露可目出候、

返事

食堂陀羅尼三綱所役事、稱無寺恩、不可隨所役之由申候云々、以外次第候、延文元年七月十二日神木金堂遷座時、稱無寺恩、琳乘權上座、經寬寺主、範舜寺主、憲乘權寺主、神供等不勤仕之間、以中綱宗恩、勾當、慶藝兩人御問答云、於諸寺役者、就職令勤、仕事更不可依寺家寺恩候、上者金堂前神供、早可勤之、不然者可辭職之由被仰了、返事ニハ猶難治之由申切之間、委細御問答分學侶集會ニ有御披露、被申長者、琳乘、經寬、憲乘、任長者、宣被罪科了、無殊子細之時、猶以下被行寺恩跡分明候、既當時事天下一同錯亂、他國寺領悉以令違亂事候間、不被行寺恩之條、曾非可訴申儀候、其内大輔寺主寺恩、淺井庄知行及訴訟候條、以外不當不可說事、不知行候者、何不辭申哉、旁以不可說事、所詮此五人猶寺役不勤者、任先例被申長者、可被加罪科、嚴密被問答、可被申左右之由、別會五師可被迎遣也、

長者宣ヲ
請ウテ之
トス

恐々謹言、

正月廿六日

榮甚

伊與法橋御房

廿八日辛丑、天曇

繼舜法橋申云、食堂陀羅尼所役事、於玄深者曾以不申子細之處嚴密御下知之由、別會申送候、令存候、可有御糺明之由申云々、仍遣別會書狀、分明及訴訟之由、見此面歟之由迎遣了、

廿九日壬寅、小雪下

三綱所役事、孝乘父子猶申子細云々、申長者可罪科者也、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 五月十五日

一、遊佐越中申、於西院尊勝タラニ可預勸修之由申間、今日被行畢、捧物重而可進云々、明日以雜掌可遣卷數云々、貳百疋、同十六日、送之、則支配了、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月廿一日、雨十八日

一、十八日光明真言如形修之、

〔經覺私要鈔〕

七十七 七月十四日乙酉、今日夕立甘雨云々

尊勝陀羅尼

光明真言

孟蘭盆

一、及晚手向水於亡魂、燈明六、蓮葉瓜以下蓮葉中ニ入了、

十五日丙戌、齋

備進靈供、後報恩院、後己心寺、後寶峯院、正林禪尼、後寶峰院母堂、按察局妙觀禪尼、阿禰女、乳母也、吉阿、奉公也、阿禰女兩人、居蓮葉、手向之、所於自餘六膳者各追衝也、

一、瓜一荷法花經誦所へ遣了、仰付楠葉了、今朝早旦可有其經云々、

一、酉初點手向水於亡魂了、

一、恒例念佛六万反不唱之、十一万反爲亡魂唱之故也、

十六日丁亥

今日於延命寺知識等企之有施我鬼、其衆廿人計云々、有時等云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 七月十五日

一、御靈供一前別衝代十二錢、供御所方十二錢、飯六合之由注進之、

〔大乘院日記目錄〕

三 十月廿六日、大供始行、供目代興憲、供師十三人出仕、

希代珍事也、但先例在之云々、

〔尋尊大僧正記〕

三 寺社雜事記 十月十三日

靈供

施我鬼

大供

文明三年雜載

二八〇

一、大供十七日日十六可有始行之由仰遣供目代了、役人兩人事申入了、十五日

一、大供延引之由仰遣了、昨日自學侶申入子細返事急事也、明日爲披露也、大供始行之時、前後日集會事不成故也、則明日午貝定學侶集會可相催之、由供目代二仰付之、畏入云々、次學侶衆明日罷出、如先例可加評定之由仰遣之了、

廿五日

一、明曉大供可有始行、寺務不可有御出仕之由兼仰問、廻請以下今日供目代進之、則御判を申出了、古市へ令進了、廻請、

分配

大供米伯漆拾斛事

方廣會

炭直料肆斛

佛供貳斗壹升

講師壹斛

讀師漆斗

唄捌斗玖升

散花七斗

算主五斗

大供米等分配

方廣會

〇九中

廳方陸斛

別當前大僧正法印大和尚位

檢校

長官前大僧正法印大和尚位

五斛

法隆寺前大

參斛

一乘院法務前大

同

大乘院前法務大

同

大安寺權僧正法印大

同

西大寺

同

松林院

同

東門院

同

權長官法印大僧都大和尚位

同

榮勸房法印

壹斛伍斗五升陸合玖夕貳才

性舜房法印權大僧都

同

堯勸房法印

同

文明三年雜載

二八一

琳舜房法印權大

顯春房法印

順學房法印

勸□房權大僧、

陽春房權大

延恩房權少僧都

觀緣房

舜顯房

良舜房

觀識房

長學房

延順房

禪勝房

順禪房

源信房

同 同

淨法院

大納言

願圓房權律師

實舜房

長願房

松源房

圓長房

良勝房

陽忍房

舜慶房

安恩房

光明院

大學頭

定專房擬講

顯舜房

同 同

壹斛肆斗玖升六合玖夕二才

年預

覺恩房 〱

圓覺房 〱

學頭

任英大法師

寬專 〱

高專 〱

覺乘 〱

俊嚴法師

供目代興憲法師

慈恩會講師

同會問者

壹斛肆斗玖升六合九夕二才

同 同 同 同 同 同

文明三年十月 日

長官前大僧正法印大和尙位 御判

前大僧正法印 〱

法務前大僧正法印 〱

前法務大僧正法印 〱

權僧正法印 〱

權僧正 〱

權僧正 〱

權僧正 〱

權長官法印大僧正大和尙位

法印大和尙位

權大僧都法印大和尙位

法印大和尙位

權大僧都法印大 〱

法印 〱

法印 〱

權大僧都法眼和尙位

權少僧都法眼和尙位 〱
線〇コノ本アアリ、

權律師法橋上人位○コノ次ニ棒線九本アリ

大學頭

傳燈大法師位○コノ次ニ棒線三本アリ

學頭

傳燈大法師位○コノ次ニ棒線三本アリ

傳燈法師

供目代傳燈法師位

強杉原十枚ニ書之、一枚立紙也、

小學頭補任一卷、年々分繼之、繼目ウラニ御判アリ、

大供

傳燈法師位與憲

右補任小學頭職如件、

文明三年十月廿六日

供別當前大僧正法印大和尚位御判

一、供目代來習禮了、今夜ハ慈恩院ニ可有云々、其時分可參上云々、堂場等自

小學頭職

雜具

華嚴經轉讀

小供

早旦用意也、御承仕ニ申付之、廻請則遣慈恩院畢、

一、役者事侍二人、御承仕二人、奉行繼舜法橋、侍一人不足之間、三綱宣舜權都維那ニ仰付之、俄ニ闕如之間無力次第也、

一、雜具、簾廿一二間、屏風籠丸九間、小文八帖、紫四帖、圓座十枚計、佛臺、高燈臺
二、光燈臺二、前机二、禮盤一、磬臺一、瓶二、香呂一、油一升、佛供二坏、トウシミ、スヘハ御後見ヨリ、

廿六日、夕雨下

一、大供以後、自供目代方花嚴經第四卷并下文三石分送進之、則令轉讀之、以力者返遣之了、於下文者此方ニ留了、惣僧綱悉以此儀也、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十八 慈恩會御記 十月廿五日

一、來曉大供分配在之、在所料理自九間至中屋畢、東西九間也

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 正月一日

一、小供御如例、予禪師同所行之、手長律師役泰坊、上北面番良鎮、各上下小衣也、供御所役人舜信法師、厚紙二十枚、供御所十五枚、院仕給之、○二日、七日ノ條、異事ナキニヨリ略ス、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月十六日己丑、齋自日中天曇

河內大平寺荒神供

吉井信衡供料

東寺荒神供
興福寺荒神供

新供衆

一、河內太平寺宥智法印、自元日荒神供至昨日始行之由給卷數了、祝着、仍油煙一^(挺)遣了、於布施物者來廿六日可遣吉井^{立野}所之由仰了、
廿八日辛丑、天曇

一、自吉井信衡方太平寺返事取進了、神妙、一昨日廿六日荒神供料百五十疋遣之返事也、

〔見聞雜記〕

○歷代殘闕日記 八十四所收

一、同廿七日、荒神供ノ次第、寶井院ニ傳受了、

〔大乘院寺社雜事記〕

慈恩會御記 四十八

九月廿八日

一、荒神供事、仰付堯學法師致其沙汰了、○十月二十八日、十二月二十八日、條、異事ナキニヨリ略ス、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 三

十一月廿八日

一、荒神供堯學法師參申、佛舍利三粒予渡之、畏入云々、此次一粒給堯圓了、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 二月廿一日

一、明日新供衆二十口同音論事、三國添請口、近來一向無正躰間、供衆等不可勤行旨申間、不可有始行云々、至七年八月廿二日、講問衆如形參勤了、就世上在々所々神領等有無實珍事々々、

廿九日、雨下

星供

三堂供

一、星供、白毫寺興坊來、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月七日

一、當門跡禪定院三堂供事、供料ハ山内七ヶ所等負所米也、應安五年六月日、御記云、

丈六堂

良意^{兼増之所} 英豪 經深 英寬 印圓 懷繼

尺迦堂

壽圓^{猷觀之所} 賢範 良玄^{慶秀之所} 善俊 奘顯 寬專

天竺堂

俊範 英弁 奘融

以上可有再興事也、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 三

十二月八日

一、結崎南就威德院供事、申入所存子細在之、古市色々口入子細在之間、大綱可落居分也、就其奉書成之遣古市了、

内山威德院一薦供事、本坊所役事令無沙汰云々、太不可然、所詮如先規

内山威德院供

每事可致其沙汰旨、可被下知內山年預之由、被仰出候也、恐々謹言、

十二月八日

信承

按察法橋御房

次落居子細ハ、去年分狹竹庄年貢事、於南前者可爲半分、半分ハ御免也、當年分悉以一座如元、南前去年當年反錢合一貫三百五十三文ハ同可進上分也、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十二月十六日

一、勅願供料衣服事、於御講者明春之間、先以支配之之間、兼證義分講師方綿一屯、百廿文料足五百文到來了、去十三日歟支配之云々、

十八日

一、節分供御所方三疋下行、於大納言僧都部屋越年了、

〔廿一口評定引付〕

〇山城 三月二日

略〇上 同聖天供七ヶ日、自同日可有始行、仍支具料一貫五百文、觀智院可送進之由、納所加下知畢、

十二月廿一日

勅願供料

節分供

聖天供支具料

生身供

鐘突給

舍利佛供

辯才天供

東寺御影供次第

一、長日西院御生身供、女御田年貢引給之間、不可有子細、可有下行由治定畢、

廿九日

一、御生身供米鐘(突力)穿給鎮守大般若支具以下、北面方乘觀乘圓兩人分、悉以女御田之年貢雖引取、伊與法橋一向不渡之間、自年始之御生身供、可令退轉、又法會鐘以下、不可隨御役之由申之旨披露之間、爲衆座□□曲事也、急可渡由兩人方被仰遣、留守之由申不及御返事、所詮伊與所申理運至極也、縱雖及法會退轉、无力次第也、兩人猶不渡彼足者、追而一段可及御沙汰云々、

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月十五日戊午、齋

舍利佛供二坏法隆寺舍利、所持舍利、分也、舍利禮沙汰之畢、

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月八日辛亥、齋

一、舍利佛供二坏備進了、可爲夏中之由存者也、

六月七日己酉、齋

一、辨才天御供備進了、

〔見聞雜記〕

〇歷代殘闕日記 八十四所收

一、同廿一日、後夜ノ御影供ノ次第、諸衆大略出候時、奉行召預下知案内、其時ニ預進出、取脇机ノ灑水塗香器、散杖等、置轉

供ノ机、參一蔕于時融之前申案内、其時立座、寄向テ轉供之机之前、先塗香、次加持香水、次加持供物等如常成之、終テ直ニ合致ノ頭ニ立給フヲ見テ、諸衆同立座、其時預ノ寂末、以鏡鉢立讚ノ頂(頭カ)ノ前、讚ノ頭鉢取之、四智ノ讚ノ發音出也、讚終テ鉢三段突也、如常、次ニ預鏡ヲ以テ來前鉢取也、其後合致頭被出之等次第如常、大概注之、

〔尋尊大僧正記〕

寺三 社雜事記 十二月十四日、雪下

一、五段戒予行之、

〔大乘院日記目錄〕

三 二月廿八日、藥師圖繪供養、開眼師(報恩院)有俊、法印、導師俊圓大僧正、

八月十二日、藥師圖繪導師與基擬講、綱所一向不出仕、新例且別會未練故也

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 二月廿七日

一、明日寺門藥師圖繪導師事、良家衆各辭退了、仍住侶鉢可勤仕云々、然間主願役事、東門院僧正(孝祐)雖領狀、導師事住侶勤仕之間、主願役事間住侶方可沙汰云々、惣而如此供養役ハ、七大寺別當役ニ致其沙汰云々、

廿八日

五段戒

藥師圖繪
開眼供養

繪所

一、圖繪導師事、俄東門院僧正勤仕之云々、

廿九日、雨下

一、昨日圖繪導師(兼雅)東北院僧正、咒願松林院僧正、綱所泰坊(新)、孝乘在京之間、泰弘參勤了、

一、同御佛昇出事、八寶外繪所與專當及相論、不令一決之間、爲集議俄ニ以寺本守昇出之云云、奉行蔕分并別會不覺也、押量ニ繪所ハ奉圖繪分隨分役也、書出以後ハ、公人可隨其役事歟、去年圖繪時及相論事也云々、

一、同實供養、導師井山有俊僧都沙汰也、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月廿一日、雨下

一、去十二日寺門藥師圖繪供養在之、綱所一向不能相催、別會越度希有事也、一、新圖繪藥師、今日琳賢房書出了、供養師寶乘院權僧正、此間本尊給堯勤了、

廿六日、雨下

一、昨日兩座繪師會合、爲祈禱藥師如來圖繪供養、令請律僧、爲開眼師心落沙汰神妙、於松南院坊沙汰云々、

閏八月五日、雨下

一、報恩院法印有俊來見參、去月十二日寺門藥師圖繪開眼師事、所勞子細在之間辭退云々、定而四恩院一薦可致其沙汰歟、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 正月八日、大地振

十二體藥
師造立供

一、藥師十二躰造立、開眼師隨心院殿、嚴實○尋尊大僧正記十月八日、條、異事ナキニヨリ略ス、

〔尋尊大僧正記〕

三 寺社雜事記 十一月廿五日

一、藥師十二躰造立供養、去八日佛所舜覺法橋不造進之故、仰武部了、代十二正、

十二月八日

一、藥師十二躰造立供養了、當年中十三ヶ日無爲珍重、除病延命祈禱也、

〔太宰管内志〕

筑前之六 石藥師堂 佛體、銘に、謹奉新造藥師瑠璃光如來

除病延命
祈禱
筑前藥師
如來堂新
造

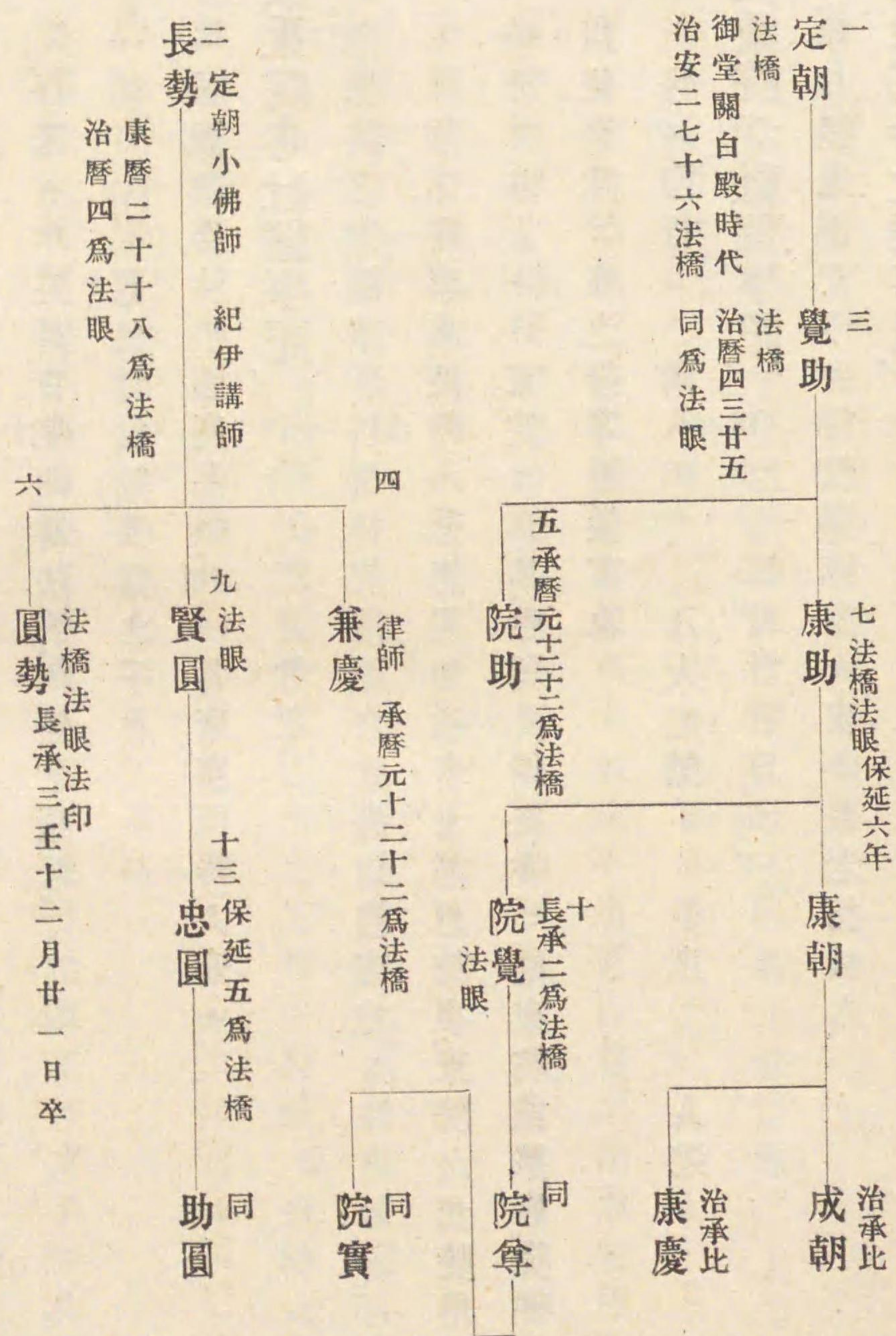
一體、爲現世安穩後生善處也、于時文明三稔辛卯霜月十二日、願主旦那己丑歲敬白石□出雲守家久とあり、此藥師早良郡石釜村にあり、重て委く考ふべし、出雲守も石釜に居たる人とは開ゆれど、いかなる人なりや詳からず、

〔尋尊大僧正記〕

三 寺社雜事記 十月十一日

一、治承時分御寺御佛造立、佛師記錄ニ見分、南都佛師ハ定朝之後胤云々、

南都佛師
系圖



治承以後御寺佛造立、金堂、南圓堂、明堂、食堂、二王、大佛師五人、助圓、成朝、康慶、院尊、院實也、

賴助

長圓

長順

院朝

圓信

慈恩院圖

千部經供養

一、康和五年七月廿二日御寺供養賞、大佛師賴助爲法橋、

一、大治六年八長圓爲法眼、長承元爲法印、長承二爲清水寺別當、

一、長承元長順爲法橋、同二年法眼、同三正廿三入滅、

一、保延五年三月日院朝爲法橋、院覺之讓也、

一、同十二圓信爲法橋、長圓之子也、

一、或說雲慶法眼、懷慶法眼、阿安各康慶同時人云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 二月廿七日

一、慈恩院之御圖繪事、以松林院借用之處、悉以修南院ニ在之云々、可借給云

々、此條不審事也、彼繪ハ慈恩院相承者也、慈恩院事、東院之光曉僧正相計

時分より、少々ハ東院ニ奉納、然間此繪表書ニ建東院或慈恩院書之、今悉

以修南院ニ在之條不思儀事也、

釋迦因行 同八相 八大地獄 餓鬼 人道

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 二月廿五日、雨下

一、昨日鵠地藏堂千部經供養、導師大安寺長老招請之、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 閏八月廿八日

一、松谷彌勒堂千部經供養、導師大安寺長老

〔尋尊大僧正記〕

三 寺社雜事記 十月三日

一、越智之北寺塔婆今日供養、橋寺僧沙汰云々、屏風二双借遣之了、

〔廿一口方評定引付〕

四 山城 三月十五日

一、定忍申云、不動堂端供養法之壇、東方被定下者可畏存之由申披露之間、護

摩壇造營方供養法、東壇端供養法可被定也、但地頭方有再興者、行法敷座

之間指合有之歟、其時者追而可有其沙汰云々、

〔見聞雜錄〕

〇歷代殘關日三月 一、同十七日、不動堂端ノ供養法ノ壇ノ亥、依預

訴（訟カ）所以東ノ方壇可被定彼壇候也、衆議了、去十五日ノ評儀、仁被治定、今日以

定觀被相觸了、

〔廿一口方評定引付〕

四 山城 九月廿二日

一、北面朝夕、并諸堂供養法評定等、獨笠指可有出仕事、不可有子細、其故、寺領

等悉半濟之間、僮僕等召具事不叶間如此、若令安堵者、如元可被成也、但其

外法會等者見苦敷之間、不可叶之由治定畢、

〔新選和漢合圖〕

文明三年辛卯四月五日、信州大沼堂塔供養、

塔婆供養

東寺不動
堂東壇端
供養法等
ヲ定ム

東寺寺領
半濟ニヨ
リ諸堂供
養法等ニ
僮僕ヲ具
ズル能ハ

信濃大沼
堂塔供養

近江萬德寺地藏點眼供養

兵燹二罹
本光庵自
德地藏菩
造ル像ヲ

文明三年雜載

〔補庵東遊續集〕

江州萬德寺地藏菩薩安座點眼佛事

二九八

美人窈窕出西方、有約聞君暫未忘、話到二千年遠事、回頭苦海尙茫茫、

大日本國江州路奧津野保八丁原萬德寺、乃土人祈福之地也、奉安地藏菩

薩像、文明庚寅之冬、寺一夕燬焉、嬰于兵也、本光庵比丘自德見之慨然興起、

掃灰燼拾瓦礫、壞私寢以復其基、募衆緣以造其像、無何畢功、非本願力何以

臻斯、實可嘉尙矣、越之明年辛卯六月初八日、就于本寺設伊蒲供、延請六和

淨侶、飄演万行祕章、仍借手山野、安座開光、以伸供養、凡拾月初八日、供養地

藏、百由旬內無諸災難、此日何日、得舉而行焉、按吾佛往忉利天、三月安居時、

舒金色臂、摩地藏頂、言汝令娑婆世界、至彌勒出世已來、衆生永離諸苦、遇佛

授記、地藏涕淚哀戀、以受付囑、經有明文、不遑縷陳也、山野適慶讚地藏、前安

居過、後安居來、且道三十三天六十六州相去多少、具眼者辨取、抑有一說、昔

宋建寧府有曰潘道者、一日忽見一和尚云、我是汝之舅、遂從之行、或時業

鏡臺前遊閻羅王々宮、或時寶蓮華上座彌陀佛々國、苦過則樂、穢盡則淨、無

所不至、和尚謂云、我非舅、汝祖造一地藏堂、塑我真像、昨因兵火、打蕩堂宇、

我金心銀喉盡底取去、今復得汝起庵塑像、我今救汝以報前恩、嗚乎潘道之

在建寧府、猶如自德之在奧津野也、彼此雖異、爲善則一也、則所得勝報、豈易

測乎、且夫天下之所以瓜分、盜賊之所以蜂起、地藏之所以再造、梵宇之所以

一新、皆三百年前爲宋人所說破了、錦上鋪花、又何言哉、教中曰、心無摧破、故

名地藏、心無邊際、故名菩薩、蓋無始劫來、衆生心內有一个地藏、六用門頭、日

夜放大光明、蓋天盖地、火不能燒、水不能漂、希有々々、奇特々々、敢請自德惟

自知耳、雖然如此、袖僧家、心生則種々地藏生、心滅則種々地藏滅、不生不滅

那个是端的、底地藏、咄且置這事、恭惟、

六道能化地藏菩薩摩訶薩、塵々刹々、熒々煌々、望其形也、袈裟覆肩、將謂證衆

和合之和尚、聞其名也、寶珠在掌、元來乘大願輪之願王、上求下化是爲急、內秘

外現不可量、釋迦彌勒二佛中間、受勅於正像末、文殊普賢十地以上、竝化於已

今當、寒者由是衣慈悲服、飢人由是飽菩提糧、善童惡童以屬指揮、二子有如双

白鷺、勝軍破軍以傳號令、六國平來兩翼霜、振金錫而三昧遊戲、括布袋而一切

包藏、五陰世間衆生世間、法報應如花弄影、分陀地獄頰浮地獄、感業苦似雪沃

湯、賊々自號阿闍提性、人々以擬等妙覺皇、耳目所及無物堪比、齒牙之論非愚

必狂、所謂巨壑涓滴、太山毫芒、去年八丁原頭觸忤八人威、已矣薪盡火滅、今日

文明三年雜載

二九九

万徳寺裏莊嚴万行會儼然木刻金相施者受者齊歸空處經之營之頓開寶坊、
 眷夫大聖示隱顯出沒寧于濁世經治亂興亡機感相應神異非常、立双眼云、山
 僧爲他點出眼睛則不屑大千界辨菴摩之杲(果)指座云、爲他安住座地則何勞方
 丈室容須彌之床群情類歡喜踊躍万象森羅讚嘆稱揚聊推淺見以舉大綱若
 約第一義莫認孟八郎祇如本光菴自德具足自己性德發明本分靈光翠竹黃
 花般若真如言々法羅峰頂說法青山綠水安居禁足念々忉利宮中道場如此
 薦得是名眞法供養其或未然不妨禮拜燒香看々日月照臨諸國土乾坤坐斷
 一封疆、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 二月六日

一、南圓堂新供大般若、昨日始行之一日也、卷數到來、大納言律師取進之、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 八月廿八日、雨下

一、明日於四恩院大般若若在之、良家衆立願云々、大納言律師違例之間、可出代
 官之由、自東門院申送云々、成業歟學道中、薦歟問云々、

〔大乘院日記目錄〕三 八月廿九日、於四恩院良乘大般若若在之、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 正月十三日

南圓堂新
供大般若
四恩院大
般若

慈恩大師
法樂五重
門

藥師法樂

結願

東寺安全
ノ臨時祈
禱

越智家榮
兵亂靜定
ノ祈禱

一、慈恩大師法樂五重門讀誦之、二月、三月、七月、閏八月、九月、十月、十一月、十

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 八月廿一日、雨下

一、十六日初夜藥師法樂、寶壽院殿被始之、

廿二日

一、藥師法結願、卷數寶壽院被持來了、被歸成就院了、

〔廿一口方評定引付〕四 正月五日

一、天下泰平、寺院安全、人法繁昌、庄園無事等、吉兆條々令披露畢、
 同八日

一、爲滿寺安全、當月可有臨時之御祈禱歟之由披露之間、來十二日兩所、千遍院
陀羅尼、鎮守 十三日、不動堂 慈可被勤修之由儀治定畢、則法會奉行方申送
 畢、

三月二日

一、去年立願之内、兩所西院、七ヶ日祈禱、明後日可有始行之由治定畢、
四日ヨリ

〔越知氏傳記〕和 大 文明三辛卯年天下大亂、依之根成柿村於宮寺、祈禱ト

シテ法花經千部讀誦碑文有、其銘ニ曰、

高サ四尺五寸

ノ、四寸五分

法花經千部讀誦ノ碑銘

南無妙法蓮花經千部讀誦
二月廿二日

家榮 敬白

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十一月十二日

一、隨心院本尊愛染、并聖觀音立サウ、八祖障子後障二、合十枚、極樂坊ニ預之、且爲祈禱也、

十二月十八日

幸德井友幸新曆ニ贈大乗院

一、節分祈禱撫物幸德井申出之、并新曆一見、追代二百文下行了、兩所八卦同進之、珍重々々、

〔觀福寺文書〕

總〇下

まきの、此ノのそ、御きたうさいてんあく御申あるべく候、此きにハ、ゆう、まんのせうかう、まいにちニいたし候へく候、七月八日にハ、い、うに、もねんころこと、ならいを、あされへく候、このふんをもつて、此ノ此、え、よみくう、い、おさ、い、おき申候、仍後日のため、ニ、一、ふてを、ま、ん、い、候、

文明三年の十二月十日

(國分宮内少輔)之胤(花押)

國分ノ總牧野下、阿闍梨同命、坊ノ祈禱退シムナカ

尋尊辯才天參詣

十一日

〔大乘院寺社雜事記〕

四十一 正月二日

一、辨才天參詣、日ノ條、同文ニヨリ、略ス、

淨土寺參詣

一、淨土寺愛染王參詣、〇七月二十五日、十月十八日、十一月十五日、

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月二日乙巳、雨

古市胤榮吉野參詣

古市參吉野云々、

六月七日己酉、霽

酉刻參福寺了、畑片山三郎、松若下八共十八召具了、

廿四日丙寅

一、參六地藏了、步行至福智院等參了、便宜之間參大間御所了、禪定院僧正隨心院僧正於清賢宿所見參了、有午飯等、瓜三對州進之、初見了、

〔經覺私要鈔〕

七十七 七月十三日甲申、霽

一、申刻大安寺墓參了、予ケサ、若者共少々召具了、已心寺并後已心寺、澄圓上

大安寺墓參

六地藏參詣、一、條兼良、フ、ノ、寓ヲ訪

經覺福寺參詣

まきの、此ノ此、え、う

右京、あ、さり、此、〇、へ

八十八道師也 三所墓所ニテ手向水念珠了、又參極樂坊了、禪尼墓、按察局墓在之、自其向禪定院了、今暫參大閣御所了、然後歸宅了、

〔經覺私要鈔〕

六七十 六月九日辛亥、齋

楠葉入道ノ凶夢
夢違ノ沙汰

楠葉入道語云、禪定院僧政覺正飯ヲ被食之由見夢、其飯菜ニ神鹿ヲムシリ散テ被食之由見之云々、以外之凶夢也、爲其身不可然之間、夢違ヲ沙汰了、可驚々々、

〔經覺私要鈔〕

七七十 閏八月十九日己丑、天曇少雨

此曉歟不明、爲松若見惡夢、仍違夢事沙汰了、

〔大乘院寺社雜事記〕

七四十 九月十六日

一、夜前夢相、自土佐關白殿御書被下之、畏入拜見之、

〔大乘院寺社雜事記〕

六四十 正月一日

尋尊一條兼良ノ寓ニ至リ賀ス
首ヲ賀ス

一、隨心院殿忠顯松殿以下光臨、
一、大閣御所ニ參賀、予律師各付衣五帖大略召具了、於御前一獻被下之、三獻、東御方香三具被下之、畏入者也、則退出、

二日

略○上 龍光院、三位入道、新左衛門、來、

四日

一、若宮神主、御師祐松、祐信、祐達、神主外ハ皆以見參了、各狩衣也、
一、松林院僧兼雅正來對面、夜ニ入來之間、盃計獻之、

五日

一、八幡殿師弟香臺寺殿御時進之、
一、古市筑前守來、各扇一本給之、

七日、大地振、後又小振

一、成就院ニ參申、御茶在之、○コレ後尋尊屢成就院ヲ訪フコト

八日

一、予安位寺殿經覺ニ參申、小衣板輿楹并二種進之、松殿參申之間同道、
一、東門院僧孝祐正楹一双兩種持參、付衣五帖對面、一器給之、杉原十帖、扇一本同遣之、

十日、小雪

一、大閣以下清賢法橋所へ御成、予參了、御緣疊也、四方衆九人、三方衆二人、折

尋尊經覺ヲ訪フ

兼良等清賢坊ニ至ル

敷衆五六人、夕御膳進之、一獻折以下濟々進之、精不精之衆相交了、

十一日

一、豊岡、豊田、同祐英來、盆給之、各扇一本給之、勸修寺中納言光臨見參申、已心寺坊主來同、

十四日

一、筒井來見參、杉原一束扇一本給之、

二月四日、夜雨

一、鷹司御方御所姫君入御、御共中納言尼、式部少輔在長、諸大夫一人等也、

廿日、朝雨下

一、寺務成就院へ御出、予參申、アレドモ後、經覺展、以就院ヲ訪フ略スト、

廿六日

一、筒井順永律師大間參申、御楯以下色々進上之、堯善所へ行向云々、

廿八日

一、大間俄入御、臆而還御、予御共申了、アレドモ後、兼良展、大乘院ニ至ル略スト、

一、鷹司姫君御歸、

勸修寺經
訪フ

經覺兼良
ニ謁ス

筒井順永
兼良ニ謁ス

兼良尋尊
ヲ訪フ

今春猿樂

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 三月二日

今晴猿樂上洛

〔經覺私要鈔〕七十七 八月十七日丁巳

猿樂今春來、於道場對面了、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 三月廿一日

一、昨日一乘院僧正、被出東北院坊、毎年儀也、鷹司前殿同内々渡御、折五合御楯等被持之、東北院僧正今日御禮ニ參申、紙三十束香合一進之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 七月二日

一、一乘院舍弟僧正□□御見參、建仁寺此間攝州池田邊ニ御座、

十日

一、陽明御所近衛内侍爲御禮參賀、付衣五帖張輿、力者御童子等小直垂、清賢裝舜各小衣參向前殿并大納言御對面、則退出了、此次中院山水一見了、陽明御楯二荷瓜十合進上了、

一、陽明御使竹屋來、對面了、

十二日

十二日

尋尊内侍
原ニ至リ
近衛房嗣
ス政家ニ謁ス

鷹司房平
東北院俊
圓並ニ尋
尊ヲ訪フ

隨心院殿
寶下使美
濃ニ下ル

松林院兼
雅兼良ニ
謁ス

明月一獻

成身院順
宣古市亂
榮並ニ尋
尊ヲ訪フ

一、成就院ニ參申、料足五十疋并瓜五合進之了、

廿五日、雨下

一、隨心院殿赤丸三乃國下向、御使也、

閏八月十六日

一、赤口丸自三の國罷上云々、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記

十二月十八日

一、赤丸自三乃國罷歸了、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月四日

一、昨日松林院僧正被參成就院御對面云々、

廿一日、雨下

一、十五日寶壽院權僧正下向、經丹後路自和州堺南着云々、明月一獻調進如

例、

廿三日

一、成身院順宣訪來對面、古市同來、

閏八月十八日

土用入
一、乘院教
玄兼良殿
寶等ヲ請
ジテ點茶
ヲ行フ

教玄兼良
ニ講ス

中御門宣
胤尋尊ヲ
訪フ

嚴寶菩提
山寺見物

一、吉良殿舍弟上總寺僧下向、南都一見用云々、

廿日

一、成就院ニ參申、吉良僧ニ見參了、

廿七日、自今日土

一、乘院茶事門主頭云々、大閣并隨心院殿渡御、東北院僧正、修南院主、東門

院主參申云々、

廿八日

一、昨日大閣、一乘院、東北院、修南院、東門院御步行、中院庭御覽云々、

九月二日

一、一乘院僧正成就院へ御參、予參會、於女中一獻等有之、

九日

一、中御門中納言光臨、大裏菊事被相語之、希有事也、

廿二日

一、隨心院殿井山寺被一見、御宿報恩院、明日可被歸云々、繼舜法橋參向申了、

廿三日

一、井山兩座より榼三荷、兩種并三百疋献隨門云々、又報恩院色々奉翫云々、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十月十四日、雨下

孝祐伊勢
ニ下ル

一、東門院伊勢多氣下向云々、

十月廿一日

經覺古市
ニ還ル

一、寺務渡御此間成就院ニ御座、今日古市へ還御、

十一月七日

一、筒井一昨日罷上、昨夕下向了、

十五日

德善ノ遺
跡給分ヲ
慶億ニ與
フ

一、一萬法師正陣之猶子慶億法師初參了、德善法師跡給分仰付之了、

十二月廿三日

兼良一乘
院ヲ訪フ

一、筒井來、於成就院見參、大間一乘院へ御成云々、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月朔日甲戌、

古市胤榮
經覺ヲ訪フ

一、古市胤榮來、居混布、折杉原一束、扇一本遣了、於綿者到來之時可遣之由仰

了、

二日乙亥

乞食僧及
巡禮者

一、乞食往來僧百七八十人來之間、餅一用途一文引之、此外巡禮者等至夕多

來之間、或餅或用途皆以遣之云々、

八日辛巳

松殿忠顯

一、僧正被來、一重衣綾ケサ、(忠顯)直垂同道、進一獻了、榼一双、賀喜一連、蜜甘一

籠被隨身了、北面少々在共、

立野信衡
同信幸

一、立野兵庫助信衡子息信幸來、能酒盃遣扇了、兩人同篇也、

十四日丁亥、時々小雪下

一、天川牛王二枚持來了、祝着頂戴了、

十八日辛卯、霽

東南院覺
尋

一、東南院覺尋僧都被來、榼二、白壁、賀喜等被隨身了、年々芳志也、

廿日癸巳、天曇小雪下

幸徳井友
幸

一、正三位友幸來對面了、花瓶一遣了、胡銅也、

二月十七日庚申、霽

政覺兼良
ニ謁ス

一、(政覺)禪定院今夕被參、大間御所云々、

十九日壬戌、曇

兼長經覺
ヲ招ク

今日禪定院僧正并隨心院等招請珍藏院慶英坊云々、
廿日癸亥、霽

自大閤御所罷出可遊覽之由及度々音信之間、朝飯後參了、色々有雜談、夕飯覺朝(東南院)ニ仰付了、共者楠葉備中(元次)松若喜久若計也、路間井上三郎召具了、

廿一日甲子、霽

朝飯於清賢法橋宿所可用意之由、昨夜伺申之間、不可有子細由仰之間、勸行後行向了、隨心院僧正、松殿侍從忠顯、召仕者三人來了、夕有點心、爰珍藏院慶英爲禮云々、來之間、其席連座了、酉刻歸隨心院寄留了、

廿三日丙寅、霽

早旦令勸行之後、自隨心院僧正方急可來、朝飯用意之由音信之間、罷向了、柴舜可用意之由雖申之、既如此之間、不可有其儀之由仰之、隨心院用意事、外結構之間、云煩痛、云懇志、誠思外事也、夕自對馬方更營給之、入夜有遊儀、

廿五日戊辰

一、有急用欲歸古市處、與昇下部山入之由申之間、無力以步行之儀、高綱手ヲ下向了、楠葉新左衛門(元次)、松若喜久若等召具了、於路次小雨、立寄楠葉家待霽、

嚴實經覺
ヲ招待ス

經覺嚴實
忠顯會合

豊原縁秋

滿中

一、乘院教
ヲ訪フ

九條政忠
至ル

信濃小路
兼益

之處、夕飯用意之由申間逗留了、夕飯受用後令歸宅了、

三月二日乙亥

一、樂人縁秋來、寺門訪事催促之間、以狀可申由仰了、

七日庚辰、霽

一、內府方若公女中等被來之間進小盃了、

十八日辛卯、旦雨

寺門雜掌重藝來、滿中ウサタ一盃持來了、令對面京都之樣被尋聞了、

廿日癸巳、霽

一、乘院僧正被向東北院坊云々、

〔經覺私要鈔〕(九條政忠)未刻 六月十九日辛酉

一、前內府入御、東南院

〔經覺私要鈔〕(信濃小路) 七月廿一日壬辰、天曇雨下雖不多、田地潤、衆人悅也、

一、大膳大夫兼益諸大夫已刻來了、昨日立九條宿奈良云々、仍今朝所來之

由申之、

閏八月廿八日戊戌、霽

兼良殿寶
招ク
教玄等ヲ

鷹司政平
東南院ニ
至ル

兼益東南
院ニ候ス

文明三年雜載

三二四

一、今日隨心院僧正被語云、昨日大閤隨心院、一乘院招請云々、東北院、修南院、東門院、宗算、弘僧、都、同前云々、

九月六日乙巳、齋

一、(鷹司政平)內府様申刻入御東南院、與昇一人召進了、一人ハ自東南院被進了、

九日戊申、齋

一、入夜大膳大夫兼益來、此兩三日東南院祇候、明日可罷上之間來云々、

十四日癸丑

先內府自東南院入夜還御、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 正月十日、小雪

一、自鷹司姬君御提一荷折一合送給了、

十一日

一、信貴山兩座牛王四本進之、書狀兩通自知院進之、於返事者折紙一紙ニ取

進之由仰知院方、

一、極樂堂万ヲラ堂給牛王一本、花餅一枚進之、

十三日

花餅

二月堂牛
玉

古市胤榮
物ヲ兼良
ニ贈ル
八朔祝

一、今日自安位(經覺)寺殿杉原十帖扇一本送給之、

二月廿一日

一、二月堂牛玉五枚、自東南院殿送給之了、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 七月晦日

一、自隨心院殿扇一本、貝三送給了、御返し明日可進上之由申了、

八月朔日

一、古市恒例所進、大閤へ麵一種、蓮根三本三籠、

一、御前一獻衆予(嚴實)隨心院(政覺)禪師、御房(兼雅)松林院僧正、同禪師(兼親)、大納言律師、成身院僧

都西殿龍光院(忠顯)松殿千若丸、役者孝承、事實、役人泰坊、如例供御所下行十疋、

中屋世間出世、三位入道、新左衛門等候了、

閏八月廿八日

一、自松林院松茸一盆送給之、○コノ外、東北院、已心寺等ヨリ、松茸ヲ送ルコトアレドモ略ス、

九月二日

一、興弘宇治粽一盆進之、

五日

宇治粽

文明三年雜載

三一五

兼良壽木
散ヲ尋尊
ニ賜フ

新論ヲ兼
良ニ進ズ

菓子

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十月九日

- 一、自昨日壽禾散服之、十五晝自大閣被下之、
- 一、新論自松林院方到來、則進上大閣了、

十二月廿六日
一、檜原恒例所進十合菓子到來、成就院取進之、

進上 御菓子事

合十合者

右十合御菓子進上狀如件

文明三年十二月廿五日

仲原景遠

同糠桶一進之、内々堯善取進之、

一、自東御方帶并筆二被下之、

一、自寺門料足十貫八木三石、爲御越年進上大閣了、陽明同之云々、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月二日乙亥

一、清賢法橋繼舜法橋、裝舜寺主、各榼一双、鏡一面、柿等給之、厚紙一束、扇□本遣了、於清賢者檀紙十帖、扇遣了、
○コノ後、鏡、混布、吳器、白壁、茶等ヲ、泰弘、教淨、已心寺等ヨリ送ルコトアレドモ略ス、

兼良及ビ
近衛房嗣
ニ錢穀ヲ
贈ル

神祇大輔
祐遠

經覺物ヲ
兼良ニ贈ル

兼良ノ返
詞

五日戊寅

一、神祇大輔祐遠鏡油物給之、神供間頂戴了、

十八日辛卯、齊

一、一條太閤へ榼一、白壁一合、柿一連、令進了、以書狀申之、

十九日壬辰、齊

一、大閣返事在之、

肇年之祝詞追日重疊、更以不可有盡期付申天下靜謐、朝家再興、寺社繁昌、佛神加護、不能左右、珍重存候、宸前披賀章、殊添氣味候、抑又一樽兩種送賜、則以賞翫、令祝着候、今春必々以拜謁可申承候、千甚々々、恐々謹言、

正月十九日

御名

表書云、兒御中御報

一、樂人緣秋朝臣來、寺門訪事、舊冬付供目代雖問答、終不事行迷惑云々、猶罷向供目代所、可催促之由仰了、

二月十一日甲寅、雪下

一、自藤原道場給狀、一昨日自河内罷歸候次、出雲路より榼一荷、并餅一盆、賀

喜一連進之、則有狀有使云々、明日可返之由仰了、依及晚也、

十二日乙卯、霽、餘寒今日聊和了

出雲路返事書遣了、楯以下不思寄之由仰了、

三月三日丙子

自古市赤飯一鉢、ハ、コ餅一鉢、一瓶給之、仰祝着之由了、

廿三日丙申、霽

一、裝弘僧都靈山寺餅少々給之、名物云々、仰賞翫之由了、

〔經覺私要鈔〕

七十 四月十一日甲寅、天曇

一、草餅一盆、東南院賜之、賞翫了、

十四日丁巳、天曇

普賢院裝弘僧都豆飯一桶、菌豆一鉢、引茶一種賜之、賞翫之由返答了、

五月五日丁丑

一、古市一瓶、赤飯一鉢、茅卷少々賜之、仰祝着之由了、又胤榮家則、萩宗正室重

榮、藤原春童丸各給赤飯畢、

六月朔日癸卯、霽

ハ、コ餅

靈山寺餅

草餅

豆飯
引茶

赤飯
茅卷

唐梅

筒餅
麥餅

銘酒

白布

經覺白布
ヲ鷹司政
平ニ進ズ

胡銅花瓶

硯
人丸畫幅

一、泰弘權寺主唐梅一鉢賜之、仰賞翫由了、又木阿少々給之、

二日甲辰、霽

菩提山有俊僧都筒一、竹子一束賜之、仰遣賞翫之由了、又西忍入道麥餅一

折給之、珍之由仰了、

〔經覺私要鈔〕

七十 七月廿一日壬辰、天曇、雨下雖不多、田地潤、衆人悅也、

一、菩提山報恩院有俊僧都隨分酒由申之、筒一給之、賞翫之由返答了、

廿八日己亥、霽

一、一切經納所英算法印白布二端入蘿箱給之、有限所役也、

廿九日庚子、霽

一、白布一端進內府樣了、爲御帷也、

八月朔日辛丑、霽

一、古市兩瓶、蓮根二本、色々一鉢賜之、仍白布一端、杉原十帖遣了、

一、自門跡三種茶、檀紙、ヲ賜之、胡銅花瓶一ツ、ヲ遣了、

一、自隨心院硯一面、隱家唐扇一本賜之間、繪一幅、人丸、白布一端遣返了、

澄文院經譽僧都參、兩種賜之間、白布一端遣了、

打輪

一、清賢法橋白布一端、杉原十帖給之間、胡銅花瓶一、同臺一遣了、
一、秀深上總房來、打輪一本賜間、茶十袋、扇一本遣了、
十五日乙卯、天曇

一、神人彌七神供一膳給之、頂戴之由返答了、於魚類者進前內府御方了、
(九條政忠)

廿六日戊寅、天曇、火曜卯戌時

柘榴

一、就井山六所三經事、禪衆法師良覺少楮一、柘榴一鉢賜之云々、

稻檣筑前

一、稻檣筑前亥刻松茸二籠賜之、誠以初物也、仰賞翫之由了、一籠進前內府了、

鹿鳴餅

一、八條三品子息宮內卿宥源鹿鳴餅一鉢給之、仰賞翫之由了、

大根

閏八月朔日辛未、雨、日曜未時

梨

一、自古市一瓶、一鉢、大根、梨以下給之、留守事也、殊爲痛之由仰了、

松茸

十一日辛巳、雨、水曜巳子時

髮籠

一、自長谷公坊松茸二籠給之、賞翫之由返事了、

松茸

一、松茸十五本入髮籠進大閣了、御悅喜之由自隨心院僧正被申送了、又前內

髮籠

府へ十本進了、

〔經覺私要鈔〕

八十七

十一月廿五日

文免帷

覺朝來、文免帷給之、誂故也、

薪

十二月四日

薪

一、平清水源左衛門木五束給之、薪用也、連々懇志異他者也、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四

七月朔日

若槻莊日

一、若槻庄日次瓜百廿合之内、今日五合到來、○コノ後、日次瓜十合、十五合、二合到來、コト、腰、アレ、ドモ略

次瓜

二日

恒例京上

一、恒例京上等瓜事來、十二日以前可沙汰進之由成奉書了、昨日下午知之、奉行

未補之間、信承ニ仰付了、

松林院卅合并十合 佛地院十合 一切經納所十合 □□□□□

成就院卅合 玄深□□ 孝承十合 專實十合

柴舜廿合 泰坊五合 松立院十合 小泉十合

古市十合 豊田十合 □□□五合 南郷十合

□□十合 立野十合 直安位寺殿ニ進之 □□□□

五日、大夕立

瓜

一、自東北院瓜五合送給之、

七日

一、瓜籠竹、大市、倉庄兩庄沙汰也、力者一薦請取之、御輿足分力者ニ支配之、慶
万、力陣、德力各一荷宛進之、

八日

一、瓜京上人夫今日召之、高田、横田、清澄、若槻院入、川合、大市以下參申、中二日
分也、延引了、

十日

一、豐田五十五到來、代廿八、

一、兩社瓜十合宛進之、如例、座法師三人、直垂、力者末一人、直垂、宰領御後見進
上作折進之、大宮ハ番神人ニ渡之、若宮ハ拜殿ニ渡之云々、

長谷寺瓜
森屋瓜

一、長谷寺瓜十合到來、森屋瓜也云々、

十一日

一、昨日兩社瓜事、自若宮拜殿申入之、近來ハ大宮方瓜モ納拜殿候て、自拜殿
大宮以下三方神人等ニ令支配之由申之、然者如例可沙汰旨仰付了、

楊木瓜

廿五日、雨下

一、楊木瓜三合御後見進之、瓜田地三反御許可也、造立以後檢使下向如其數
進之、

一、日次瓜三合到來、百廿合皆濟、但七合ハ若槻庄沙汰人ニ免之了、畏入了、折
代ハ北面衆中ニ致其沙汰了、

瓜進納ヲ
南郷ニ督
促ス
緣舜之ヲ
押收ス

一、南郷所進瓜事、于今無沙汰之間、致催促之處、緣舜法眼方ニ納之云々、以外
次第也、自宸初奉行相替旨仰遣之處、背御下知條不可然、彼躰事ハ於于今
者非奉公分之間、爲南郷方可責返事、雖爲何遍公方向事ハ可致其沙汰旨、
嚴密成奉書了、爲事實者緣舜之沙汰次第、希代事也、

廿八日

一、近江瓜一盃懷英進之、(ア、)作也云々、

〔經覺私要鈔〕

七十七 七月四日丁亥

一、供目代被召仰之條、畏存之由申之、榼一双、素麵一折、滿中一折、蓮根三本、瓜
一、荷給之、賞翫之由返答了、

一、幸德井三位友幸瓜二籠給之、自愛之由返答了、

素麵
蓮根
瓜

近江瓜

廣繼瓜

五日戊子

長鞞(柄カ)南廣繼瓜一荷給之、仰賞翫之由畢、

八日辛卯

一、大間へ瓜一荷進之、

九日壬辰

內山中院道秀僧都五色一荷賜之、仰賞翫之由了、

一、東北院僧正俊圓五色二籠給之、不思寄之由以愚狀返答了、

一、明王院英算法印一切經納所役瓜一荷給之、相副一樽之處當年不給之、若

越州煩ヲ爲之由歟、不得其意事也、

一、曲川晴松男通數高田瓜一荷五十給之、賞翫之由返事了、

十日癸巳

一、寺領田付瓜二百廿五到來云々、畑所望間遣了、

十六日丁亥

一、小塔院瓜一荷給之、悅遣了、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十六 正月三日、小雨
六下

內山中院
道秀
東北院俊
圓
明王院英
算

曲川晴松
同通數
高田瓜

田付瓜

小塔院瓜

長岳寺聖
信忌日

一、(長岳寺聖信)釜口權少僧都忌日、持經者法華經一部讀誦、自去年十二月十三日之忌日
再興之代々門主等奉訪之、爲院家繁昌且二世安隱也、(穩)料所勾田庄平八名
年貢并澁谷三反年貢也、永可修之、

九日

一、十一日御忌日廻請、昨日專祐持廻之、其僧名下書一鵝所役也、廻請大納言
殿奉行成之、杉原一枚ニ書之、

御忌日米越田尻庄沙汰三石也、十口引之、此外風呂并粥料等當庄役也、無
沙汰之間催促事、連々自方々申入之、以定使加下知者也、

廿六日

一、(大乘院慈信)大慈三昧院殿正忌、法花經持經者參申、

二月五日、雨下

一、玄奘三藏忌日也、懃行、

十七日

一、當年三侯摩御忌日、料紙未到來間不執行之、

〔大乘院日記目錄〕

三 四月十七日、三侯摩御忌日始行、

忌日始行

三侯摩忌

玄奘三藏
忌日

大乘院慈
信正忌

〔大乘院寺社雜事記〕六十四

二月十九日、夜雨

藤原忠通
大乘院實
尊忌日

一、法性寺殿并後井山忌日、如去年始行之、廻請兼日成之、大納言律師奉行、

御承仕專祐、

正願院

奉唱法性寺殿并後井山御坊御忌日講問事、

講讚彌勒成佛經

講師大納言權律師

問者兼實得業

問彌勒成佛大乘經歎事

問唯頓唯衛事

講師兼親院

問者信承院

問彌勒下生之時人壽幾事

問普爲乘教事

右來十九日巳具於禪定院可被勸修矣、

文明三年二月 日

一、下文者納所堯勳沙汰也、渡御承仕、各切符也書之、立文之、講衆分四通承仕
分一通、

大宅寺納所下 兩御忌日御講問御布施米事

布施米

合三斗者 院家器定

右請僧四口之內一口下行如件、

文明三年二月十九日

納所判

佛供燈明
代米

大宅寺納所下 兩御忌日講問佛供燈明代米事

合二斗者 院家器定

右佛供燈明代米下行如件、

文明三年二月十九日

納所判

後鳥羽院
御國忌

一、同御忌日持經者二人參了、

廿二日

一、後鳥羽院御國忌、持經者一人參申、北圓堂供以下勅願天皇也、當門跡殊更

可奉仰之、

三月廿一日

弘法大師
入定日

一、今日弘法大師入定日也、東寺長者未補也、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七

七月二日

一、持經者一口參公、鳥羽院國忌、春日東御塔等御本願也、

鳥羽院御
國忌

文明三年雜載

白川院御國忌

七日
一、白川院御國忌、持經者參申、春日一切經等本願、於當門跡可奉仰之者也、
十一日、雨下

後深草院御國忌

一、持經者三人參申、來十四日大乘院忌日、十五日後深草國忌禪支院分也、
書十五日ノ條御國忌ノコトヲ缺ク、

十三日

一、今日寶峯院御忌日也、恒例七ヶ日大般若、供料無沙汰之間不始行、以外次第也、持經者參申、九條大僧都教尊御忌日、持經者同參申、合二人、

大乘院尊信忌日供料到ラズ
大乘院教尊忌日

〔經覺私要鈔〕

七十 七月十三日甲申、霽

寶峯院尊信正忌也、先之龍花院新田料所ニテ、自七日有大般若經、當時小泉無沙汰之間、大般若經退轉歟、可歎々々、仍以理趣分奉訪了、

大乘院尊信正忌

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 七月十四日

一、大乘院法印隆禪御忌日、於放光院修之、釋迦多寶之二佛供養、僧膳料楊本庄沙汰也、下文御後見出之、御承仕明恩、此外代々院主等益供、於御後見供之、楊本庄同益供米也、又西大寺大僧供方五百文、同庄沙汰也、八木ハ出雲

大乘院隆禪忌日
釋迦多寶二佛供養

二條大僧正忌日

庄沙汰也、送彼寺又大乘院方益供染米、楊本庄沙汰、御承仕明恩自兼日請取之、供諸堂用也、

廿一日、雨下

一、二條大僧正忌日、持經者一人參（候）河庄東法橋、北圓堂檢校主也、

廿七日

一、賴尊法印忌日、持經者一人參申、勾田庄寄進主也、

一乘院賴尊忌日

八月三日、雨下

一、今日日本願淡海殿御忌日也、持經者參申、

淡海公忌日

〔經覺私要鈔〕

七十 七月廿八日己亥、霽

一、八月三日御忌日之廻請中綱持來之間、令加判遣了、

同上廻請

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 八月廿五日

一、去十六日後內山御房忌日、持經者一人參申、

大乘院尋覺忌日

九月十九日

一、已（大乘院孝覺）心寺御房御忌日也、持經者一人參申、去十五日ハ龜山法皇御國忌也、持經者一人參申云々、

同孝覺忌日
龜山院御國忌

廿七日

一乘院中
僧正忌日
伊豆僧正
忌日

一、贈僧正御忌日、持經者一人參申、去廿一日一乘院中僧正御忌日、廿五日伊豆僧正御忌日、各持經者一人參申畢、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十月九日

正曆寺兼
俊ノ母中
御門氏忌
日

一、明日十日中午御門殿、井山本願御母儀御忌日也、今日持經者一人參申、

十六日

藤原鎌足
忌日

一、大職冠御忌日也、無擬講經讀誦之了、

廿七日

年内忌日
持經者等
布施米

一、本年中御忌日以下持經者方布施米一石三斗八升、以勾田平八名等年貢內下行之、法花經四十六部也、

十一月十一日

大乘院教
信忌日

一、(大乘院)教信禪師忌日、持經者一人參申、

十九日

菩提山兼
俊忌日深
密講

一、於一乘院長講堂、井山本願深密講始行、每年儀也、今日講師專嚴得業、一講二問客一人重難也、御布施米五斗宛云々、不謂自他門被請之、同御佛事於

御門跡深密八講修之、專嚴得業參勤之間、一乘院方講問時尅下之、先以八

講ニ參申了、

一、深密八講廻請兼日成之、信承奉行之、御承仕良祐相催之、八講辰貝定也、事畢後下文引之、於良家分者所從ニ渡之、住僧分當座ニ成之、下文納所專親沙汰也、厚紙三切、一枚立文也、

下 御忌米納所

合貳斗者 院家器定

右御講衆八口之内、一口下行如件、

文明三年十一月十九日

納所判

下 御忌日米納所

合壹斗者 院家器定

右御忌日佛具燈明代下行、

文明三年十一月十九日

納所判

裝束付衣、白五帖

正願院

文明三年雜載

講衆下行
米

佛具燈明
代

奉唱井山本願大僧正御坊御忌日講問事

初座講師大納言權少僧都

問者專嚴得業俊尊得業

問唯頓唯衛事

問大乘法味事

第二座講師專嚴得業

問者大納言權少

問真如無爲似實事

問果上許緣事

第三座講師兼親院

問者陽春坊權大僧都

問心異識同異事

問我於凡愚事

第四座講師陽春房權大

問者兼親院

問然是康晏事

問今門派他事

第五座講師顯舜房權律師

問者慶英院圓覺擬講
辭退所

問如來爲除事

問以顯多定事

第六座講師慶英院

問者顯舜房權律師

問稚作青諦事

問緣根定等事

第七座講師兼實得業

問者信承院

問第六唯攝事

問御一行中事

第八座講師信承院

問者兼實、

問佛現八相事

問佛果障事

右來十九日爲辰貝定書於禪定院可致勤修矣

文明三年十一月 日

一、持經者一人參申本願御忌日、

〔經覺私要鈔〕

八十七 十一月十九日

井山本願御忌也、如形奉訪了、

〔經覺私要鈔〕

七十 正月廿一日甲午、天曇日中後雨下

一、故大閤月忌也、備進靈供、讀誦壽量品了、二月、四月、六月、八月、九月、略同文ナレ

ス、
バ、
略

〔經覺私要鈔〕

六十 五月廿一日癸巳、雨下

一、故大閤正忌也、仍勝觀房禪勝房兩人招請能時了、

〔經覺私要鈔〕

五十 正月廿六日己亥、齋

一、今日先師忌日也、禪尼正忌也、仍召請伯書記、勝觀房、禪勝、修阿四人能小飯

了、後有餅等、

二月廿六日辛巳雨

(大乘院孝圓) 故御房并禪尼忌日也備進靈供讀誦法花品了、○四月、五月、七月、八月、閏八月、九月、十一月各二十六日ノ條

ハ壽量堤婆兩品讀誦トアリ、

三月廿六日己巳

故御房正忌也、伯書記并當坊僧三人請之能時了、以次故大閻靈供并禪尼同備進之、

同正忌

〔經覺私要鈔〕

五七十

二月十一日甲寅雪下

一、新宮忌日也、如形奉訪了、○三月、四月、七月、八月、閏八月、九月、十一月各十一日ノ條 竝ニ同ジ、

新宮忌日

〔經覺私要鈔〕

六七十

五月十一日癸未霽

一、依爲新宮正忌、大佛經ニ少事引用途畢、是年々儀也、

同正忌

〔經覺私要鈔〕

五七十

二月十八日辛酉霽

(大乘院孝尋) 一、後已心寺月忌也、如形奉訪了、○三月、七月、閏八月、九月、十一月、各十八日ノ條 竝ニ同ジ、

大乘院孝尋月忌

〔經覺私要鈔〕

六七十

四月十八日辛酉天曇

一、今日後已心寺御房正忌也、如形奉訪了、

同正忌

〔經覺私要鈔〕

五七十

二月廿二日乙丑小雨

太子正忌

一、今日太子正忌也、可懃行之處令忘却服香草之間不叶、業障之至口惜者也、是へも隨心院同道了、

〔經覺私要鈔〕

六七十

四月七日庚戌霽

今日乳母正忌也、每年忘却處、當年自兼日思出之間、備靈供請三人、營作善了、

九日壬子、霽

一、內山本願正忌也、如形奉訪了、

大乘院尋範正忌

廿四日丁卯、自昨夕雨下、今日終日下了、甘雨也

一、普廣院贈大相國御忌日也、如形奉訪畢、○八月、九月各二十日、

足利義教忌日

五月廿四日丙申、霽

普廣院御忌日也、如形奉訪了、古市胤仙又以同篇也、

古市胤仙忌日

〔經覺私要鈔〕

八七十

十一月廿五日

○上 田樂頭人覺乘、廿七日親父忌日也、

〔大乘院日記目錄〕

三

五月九日、正徹書記十三廻云々、長祿三、

〔親長卿記〕

二

八月廿七日晴、明日亡母禪尼十三回也、自去八日始精進書

田樂頭覺乘父ノ忌日
正徹十三回
甘露寺親長ノ母十三回忌

三部經書

鞍馬寺參詣

率觀婆供養

小倉續廣僧法華經ヲ頓寫シテ都婆ヲ率刻ス

本源覺性上座ノ冥福ヲ資ク

開山塔下ニ牌ヲ安ズ

文明三年雜載

寫三部經但於阿彌陀經者遣尊躰寺欽空上人制小施了令供養

及晚詣鞍馬寺三條少將實隆朝臣旅店子姊尼公彼羽林母堂明日執行作善之故也及

晚雨下參詣鞍馬寺少將同道

廿八日雨下鞍馬寺之僧五六輩來讀誦法花經

廿九日雨下時々晴自鞍馬寺歸宅依到來未到昨日予作善延引存外候也自

鞍馬寺歸宅

後八月廿二日晴自今日精進也來廿八日亡母忌月也去月十日也

〔補庵東遊續集〕

本源覺性上座率觀供養上座俗名藤野

三年一閏黃楊木佛性須觀時節因拈作我家無影樹團々落落挿蒼旻

日本國江州愛智郡居住奉菩薩戒弟子小倉源公續廣文明三年閏八月十

九日就于私宅供佛齋僧專為本源覺性上座資嚴報土法華王頓書者一部

率都婆彫刻者一本水陸妙供修於隔宿棧嚴秘章諷於散筵所鳩殊勛併以

助其冥福按上座肘腋之事繫公祖先自爾以降幾乎一百年也然而公一門

尙有作之崇者桃符之釘似不差矣豈夙離所感乎先是公為之立祠歲時祭

焉蓋宥其靈也今茲辛卯公又於祠前設闢拈法曰其一頓書法華其二供養

千僧其三彫刻千本率都而法華中其選則所謂今日所書也於是乎謀于永

源住持林際老人安牌開山塔下頂戴衣鉢改法名取師資禮表雜染儀特割

膏腴歸祠堂以奉香火其法事也老人皆代而行焉寔一時嘉會也嗚乎公之

薦亡盡美於此矣上座乘茲薰力多生冤對對方瓦解冰消頓出陰界直至覺場何

疑之有矣然則公福海彌深壽山彌高令子令孫千秋萬歲祝望不淺也東土

大乘經曰本源自性天真佛老人之命名々詮自性其不在茲乎山僧幸預此

會聊綴無義語以充率都供養云共惟

大圓覺性有源有本十法界心離垢離塵迷之者菩提煩惱々々菩提強言下是

凡上是聖悟之者毒藥醍醐々々毒藥孰管昔為寇今為臣碧眼胡僧得這箇九

年面壁黃頭老漢得這箇三轉法輪惟我本源覺性上坐得這箇處穢而淨在俗

以真華胄遙々類日東藤橘之性姓方芳聲藉々誇江左蘭玉之親譬諸忌皎潔蘊二

懷哉投譏口靈均夜市燈燃記肘生白刃之日露井石場感骨暴蒼苔之晨天陰

雨濕問之成鬼春祠夏禴敬者如神與其奉司命播物曷似近極聖同隣拜大寂

師受衣孟則會卽心卽佛會非心非佛就臨濟翁安名字則辨全主全賓辨無主

無賓翻王常侍之機軸超龐居士之比倫不待圓頂方袍而出家發揚緇衣禮樂

文明三年雜載

三三七

三三六

非于晨參暮請而行脚、拗折黑面鄰皴、莫愧長宿上座、豈齒游手閑民、加之抽妙經、叢手疾書、七枝菌菖頓發、整齋儀至心迎奉、六和苾蕪交臻、其傘蓋也、演暢清梵、其斛食也、盛滿時珍、眷常樂我淨功德、免胎卵濕化、漂淪失脚踏、破夙世冤家、論甚悟達珠報、晁錯之恨、驀口吸乾曠劫業海、討甚師子劍觸罽賓之噴、直得南往北來、遊戲三千刹界、東湧西沒、應現百億分身、着々真履實踐、時々吉日良辰、八月秋高一二三四五六七八辛卯歲暮、甲乙丙丁戊己庚辛、非心意識所卜度、無喉舌唇可縷陳、雖然如此、即今問上坐、作麼生是本來人、喝一喝云、試聽金剛王法令、太平無日不回春、

文明三年閏八月十九日萬年村僧橫川景三撰

〔親長卿記〕

三月十四日晴、自今日予逆修初七持齋也、

十五日陰、今日予逆修今日作善目錄在別二七日分也、持齋、女房同自昨日始之、同持齋也、

廿三日晴、逆修持齋也、當四、懃行目錄在別、

廿四日雨下、逆修持齋也、當五、如昨日、

廿五日晴、逆修持齋也、當六、如昨日、

廿八日晴、逆修持齋也、盡七日也、

逆修

四月十四日晴、持齋也、逆修當一周忌、勢至所作已前注之、參安禪寺法花經配卷、經表紙懸之、次參誓願寺、

十五日晴、持齋也、逆修當第三年、

五月八日晴、中持齋逆修、卅三虛空藏也、懃行如已前、

十五日晴、略、中次持齋、自今日又始逆修、已前始逆修、自初七日至卅三回、如形修之、無為修畢、與奪亡父尊靈分祈願了、今又始行之志、為亡母尊靈也、今日為

亡親、為誦經

初七日分、秦廣王、不懃行目六、真念佛貳千反、光明真言百反、又念佛六万反、妙

經八卷轉讀、題號、但壽量、品、觀音、經、真讀、九條錫杖六卷、夕方真念佛千反、光明真言百反、不

動名號等誦之、

十六日晴、逆修持齋為二七日分、初仁王作善之樣如初七日、

廿三日陰及晚雨降、今日逆修第三七日、文帝王也、法花經轉讀、壽量、品、觀音、誦、錫、仗、

六卷、朝念佛貳千反、光明真言百反、交殊名號百反也、持齋如昨日、

廿四日陰、逆修持齋也、今日當四七日、普賢王也、所作次第如昨日、

卅日晴、今日逆修持齋第五七日也、地藏王懃行之趣如已前、但地藏寶號千反

誦之、

六月十四日晴、略○中今日逆修百々日、觀音、平等王持齋也、作善次第如已前、但觀音名號百反誦添也、

十五日晴、逆修一周忌、都市王、勢至持齋也、所作如初日、誦勢至名號百反、

廿三日晴、今日逆修持齋第三年也、五道、阿彌陀佛、轉輪王、作善目錄如已前、

廿四日晴、略○中今日逆修持齋第七年分也、阿闍、作善如已前、

八月八日、風雨甚晚晴、今日始行予逆修初七日分也、秦廣王、不動、所作目六、已前、兩廻、

致沙汰、與奪、朝念佛千反、光明真言二百反、九條錫杖六卷、法花經轉讀、壽量、觀音、經、

亡父、亡母、畢、日中念佛六百反、晚景念佛千反、光明真言百反、不動名号二百反、法花經

書寫之、余行、自今日至來廿八日、精進、書寫無量壽經、亡母十三回之故也、百万

反自先日始行之、

十四日晴、逆修持齋第二七日分也、初仁王、釋迦、作善如初七日、

十五日晴、逆修三七日、

十八日晴、陰時々雨下、今日逆修四七日也、五官王、文殊、作善目六如已前、

卅日、雨下、今日持齋逆修六七日也、作善之目錄如已前、變成王、藥師、如來也

後八月十四日、雨下、逆修持齋、藥師、泰山王、作善目錄如先々、

亡母、爲
寫經

十五日、陰、逆修持齋百々日也、觀音、平等王、作善如先々、

十八日、晴、逆修持齋也、一周忌、勢至、都市王、所作之儀如已前、

廿三日、晴、逆修持齋也、第三年、阿彌陀、轉輪王、所作如已前、

廿四日、晴、逆修持齋也、阿闍、所作如已前、

九月八日、晴、逆修持齋也、十三日、大日、如已前、

十五日、晴、逆修持齋也、卅三回、作善之儀如已前、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 三月十八日

一、極樂坊逆修、自昨日始之、自今日又、大念佛也、如例年、唱道、大安寺、

〔大乘院寺社雜事記〕七十四 閏八月八日、雨下

一、於新禪院逆修在之、彼岸中東北院大僧正沙汰也、

十一日、雨下

一、持經者一人參申、逆修分也、

〔經覺私要鈔〕六七十 四月十四日丁巳、天曇

一、今日逆修爲初七日之間、僧一人供養、又十王本地不動明王之間、慈救咒千

反、卒都婆一本書供養了、并隨求陀羅尼千反唱之、

廿日癸亥、霽

一、今日逆修第二七日、十王本地、尺迦名號等唱之、又隨求陀羅尼千反、念佛等唱之、召請勝觀房能小飯了、

廿六日己巳、天曇

一、逆修三七日也、仍禪勝房一人召請能時了、十王本地、文殊咒千反唱之、又隨求陀羅尼、念佛等唱之、

五月三日乙亥、雨下

一、今日爲逆修四七日之間、十王本地、普賢咒千反唱之、又隨求陀羅尼千反、光明真言千反唱之、又念佛六万反唱之、又召勝觀房能時了、

九日辛巳、霽入夜雨下

一、逆修五七日、十王本地、地藏少咒千反唱之、又琰魔咒千反唱之、其外隨求陀羅尼、光明真言、念佛各千反、念佛六万反同唱之、

十五日丁亥、天曇

一、今日逆修爲六七日之間、變成王本地彌勒井也、仍梅多利名號千反唱之、又隨求陀羅尼千反、光明真言、并念佛各千反唱之、

廿一日癸巳、雨下

一、逆修盡七日也、十王太山王本地、藥師如來咒千反唱之、并隨求陀羅尼、光明真言、念佛各千反唱之、僧一人伯書記能時畢、

〔金峰山寺銅燈銘〕

和州下田住

奉造立燈鑑

大工左衛門助

奉寄進御油田七反

文明三年卯辛九月十一日

施主 淨 祐

妙久禪尼

〔奈良縣史蹟勝地調查會報告書〕

第二 金峯山寺銅燈

所在地名、奈良縣吉野郡吉野村大字吉野山、金峯山寺境內、

寸尺

基礎 高九寸五分 經三尺六寸三分

竿 長三尺四寸 經一尺六寸五分

中臺 一邊二尺四寸八分 高一尺一寸

大和金峰
山寺燈鑑

火袋 一邊一尺六寸五分 高三尺四寸五分

笠 一邊二尺九寸八分 高九寸六分

至自寶珠 高二尺二分

總高(至寶珠頂上端) 十一尺九寸四分

銅燈ニシテ、大體ノ形狀東大寺大佛殿前ニ在ルモノニ似タリ、二重ノ石壇上ニ建ツ、下重ノ石壇ハ六角形、上重ハ圓形ナリ、基礎及竿ハ圓形ナルカ、基礎ノ側面ハ六區ニ分チ、各區劃内ニ獸形ニヲ附セリ、上竿ノ部ニ左ノ銘文アリ、前掲銘文、

中臺、火袋及笠ハ六角形ナリ、火袋ハ火口ヲ除キタル各面ニハ、其中央ニ梵字アリシカ、明治ノ初年ニ除去シタリトイフ、當初ハ笠ノ各隅ヨリ風鐸ヲ垂下シタルモ、今ハ全部ヲ亡失セリ、笠ノ上部ニハ伏鉢請花ヲ置キ、寶珠ニ終レリ、請花ニハ四重ノ蓮花紋ヲ刻セルカ、下ノ二重ハ八葉復瓣、上ノ二重ハ十六葉單瓣ナリ、寶珠ハ球形ニシテ、四方ニ特ニ長キ火焰ヲ附セリ、創造ノ際ハ全體鍍金セシモノナランモ、今ハ殆ント全部剝落シ、僅ニ請花ノ一部ニ金色ヲ存セルノミ、基礎ヨリ寶珠ニ到ル迄創造ノ儘ヲ存セリ、

會津善明寺建立

〔異本塔寺長帳〕原題長帳 文明三年、會津舟渡邑會津舊事雜考、川洞徒壽長建於稻川 善明寺ヲ建、同樋渡邑藥師堂圓光坊、林泉坊、等覺本願地頭山内

武藏東泉寺供養塔

又七建

〔新篇武藏風土記稿〕木崎領 足立郡九村 東泉寺略 藥師堂藥師ハ慈

ラハ知

〔越前國名蹟考〕十二郡 興源寺 一向宗東、文明三年願祐開基、享保

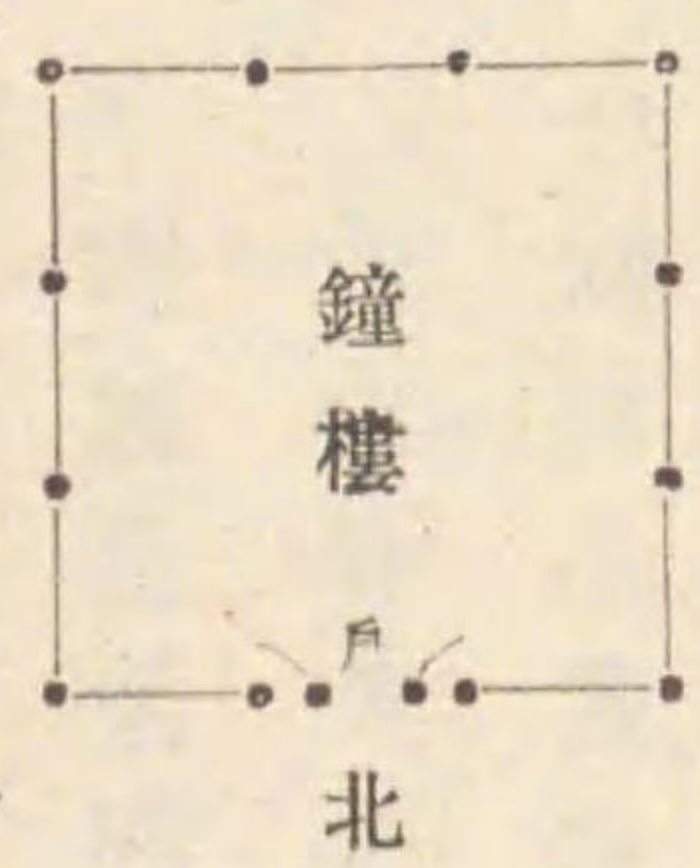
〔若耶群談〕下 小濱近邊佛閣 向島蓮興寺 文明三辛卯年建立、開山蓮如聖

〔妙法寺記〕舊題富士山北 斐甲斐都留郡 文明三、卯立正寺御影堂立、

〔日本金石年表〕 文明三、大和極樂院太子堂金鼓、

文明三、武藏金剛寺碑、

〔東寺私用集〕



立柱 文治三年七月三日、執行嚴慶十方勸進之、又貞和四年八月十三日、新鐘鑄之、此、貞和鐘ハ、西院ニ渡釣之、口ノ外三尺一寸五分、内ノリニ尺四寸有之、今度ノ亂ニ西院ノ鐘□之故也、文明三年卯辛九月五日釣之、西院ニ、

土佐長谷禪寺鐘銘

東寺西院ノ釣鐘

甲斐立正寺御影堂建立、大和極樂院金鼓、武藏金剛寺碑

越前興源寺建立、若狹蓮興寺建立

奉鑄土州大忍庄眞牧山長谷禪寺推鐘文明三辛卯歲二月日願主恒光物可
宗玄觀進沙門不分明賢大工秀守住持比丘

右香美郡大忍庄東川内羽尾村救寺平等院鐘銘也按物可恐當作物部
蓋字畫消滅也乎

〔新撰美濃志〕

大野郡

仁坂村ハ中津原の西ふりて揖斐庄南方の枝郷

あり尾張國海東郡甚目寺にかけたる釣鐘の銘ふ濃州大野郡揖斐莊南方
保仁坂三御社御室前天下泰平故也文明三年辛卯閏八月日願主善道德寶御代
官左衛門尉橋永久と彫つれたり古き地名なり同八十石二斗

〔經覺私要〕

五十七

正月十八日辛卯霽

人夫

一七郷人夫三人來京洛中
辻貝塚

十九日壬辰霽

菩提山ノ
木ヲ伐ル

一七郷人夫六人來爲柴遣井山

廿日癸巳天曇小雪下

橫行

爲伐木橫行三人相副彦太郎遣井山正願院邊畢一二本切來了

廿一日甲午天曇日中後雨下

一自東南院所望之間七郷人夫五人橫行十人十座五下遣了

廿二日乙未霽時々雪下

一畑今日遣榼於山名方七郷人夫三人所望間遣了

廿四日丁酉霽自日中雨

元興寺領人夫三人野田尼上□人夫花蘭人夫各一人召之遣井山可伐來
木之由仰了相副彦七了

二月二日乙巳霽自夕雨下

一菩提山ノ木ヲ爲伐燒木用七郷人夫五人宰領彦太郎遣了木共採用來了
四日丁未霽

召七郷元興寺領人夫五人菩提山柴ヲ沙汰立風呂了

〔經覺私要鈔〕

七十七

八月廿四日丙子天曇小雨相交日曜未時

一湯治用井山柴茹之召七郷人夫兩人了自今日五ヶ日分可召進之由仰了

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四

二月廿七日

一田舎奈良巡人夫事自來晦日毎日三人宛三ヶ日可進上之由諸庄之(マ、)可
下知旨仰之使者宗順○コノ後奈良巡人夫ノ
屢アレドモ略ス

田舎奈良
巡人夫

晦日、雨下、地振

一、七郷人夫五人、高田二人、新木二人參申、山水方、

三月一日

一、奈良巡人夫新木二人、河合一人、若槻二人、横田一人、勾田二人參申、領内二人、
夫、○コノ後、高田、新木、河合等八人、夫ノコト屢、アレドモ略ス、

十二日

一、院入一人、十座三人、田原十一人參申、

十八日

一、七郷五人、松林院より六人召給之、今日水ヲ漑山水了、

廿日

大宅寺人

一、大宅寺人夫二人參申、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十四 二月廿日、朝雨

一、秋篠與稻屋ツハ伐事出來、秋篠披官一兩人致害云々、

廿五日、雨下

衛門次郎
喧嘩重ノ

一、福智院郷人夜中注進之、於舜重專當之所喧嘩事出來、則舜重并法師各負

與昇

手了、衛門次郎沙汰也、各當所住人也、尻切作也衛門次郎逐電云々、則以定使并力者

慶万、彼兩三人住屋檢斷畢、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十七 七月廿七日

一、昨日自極樂坊書狀到來、已心寺與惣寺引違錢相論事破了、不及其力子細、以空圓仰遣了、誠ニ令興成者、寺門可滅亡事也、

九月廿六日

一、大安寺長老已心寺坊主惣寺與借下相論事、自去年予口入之處、不事行子細在之、今日長老極樂坊浄土寺光臨申合、大略無爲云々、則予出一行了、畏入云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十八 八月四日

一、近日和泉堺與此方公事在之、當殿沙汰云々、

九日

(亂榮)
一、一昨日與古市俄越智邊下向、高田與多武峯堺相論出來故云々、
一、一昨日修行院ニ亂入事出來、故經算之舍弟僧ヲ、當坊主經舜之舍兄ノ爲沙汰可打致支度也、彼僧安養院ニ走入全命畢、傳說分、故經算之借物三千

已心寺惣
寺引違
錢相論

大安寺長老
寺調停

和泉堺
大乘院トト
ノ公事

高田多武
峯ト境界
ヲ爭フ
古市亂榮
ル越智ニ至

借錢ヲ償
フ能ハズ
シテ債主
ト殺サン

西大寺喧嘩
ニヨリ
懃行闕如
本寺沙彌
ト争フ

秋篠和田
ト上鳥見
ヲ公文職
ヲ争フ

事破レテ
相戦フ

大西出雲
兩莊界ヲ
争フ

南殿莊
田莊ト確
執シ祭餅
ヲ致サズ

反錢違亂
ノ事ニヨ
スリテ争
論ス

公人主典
春日社頭
ニ於テ歿
傷

千手院窪
城ト事ヲ
争フ

正分在之、此借下ヲ、爲不可返、并可致害之由全也云々、希有事也、坊舍亂入、事不可然之間、可及寺門沙汰歟云々、且如何、彼僧ハ、爲經舜ハ伯父也、

廿四日

一、西大寺光明(眞言カ)英定沙彌喧嘩無殊事、以外珍事云々、人勢共馳集之間、懃行自然ニ令如闕(闕如)云々、開白以來、闕如例無之歟、伊賀岡寺沙彌與本寺沙彌相論、彼岡寺般若寺合力之間、成大儀了、

閏八月十四日、雨下

一、秋篠與和田山相論事在之、堯善秋篠ニ下向了、下地上鳥見庄公文職事云々、當庄之内、食堂瑜伽論田地之、則下司和田取沙汰之云々、田數ハ五十、七町七反小、近來反錢ハ六貫五百文、致其沙汰、公文ハ鵜山也、

九月十二日

一、秋篠與和田公事破了、自昨日合戰云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 九月八日

一、大西與出雲堺相論事、大西申入之、

廿八日、雨下、自夜前

一、鞆田祭餅九十枚到來、此内十枚定使分木阿彌ニ給之、可爲百枚之處、南殿庄分十枚未到來、彼南殿庄與鞆田庄確執子細在之故也、南殿庄ハ田岡知行云々、

〔尋尊大僧正記〕

三 寺社雜事記 十月十七日

一、學侶集會在之、光守律師與堯祐河合衆過言在之、希代事云々、是兩門反錢違亂事、堯祐、光弘、供目代與憲、宗算五師爲此三四人相語、光守之處、集會之様大ニ安ニ相違也、隨而光守腹立故、彼相語躰對堯祐法師及過言了、其座與弘折中、令立堯祐云々、兩門罰之由及其沙汰了、

十一月十六日、雨下

一、一昨日神方公人主典兩人、於社頭御供所及及傷畢、然間爲衆中住屋檢封之、重公人兩人所令進發了、嚴密之沙汰珍重々々、内々下臈分衆評定、如此題目、於社頭儀者、下臈分執行也、爲衆中沙汰不得其意上者、彼兩人事重而爲下臈分可給非人云々、且如何、此條可及珍事歟之由、慶英申云々、

十二月三日

一、千手院與窪城公事、此間色々及其沙汰、自祭禮以後、白土罷上、種々無盡千

手院教訓之、令落居之由、慶英方より申入之、珍重事也、落姿且如何、

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月廿七日庚午

東南院主
借物ニツ
キ衆中ヨ
スリ使ヲ付

一、東南院力者所へ、自衆中付使云々、院主借物事也、希代沙汰次第也、

廿八日辛未、雨

一、東南院力者所へ衆中使事、依愚老不肖如此之由述懷云々、不法事也、

廿九日壬申

經覺之ヲ
筒井順永
等ニ質ス

一、東南院公事、爲衆中儀之由申之間、相尋筒井之處、不存知由載紙面申間、以外次第也、仍山村武藏房胤慶來之間、相尋之處、是又不存知云々、旁以不可說之次第也、併吉田伊豆房、堯善兩人令扶持、宰相房祐濟如此沙汰歟之由面々申之間、吉田恩給者也、堯善又奉公者也、彼是存外無極者哉、

三月二日乙亥

古市ヨリ
東南院へ
ノ禮責使
シヲ立去ラ

東南院力者所へ、公人共六人、中綱二人、仕丁四人可罪科之由、仰遣公文目代之處、以長田筑前(家則)自古市於使者者罷立候様ニ可申、至公人御罪科被閣者、可畏存之由申間、一左右之間、罪科事可相待之由、重仰遣繼舜方了、一、自衆中集會所、雜掌ヲ可給之由申間、永家(民部)英實(大夫)房官兩人被遣之

處、來五日可一決之由申、於使先急可罪立之由下知云々、此子細自東南申(院カ)送了、

五日戊寅、雨下

東南院舊借事、今日於衆中可有結速之由令治定之處、又來七日之由令申云々、不可說事也、

七日庚辰、霽

今日東南院舊借事、可有衆中一決之由、内々申給之間、遣奉書於衆中了、以室沙汰衆、侍從所へ仰遣畢、爲室所緣故也、其子細盡理令判斷、書載子細於紙面可給之由仰遣了、東南事親類故也(院カ)

一、自東南院申送云、衆中儀、又今日も延引之由申云々、返答云、以前付使事、非衆中一烈之儀候、付理非糺決、何可依一兩人之不參哉、比與申狀也、此子細可被仰之由令返答了、

八日辛巳、霽

一、東南院被來、今度公事、自愚老方無如在衆カ(中カ)以下問答之間、其禮云々、本望之由返答了、又榼一双、菓子一盆被隨身了、此條隔心歟、可爲他人儀者、可在

東南院主
經覺斡旋
スノ勞ヲ謝

使ヲ付セ
シハ衆中
ニ一列ノ儀
ニアラズ

古市胤榮
飯高ヲ援
十座法師
柴屋聲聞
ト事ヲ争

文明三年雜載

〔經覺私要鈔〕

七十 八月四日甲辰霽

三五六

一、自門跡以北面、十座法師與柴屋聲聞有所論事、可召尋歎之由申賜了、
六日丙午

一、十座法師原少々來而、柴屋聲聞ト相論事訴申間、經胤(細)委細聞置、召山村可
問答之由仰付了、

閏八月廿五日乙未、霽

一、自(政覺)禪定院申送云、十座法師訴訟事、可召進奉行人、兩方理非令糾決令成敗
者可悅喜云々、可爲明後日之由返答了、

九月廿七日丙寅、夜甚雨

十座與柴屋立場相論事、自門跡有被申旨之間、一兩度仰遣山村處、今日胤
慶(武藏)房來、條々申所存旨之間、爲仰遣門跡、先日使北面可召給之由仰遣
了、

〔尋尊大僧正記〕

三十一 十一月十三日、夜雨

一、十座與芝屋公事間事、於安位寺殿被召山村御問答、仍四五日內被定日可
有啗文云々、使舜信法師、

經覺山村
ト問答

政覺理非
糾決ヲ經
覺ニ請フ

越田尻畑
森新莊ト
灌漑ニツ
論イテノ争

灌漑ノ順
序

〔經覺私要鈔〕

七十 八月十五日乙卯、天曇

能登岩井兩河用水事、越田尻と畑森新庄相論之由、公文目代遣人申給之
間、各同反數歎如何、委細可注進之由仰了、

〔經覺私要鈔〕

九 能登岩井河用水記

一、文明三年八月十五日、越田尻與畑森新庄、能登岩井兩河用水相論之由、公
文目代使者來申間、何反相論哉、可尋來之由仰了、於目代繼舜者、世間流布
違例以外之間、先後快然也、子息宣舜又所勞之間、若黨新左衛門尉申之云
々、(言カ)
○麻疹瘡流布ノコトハ、
七月二十一日ノ條ニアリ、

公文目代注進之

兩河用水取次第

初反

- 一番 越田尻庄
- 二番 京南庄
- 三番 新庄
- 四番 神殿庄
- 五番 三橋庄
- 六番 四十八町庄

第二反

文明三年雜載

三五七

一番 神殿庄

二番 四十八町庄

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 七月五日、大夕立

一、能登岩井兩河用水、今日神殿庄ニ給之、七日七夜此間新庄ニ給之云々、
十一日、雨下

一、新免用水事申入之、則法花寺別當法印方へ成奉書了、但小別當柴弘僧都方ニ申遣之了、

廿五日、雨下

一、兩川用水事、四十八丁給之了、仍自明後日神殿庄之第二反事申入之、仰遣之了、

廿七日

一、兩川用水事、神殿庄ニ給之、自余庄不申、内々百姓等令同心次第ニ申入歟、不及是非之相論之由、公文目代相語者也、珍重事也、

〔經覺私要鈔〕

七十 八月十八日戊午、天曇申刻大雨下、甘雨云々

一、自辰市寄大安寺云々、仍遣人大安寺尋了、

廿日庚申、天曇小雨

辰市某大
安寺ト境
ヲ爭ヒ相
戰フ

一、自辰市寄大安寺有合戰云々、境相論云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月廿一日、雨下、十八日

一、昨日自辰市押寄大安寺終日合戰子細何事哉、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 正月五日

一、風呂在之、倉庄役也、湯具以下色々御後見調進之、

一、大間入御、楹一折被下之、東御方御楹一種被下之、風呂以後一獻進之、

七獻加果子八獻也、御前衆、

御所、若君兩所、東御方、惠林寺殿、直志院殿、隨心院殿、予禪師、(政覺)三條殿、龍光院、(順宣)成身院、松殿、大納言、律師、兵衛佐、祐侍者、清賢、(尊譽)

配膳衆

大納言、松殿、孝承、專實、泰坊、慶藤、酒奉行、良祐、一獻方、專祐、良覺、專觀以下、取繼上下北面并道、(世説)

入夜テ還御了、

二月二日

一、風呂在之、小吉田庄役、京都衆皆以渡御了、

風呂

風呂
一條兼良
等之臨
獻酬

酒奉行

三月三日

一、風呂在之、松林院殿、大間以下入御、櫓等被持之了、祝着畏入者也、○コノ後、兼、畏之
二、臨ムコトア
レドモ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月廿七日、小雨

一、當月風呂勾田庄、小大田庄兩庄役也、行事ニ昨日相尋處、各致其沙汰云々、
風與可仰旨加下知者也、行事賢春、

閏八月八日、雨下

一、北面方安位寺殿御風呂事、百疋并果子一盃進之云々、

〔尋尊大僧正記〕

三 寺社雜事記 十月廿日

一、精進風呂今日立之、專祐ニ仰付之、

十一月廿三日

一、風呂上葺事仰付之、葺手三人、七郷人夫三人召之、風呂釜ノ尻破損間、番匠一人召之、

廿五日

一、風呂在之、此間作事加修理、今日立之了、大間渡御、東門院參申、茶以下兩種

精進風呂

風呂釜破損

修繕

鷹司政平

古市胤榮
精進湯

茶湯

覺朝病者多キニヨリ風呂ノ所役ヲ免ゼラレンコトヲ請フ一獻調進ヲ命ズ

持參、

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月十九日壬辰、霽

一、立風呂、内府様、東南院同道申候、○コノ後、屢、政平等ノ之ニ臨ムコトアレドモ略ス、
卅日癸卯、霽

一、自風呂上後、進供御以下於隨心院僧正了、經譽僧都令相伴了、予同食之畢、

三月卅日癸卯、霽

一、古市爲參吉野、此風呂用精進湯云々、

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月廿三日丙寅、天曇

自此道場燒風呂、知識ヲ入云々、於風呂有茶湯等、知識上テ後予入了、可入歟之由勝觀依申之也、

〔經覺私要鈔〕

七十 閏八月朔日辛未、雨、日曜未時

一、覺朝并善賢兩人道場マデ來申云、北面潤月事、於門跡風呂者、以一度可被閣之由歎申間御免候、其故ハ、北面或其身病氣候、不然者ハ、妻子等皆依此違例及浮沈候、可被察下候、以哀憐之儀、此への所進可有御免由面々歎申云々、返答云、更以非可立由、慥一獻事可調進之由返答了、只今病氣者良鎮、

舜專、良祐、順圓、兩人計也、悉以雖病氣等、何有限所役可申子細哉、既一兩人病氣非可申子細事者也、於門跡儀者、恣御申沙汰者之間、惣ヲ雖被閣可爲申沙汰者所存者也、於此儀者曾以不可依其事也、○疫疾流布ノコト、ハ、月十六日ノ條ニアリ、

五日乙亥、雨及數日不霽、珍事云々、木曜午丑時、

一、北面潤月一獻事、善賢來色々歎申間、以百疋分只今事者可閣、後者曾不可成其例之由仰付了、

七日丁丑、天曇、土曜辰巳時

一、北面潤月一獻事、今日用途百疋折一合、餅以下進之云々、不可爲以後例之由仰了、一獻事、堅雖可責伏事也、依病氣以下、上下北面皆以迷惑之由依歎申也、善賢持來了、

廿八日戊戌、霽

閏月風呂

一、於門跡有風呂、閏月風呂云々、予不入、

廿九日己亥、霽

鄉風呂

有鄉風呂入了、先內府樣無入御、(九條政忠)

〔經覺私要鈔〕

五十七 正月六日己卯

鄉湯

鄉湯始也、鏡一面遣之、入風呂了、

二月十五日戊午、霽

鷹司政平

一、有鄉風呂、內府奉伴入了、○コノ後、屢、政平、政忠ノ之、臨ム、コト、アレドモ、略ス、

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月十五日戊午、霽

有水湯

有鄉風呂用水湯了、東南院同被入了、爰東南院晴賀自夜前來云々、被同道畢、爲扈僧永家民部伴來了、兩人共以入了、

〔經覺私要鈔〕

五十七 三月十九日壬辰、霽

功德風呂

有功德風呂、內府奉伴入了、吉岡故東一十三年日也云々、(同カ)

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月十二日乙卯、霽

藥湯

功德風呂在之、早且予入藥湯了、上後藥共ヲトリ上テ人々入云々、其子細以當坊々主伺申者也、不可有子細之由返答了、

廿四日丁卯、自昨夕雨下、今日終日下了、甘雨也

一、有功德風呂入了、古市乳母逆修湯云々、

六月三日乙巳、天曇

有功德風呂、爲卅五日湯之間無穢儀云々、仍內府樣伴申入了、

三十三年
作善

〔經覺私要鈔〕

七十 八月四日甲辰齋

有功德湯之由申間奉伴前內府入了、村井彦次郎燒之云々、三十三年作善也云々、

十日庚戌齋

百々日

一、有功德風呂、地藏堂前坊主百入了、

〔經覺私要鈔〕

七十 七月十六日丁亥

念佛湯

一、念佛湯在之、入了、

〔經覺私要鈔〕

六十 四月八日辛亥齋

藥湯

一、自今日藥湯也、五木一草也、

十四日丁巳、天曇

一、藥湯至今日沙汰了、無殊儀之間、自愛者也、東南院同被入了、

〔尋尊大僧正記〕

三十 寺社雜事記 十月三日

藥風呂

一、安位寺殿於成就院藥風呂被始之、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 正月十五日、朝雨

一、祐秀香實房十五歲參門徒、珍藏院住也、吉田息也、永知同道之、孟給之、

廿五日

一、行英香教房十六參門徒了、珍藏院住、豐田相模公息也、於成就院對面了、

〔大乘院日記目錄〕

三十 正月十七日、祐秀香實房十五參門徒慶英弟子、吉田次男、

廿六日、行英香教房十六參門徒同弟子、

四月十一日、淵專舞聖房十五參門徒、元林院息云々、蓮花院住也、

廿一日、重海春良房參門徒、寬尊弟子云々、

六月廿五日、胤舜信禪房十六參門徒、胤清僧都弟子、

八月廿四日、忠弘淨專房十三參門徒、堯弘得業弟子、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 八月廿四日

一、忠弘淨專房十六參初門徒、堯弘得業之弟子也、

〔尋尊大僧正記〕

三十 寺社雜事記 十一月十八日

一、弘家光勝房十五歲當神主、息光弘弟子、兼實得業取立云々、今日出家一乘院門徒也、與實令同道參申、珍重之由仰了、

廿三日

一、中坊次郎出家、法名懷尊、長圓、加沙汰衆之由云々、爲禮來參申見參了、於于

弘家

中坊次郎

今者三代沙汰衆也、

懷尊長賢房、
中藤沙汰衆也、其緣房、懷尊長圓房、
沙汰衆、

長賢以來以東小田原院主米二石宛給之畢、沙汰衆三人也、竹坊、水坊、中坊也、神戶ハ隱居了、

三十日

一、清賢法橋息可成西座之由、筒井律師申請云々、昨日其子細申豎云々、珍重、可爲順宣明舜房、末子也、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月一日

一、十ヶ夜番(胤榮)古市自夜前參候定例也、

十三日

一、愛滿丸舍利殿出來、繪所松坊法橋沙汰也、

十六日

一、愛滿丸舍利殿新造、隨心院殿被延供養了、捧物進之畢、

晦日

一、夜前修行院大門放火了、何人所行哉、經算琳房、坊主也、遣堯善相訪了、殊更

修行院大門放火

舍利殿新造

興福寺夜番古市胤榮

沙汰衆三人

近日所勞以外云々、

二月六日

一、就經算違例、遣興弘、光秀、修行院養性事得其意云々、興弘相語、修行院門放火事、其躰於披露仁者、三十貫可給之、則躰可取進仁ニハ、百貫文可給之、四門高札自學侶打之云々、

一、去月長谷柳原衛門四郎罪科、檢料遣百疋也、半分ハ□行殊領之、半分五百

文進之、此内五十文兩定使、二百五十奉行分之由、斐舜申入之、

三月二日

一、去月廿九日中院參籠所々盜人入了、讀師以下衣物取之云々、寺門色々可

糺明云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 七月六日

一、南圓堂針□盜人一昨日召取之、於在々所々惡行者、東門院一乘院以下所々雜物取之由白狀云々、希代事也、

〔尋尊大僧正記〕三 寺社雜事記 十月廿五日

一、去六七月比召取盜人、南圓堂針隱取之者也、昨日切之了、

針盜人

盜中院ニ入ル

罪科檢料

放火者ヲ告グルモノハ三十貫文捕獲セシモノハ百貫文ヲ給ス

師資相承
血脉

〔三寶院文書〕

血脉

此血脉寫本押紙タル間、同押紙書之者也、

相承次第

大日	金薩	龍猛	源仁	聖寶
龍智	金智	不空	延命院僧都 元杲	小野僧正 仁海
惠果	弘法	眞雅	石山内供 淳祐	三寶院權僧正 同大僧正
	般若寺僧正 觀賢	眞雅	同僧都 成尊	三寶院權僧正 同大僧正
	松橋僧都 元海	眞雅	後高野、光宮院 道	北院御室 守覺
	佐々目僧正 賴助	眞雅	上乗院宮僧正 益助	開田准后 法助
	法隆寺上人 幸盛	眞雅	二品親王并下河原宮金剛壽院上人 益性	法助
		眞雅	益珍	賢尊

奥書

此奥書追本エ可寫之也、是御流三寶院大事也、此大事先年自寶嚴院聖清法印令相傳之、然彼本去年七月廿日酉酉寺炎上之時、於金剛王院燒失之間、愁傷無極之處、今于眞光寺有之、仍書寫之畢、〇醍醐寺炎上ノコトハ、二

文明三年七月十三日

法印權大僧都堯忠

新在家寺
住人數ヲ
選定ス

〔大乘院寺社雜事記〕

四十四

三月五日、地振

一、新在家寺住事、筒井色々取披露、衆中俄不可叶旨、同一決了、大湯屋砌、殊以肝要也、然而猶以筒井取披露、先記所望之時、不及評定、子細何事哉、可承云々、於種姓者坊官王寺之系圖、分明云々、依之於新坊集會所、衆中面々合點之處、當參十一人之内、六人ハ不可入旨、合點五人ハ可入之由、合點云々、此上者不可有一同之由、事必定也、然者筒井披露ニ可任旨、自集會所遣書狀成無爲了、去二日集會、此分一決了、大湯屋滿座衆會、殊更蜂起砌ニ、一定事、於筒井披露者、猶以不立用事、無是非事也、所詮ハ棟梁輩可披露事ハ、則存故實可承伏事也、上古自寺務披露題目如此也、

六日、雨下

一、春圓大身上事、筒井不存、傳聞之神妙事也、
一、幸德井三位方吉日相尋之、九日十五日共以可然云々、勸進狀到來了、
七日

資支

一、淨土寺資支來月ニ成滿云々、

〔經覺私要鈔〕

七十七

九月廿七日丙寅夜甚雨

一、村井資支楠葉備中守取之云々、千疋也、

〔尋尊大僧正記〕

寺社雜事記 十一月三日

一、堯善之坊資支八貫文到來了、

五日

一、今日古市千貫資支事、万歳方取之云々、

廿五日

一、成實資支始之、百部云々、

十二月十五日

一、定圓明長資支在之、十二疋分給之了、

〔大乘院寺社雜事記〕

七月十一日、雨下

一、自日中作事始之、大工一人參申、○コノ後、大工土工等ノ來ルコトアレドモ略ス、

八月十日

一、長谷寺役僧糧米事、自學侶五師方□□問答不事行之間、給主、東北院ニ

令申、此一事ハ最小事之間、可有御沙汰、自餘事ハ違亂中ハ不可申旨、學侶

出狀在之間、領狀之由自供目代方書狀到來、彼法師無罷上旨者、本承仕可

東北院ヨ
長谷寺
役僧ニ
米ヲ給ス

道場料理

隨其役之旨、一、薦願專法師ニ仰付之、得其意云々、
一、道場料理事、御承仕兩人以下、致其沙汰了、如例、次供目代并豎者兩人内々、
在所事申請之□□公所侍以屏風以下料理了、極内儀也、豎者宿ハ障子歟、
如例用意之、

雜具

雜具事

三尺十七間籠丸打 □ 小文四帖 圓座四枚 八足三脚

高燈臺四本 光燈臺二本 佛臺一脚 御影

磬臺一 佛前机三脚 高座二脚悉皆 □ 八帖

屏風一双半 花瓶火舍 花足八 佛具二鉢原一升宛、杉

櫃 花籠十枚 三度入二十 燈心

ハウキニエアリ 瓦硯二面悉皆 手水桶抄一 手巾一

巾布一 木短尺五枚 繼紙二卷 佛前果子六坏目代

□ □ 目代 長吏以下果子懸盤等目代 酒目代

坊官一人鈍色五帖表袴 侍一人鈍色五帖指貫 侍一人鈍色指貫 鍔二

加用人夫三人 力者少々召置之 燈戒 長床二

談義所上
其料

築地修繕

供御所渡
屋等上葺
修理
尋尊房中
衆ニ酒ヲ
給フ

閏八月十八日

一、英照來對面峯田ハ大略本談義屋料所也、今度蒞田ニ可無足云々、瓦屋談義所上葺事、自學侶可沙汰之、三百貫文可入云々、此内百餘貫ハ性舜房律師寄進之、明年春可引布施物之由、於本布施者各以故實可寄進云々、七十貫計在之、其餘百餘貫學侶可計略云々、

廿五日

一、南方築地御領内元興寺竹以下召之、十座十八加之、大工河原次郎行事專祐、良祐付之、番匠一人召之、

廿七日自今日土用十九日

一、築地如一昨日仰付之、

九月五日

一、番匠三人參申、至日中築地方成弁了、供御所渡屋小弁所上葺修理加之、
一、御房中衆少々召仕之、一獻給之、於北六間也、手長下北面輩如例五獻也、
同學 寬尊權大僧都 定清擬講 堯弘得業 寬專五師
兼實得業 宗藝 慶英 英照

俊藝

昌懷

寬乘

永專

懷藝加行者

守弘同

覺藝同

實英

宗信

英寬

隆胤

教實

指合之間不參輩

同學 賢英擬講

賢弘

寬乘

訓英

以上

七日

一、渡屋上葺今日成弁、番匠三人、小引一人、

廿二日

一、御堂南方壁沙汰之、自昨日日中大工參申、五ヶ所三人召仕之、此外一人堯善申請之、

廿七日

一、去十九日四恩院塔婆一乘院初而被拜見之、塔内舍利殿之法花經小本紛失了、御共衆所行歎云々、院僧等先以可造義云々、且如何、希有事也、御共衆所行條千万不可有事也、

四恩院塔
内法花經
紛失
院僧疑ヒ
アリ